

川柳塔

創刊大正十三年 通卷二〇八号



日川協加盟

川柳雑誌・川柳塔95周年特集号

No.1108

九月号

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

目次

- 麻生路郎アルバム
- 麻生路郎作品「旅人」 「旅人その後の作品」
- 麻生路郎文集・麻生路郎語録
- 麻生路郎物語（東野大八）
- 麻生路郎の人と作品
- 麻生路郎の作品「福寿草」
- 麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
- 麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201号

電話 06-6779-3490

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

静水さん95周年です

小島 蘭 幸

広島料亭で麻生路郎先生の短冊「さけとろりとろり大空のころかも」を見て、川柳を好きになられた石原伯峯先生、高校生の私達のために、わざわざ広島から来られて「川柳とは何か」をやさしく説いて下さいました。

すしになる一等米の男ぶり

蓮 生

川柳雑誌の不朽洞会員で、竹原川柳会会長だった山内静水さんの勧めで、私は川柳塔創刊号から誌友になり、19歳の時に川柳塔同人になりました。

その川柳塔が本号で95周年かと感慨にひたつていきますと、川柳初心の頃、お世話になった先達の温顔がふわりと浮かんできました。

夫婦相和して百まで踊らんか

静 水

「君、川柳は情熱だよ、川柳は下手でいいんだよ」、不朽洞会員になる時、麻生路郎先生から言われたこの言葉をことあるごとに引用されていた静水さんは、正に情熱の人でした。高校入学と同時に竹原川柳会に入会した私達五人に静水さんは、高校三年生の時、卒業記念句会を開催して下さいました。選者は私達五人が務めました。

まぼろしをつかむおろかをつみかさね

伯 峯

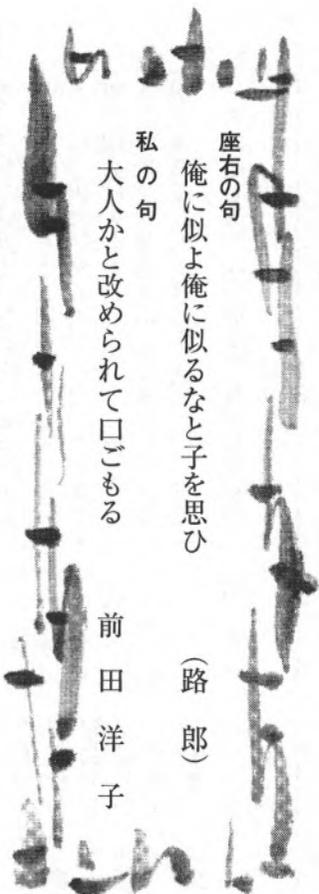
広島川柳会の会長だった熊谷蓮生さんは、私が初めて出席した広島の大会でやさしく声をかけて下さいました。蓮生さんの一声で私は今日まで川柳を続けてこれたのです。

菊活けてひととき欲を忘れたり

白 柳

川柳塔創刊のメンバーとして大活躍をされていた清水白柳さんは、超多忙の中、川柳だけはらの作句教室を担当されました。そして私の初めての作品を秀句に選んで下さいました。昭和57年9月26日に阿倍野神社で開催された清水白柳句碑除幕式と記念句会で静水さんは選者を務められました。私も当時三歳だった長女と一緒に出席致しました。

川柳雑誌社、川柳塔創刊95周年記念、第25回川柳塔まつりに出席した後、山内静水会長の墓参をして、「静水さん、95周年です」と、ご報告したいと思います。



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

大人かと改められて口ごもる

前田洋子

川柳塔 九月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「洞川温泉の夕」

■巻頭言 静水さん95周年です……………小島蘭幸…(1)

ふるさと……………前田 尋……………(2)

川柳塔(同人吟)……………小島蘭幸選……………(4)

自選集……………(42)

句集の森……………(45)

温故知新……………(45)

水煙抄……………川上大輪選……………(46)

軽文学に終る勿れ……………麻生路郎……………(63)

創刊95周年を祝す……………(64)

平本霧石人・出久根達郎・坪内 稔典・有栖川有栖・佐藤 岳俊

野沢 省悟・淡路 放生・八木 千代・木津川 計

橋高薫風句抄……………(83)

英語 de Senryu ⑧……………吉村侑久代……………(84)

せんりゅう飛行船 ⑩……………新家完司……………(85)

ふるさと

前田 尋

きりえを認識したのは一九六九年、大阪万博の前年、師である加藤義明氏との出会いからでした。当時全く一般的でなかった紙を切つて絵を作るといふ絵画表現に驚かされました。見よう見まねで創り出したものの、筆で描く絵との違いの鋭く強い表現力に魅せられてしまいました。それからほぼ五十年、何を描いてきたかという思いはあります。日暮れて道遠しということでしょう。

その過程二〇〇五年に知己を得ていた田中正坊さんに声をかけられ、当時の編集長西出楓楽さんともお会いして、川柳塔誌の表紙画を描くことになりました。その十年前には、「氾」という短歌同人誌の表紙画を依頼され作っていました。表紙を飾るということは、中を開く前に誰もが目にするところですから、非常に面映ゆく、緊張を強いられる仕事でした。川柳塔誌は、その時から表紙がカラーとなり、テーマはまかせせるが季節感だけは

誹風柳多留一二篇研究 75

愛染帖

新家完司選

(86)

檸檬抄「歩む」

水野黒兎・鴨谷瑠美子共選

(88)

一路集「便利」

西口いわゑ選

(92)

初歩教室「つなぐ」

山東日出男選

(96)

川柳塔鑑賞

高瀬霜石

(97)

水煙抄鑑賞

村上玄也

(98)

川柳塔WEB句会「吸う」

Sin・平井美智子

(100)

インスピレーション・ナビ

印象吟

大西泰世

(102)

八月本社句会

板垣孝志

(103)

句会燦燦

板垣孝志

(104)

各地柳壇(佳句地十選/両川無限・緒方美津子)

板垣孝志

(106)

九月各地句会案内

板垣孝志

(110)

柳界展望

朱夏・眞澄

(111)

■編集後記(ひとこと/木藤こみつ)

朱夏・眞澄

(126)

座右の句

灯油つぎ足し命継ぎ足し母の冬

(文子)

私の句

いつだってあなたの味方茶を入れる 西田美恵子

出してほしいという、私にとっては自由度の高い仕事となり、長年描いてきた日本各地の風景を描くことに決めさせて頂いたので。

毎月のメ切に追われている内、いつの間にか私にとって大きな柱となる仕事となりました。積み重ねは大きいもので、今号までに十四年間一七〇点の表紙画を描いてきたことになりました。昨年十一月には、これらの作品の中から五十点を選び「日本のふるさとを描く五十景・きりえ散歩Ⅱ」として小画集を発行することもできました。

風景を描き続けることについては自身の中にも様々に葛藤があつて、これで良いのかとの思いは常にありましたが、ようやくにしてふるさとを描くという私の視点が、この十四年間を通して自らの中に確信できたのではないかと思つています。

ふるさとは誰にもあるものですが、山に囲まれた清流のある地でなくとも、何かホッとすると、欠伸のひとつも出るところと言えれば良いでしょうか。スケッチして歩くことの楽しみは、そんなふるさとに出会えることが一番なのです。

川柳塔

小島蘭幸選

神戸市 細川花門

見舞客みんな元気でよく笑う

1%の奇跡に命賭けている

不死鳥になって千年生きてやる

月が好き黙って聴いてくれるから

妻以外話す人なし闘病す

生きてやる死ぬ死ぬ詐欺と言われても

尼崎市 山田耕治

手の平よりも甲を見つめること多し

どこからか亡妻が見ている物干し場

断捨離が本のところで行き詰まる

小母さんになったわが娘に叱られる

ヘルパーを頼めば亡妻はなんと言う

捨てましょう仕事の匂いするスーツ

鳥取市 岸本宏章

お互いが杖で八十路の坂登る

腹八分食べてお腹を喜ばす

怪しいと感じた電話には出ない

折ったまま万札出したことはない

山陰路二両列車がよく似合う

政治家は気楽かバトン子に渡す

八尾市 宮崎シマ子

粉を挽く母思い出す盆近し

老いぬれば大事なものは娘が管理

早寝早起きしても身体の置きどころ

喧嘩した夜も別々の部屋がない

鰻より鱧がおいしい土用の日

服だけは美人と同じ物を着る

奈良県 渡辺富子

遠吠えの野党無視する多数決

何もかもおぼろにかすむ藤の花

びしょ濡れのころへしみる母の文

来し方の海鳴り遠く聞くひとり

老いの愚痴スカイブルーへ解き放す

背を丸め過去がとぼとぼついてくる

米子市 吉田陽子

ふと匂う病院食に恩がある
再びのペンは脆くて折れ易く
句集広げて悲しい詩を拾い読み
梯子支える私にもある恐怖心
後期への貯蓄鰻を食べておく
お喋りもペンも薬に違いない

河内長野市 山岡富美子

絶え間ない火種ヒトとは国家とは
割り切れぬ思いを抱いて雨の坂
湿布する腰に頭に残高に
要注意ですね言葉という刃物
甘酒と一人遊びをして暮れる
歳月が攫う私のエトセトラ

橿原市 居谷真理子

鮎たちを成仏させぬうねり串
画材屋の画布鬮いをまだ知らず
娘より優しい婿と飲むビール
いい酒を飲んで握手をして別れ
まりちゃんと祖母ちゃんを呼ぶお祖父ちゃん
その笑顔のまま真ん中に立ちなさい

桜井市 安土理恵

相思相愛かけらくらいは残ってる
生返事聞こえなかったことなる
火の鳥がさわぐ今夏も酷暑らし

銀のあしあと昨夜も彼は来てたのね
マンネリでいい穏やかにすごせたら
後悔と反省忘れることにしてたのに

大阪市 谷口 義

スロモーション ノンフィクションの一日
大阪の駅弁大阪弁で食べる
不束な一日でした悪しからず
宿題を忘れた夢を今も見
百年前父は日傘を差していた
推敲をすると水分が抜けていく

倉吉市 牧野芳光

梅の実が呼んでいるのに雨続き
煩悶の谷間に夏椿が落ちる
夏が来た鮎百匹を光らせて
古希通過遠慮すること何もない
一杯の水にも神様が宿る
星の降る音が聞こえる一人の夜

熊本市 杉野羅天

独学の葦へ幾筋かの光
水だけで生きるか蘭の二十歳
飯を喰う日に一遍の夢を喰う
鈴生りの枇杷は安価な小粒なり
友分かつ老後の酒にある罰より
名誉捨て煩惱捨てぬ生き方で

大阪市 平 井 美智子
揚げたてのコロッケ 今日をチャラにする

がんばれと書いて私に出す手紙
ご褒美のように小庭に花が咲く

約束を信じて待っている豆腐
辻褃の合わぬ言い訳するカボチャ

今日は朝から「君に逢いたい」 注意報

奈良市 大久保 眞 澄

信号機に隠れて青を待つ猛暑

太るのほすぐ瘦せるのは長丁場

つまずいた感触もないのに転ける

埃では死なへん掃除よりご飯

初心者マーク杖にも貼って歩きたい

セレブの町値下げをしたら売れません

土佐清水市 辻 内 次 根

大掃除満足感に充たされる

何よりも明るい顔に敵わない

醒めてくるだんだん角が表われる

私に重ねて老いの背が哀れ

病院の二か所に籍を置いている

方々のほつれ自覚をして暮らす

寝屋川市 伊 達 郁 夫

荒れ狂う心に酒で蓋をする

腐葉土になつて悟りの命抱く

砂浜に素足の好きな夏がある

深緑を揺らすと夏が落ちてくる
人生の午後です私急ぎます

父さんに弱音吐いてもいいんだよ

河内長野市 村 上 直 樹

ツイッターうねり世界が地鳴りする

食べ放題飲み放題はもう勝てぬ

免許返上もしもの悲劇見ぬ安堵

無けりゃ無いで凌ぐ昭和の底力

一人でも独りにしない地域の輪

玄孫まで呼んで白寿の祝い酒

香芝市 大 内 朝 子

どんな風吹こうと母は味方だよ

紫陽花の花の終りに礼を言う

あの頃はよく働いた夢も見た

心配をかけぬ痛みに耐えている

G20和やかそうに見えたけど

生きてさえいればと活を入れる日日

東大阪市 北 村 賢 子

雨しとど昔おもむき有ったのに

濡れてまいろうなど悠長にしてられぬ

近頃は雨から生命守らねば

水溜まり飛んで虹見た幼い日

餌をやる私を待っている金魚

ポーと眺める里へと続くうろこ雲

京都市 清水英旺

混沌の世老眼鏡をくもらせる

戦争を重大と思わぬ愚かしさ

猫という家族ができて日日佳日

向かいのシート皆スマホする不気味

はや半年終わらんと咲く半夏生

京都市 藤井文代

疑問符が取れたがどこかかったるい

都会の夜ひとりじゃないが孤独です

勝てぬ勝負秘策は黙秘決めてます

異常気象生き抜く虫に学びたい

試食などさすから買う気失くなった

京都市 榎本宏子

廃線のトンネル歩く高齢者

京老舗大黒柱の匙加減

家庭騒動救った嫁の名演技

神仏にはじめて頼る孫受験

蜂だって益虫に載る逃がしとこ

長岡京市 山田葉子

見るだけでは足りず匂いも嗅いでおく

甘い香りバラは自分に酔っている

免許返上組で賑わうバスの中

儲かる話わたくしにだけ明かされる

子のためと思ひ込んでたおせっかい

八幡市 今井万紗子

老いの春ちよつと寄り道しませんか

日曜大工ネジが一本足りません

記憶の中あなたとわたし青いまま

有難や年金手帳拜んでる

手を振った君もこの世にもう居ない

大阪市 磯島福貴子

百年をどう生きようか蟬に問う

手の甲をつまんで計る脱水度

選びし人と山坂越えて半世紀

終の棲家迷い迷って墓石買う

本領發揮外語堪能雅子様

大阪市 井丸昌紀

小さく咲き悟り切れないかすみ草

いつも遅れるバス定刻に発車

座して待つ奇跡起こらぬものを知る

酔っ払って暴れてたのは別の僕

暑いやろ獅子のたてがみ切ってやる

大阪市 岩崎玲子

体の線崩れ手おくれどないしよ

歌が好き崩れかけたらマイク持つ

皿ひとつ増やして酒がまた旨い

趣味の本読んで頭を巡るだけ

わたくしは雑誌バラバラ性に合い

大阪市 内田 志津子

孫五人集う楽園もう修羅場

週三日脹れつ面の休肝日

想定の長寿計画崩れだす

ざりざりの家計ふんばる妻の意気

失敗を重ねる私雨季つづく

大阪市 宇都 満知子

お化粧も休んで今日はかたつむり

私の頸椎クーラーが苦手

私のようにぎこちない扇風機

たつぷりな黄な粉が欲しい蕨餅

その開花だれの為なの月見草

大阪市 江島谷 勝弘

日本中世界遺産になりそうだ

買ったけど男日傘をよう差せぬ

安心しろ葬式代は遺して

爺ちゃん「おしえてやるか」と三歳児

楽しみだいっぱい咲いたレモン花

大阪市 榎本 日の出

パソコンもスマホも無いがペンがあり

生きて来た証を残す五七五

焦るなと月は満ち欠けくり返す

梅干で朝からお茶を飲む余裕

千手観音すがつてみたい手ばかり

大阪市 榎本 舞夢

目が覚めて閃いた句が天となる

意地悪を言ってみたのに怒らない

長寿のおかけ思わぬ出会い二つ三つ

孫結婚五十回忌も無事済ませ

寝込んでも楽しく過ごす五七五

大阪市 大川 桃花

擬態に命掛ける昆虫サバイバル

コンピニのカメラに癖を見抜かれる

タピオカティー挑戦しようかと思う

頼ること嫌うあなたも昭和っ子

怒ったら家事が捗る母だった

大阪市 大治 重信

天皇の国に生まれて令和なり

会うだけで胸キュンとする憎い人

緑蔭に恋の匂いの二人づれ

男女して忍の一字のラブゲーム

同じ道違う女と来た海辺

大阪市 奥村 五月

妻仏文句と愚痴はもう聞けぬ

嫌な事忘れるための縄のれん

年金も酒の税金逃げられぬ

甲子園ビール売る娘もデカイ夢

祭りには若者帰る過疎の村

大阪市 小野 雅美

青い空飛べるはずだと羽繕い
添えられた手から寂しい人と知る

スマホ買い替えついでに消したあなたの名
切札を握り忠告聞いておく

問診票酒量はいつも控えめに

大阪市 笠嶋 恵美

カット行く新しい店気分合う
心臓の薬休むな医院から

お薬で支えられてる我が命
親子共尊敬出来る友出来る

若いやさしいおまわりさんの交番よ

大阪市 金川 宣子

どうなった孫のはつ恋気になるな
限りある老人力を使いきり

皆勤賞だけが自慢の健康児
夏休み名人入りの箸を用意する

笛太鼓一日続く夏祭り

大阪市 川端 一步

年金減だんだん文化遠くなる
川柳の種を拾いに朝散歩

平均寿命過ぎて年金元取った
自慢ばなし途中で気付き酔ったふり

貧乏はわたしのせいでありませぬ

大阪市 古今堂 蕉子

だからって人の所為にはしなさんな
細胞の目覚め乾杯の一口

少しだけ気になる事があり撫でる
芍薬を生けるリビングが輝く

激辛がマイルド夫も傘寿

大阪市 近藤 正

海わたる縄文人は丸木舟
選挙結果雑念消える蝉しぐれ

九条は世界の人がリスベクト
地雷禁止おぶちおじさん偉かった

G20 自国ファーストばかり寄る

大阪市 坂 裕之

ありがとうまだ店番はできますよ
独りでは出来ず仲間の手を借りて

慌てずにゆつくり行こうお爺ちゃん
意地を張り負けるものかと言ってるが

すつきりと片付け済まし旅に出る

大阪市 高杉 力

コンビニの近くが売りのワンルーム
あいまいに答えて後で辞書をひく

知りたくて君の故郷の地図を見る
いつだって貴方が主役自撮り棒

損をした話も一つ入れておく

大阪市 高杉千歩

歩くのを忘れた千歩です九十三
窓すこし空けてこの世の風をうけ
机上整理しない方が探さない
洗濯ものが揺れている子供さん見ない
ペンを持つ手が揺れる足動かない

大阪市 田中廣子

懐かしいおいしい祖母の手弁当
トランプの想定外の北渡り
年取ると想定外の鈍さです
上皇の種まき姿懐かしい
憎い北早く帰して拉致家族

大阪市 田中ゆみ子

ごきぶりを叩く瞬間妻は鬼
病母のために昔鶏飼っていた
負け戦今からできることもある
子に負ける日を楽しみに腕相撲
雨の日は翼たんで図書館へ

大阪市 津村志華子

青田すくすく新米出来るまで生きよ
ファミリー葬予約したのは五年前
幸せか業か戸惑う長寿箸
没もよしそれでも足の向く句会
白内障の手術その後は別世界

大阪市 寺井弘子

満タンのストレス消したバイキング
ライバルを無視したツケを返される
ときどきは妻と余命を語り合う
諍いを遠のけ朝のレモンティー
点滴の取れて希望というくすり

大阪市 寺本実

悟らずに生きてるうちが花だった
魂がふんわりゆれて散歩する
厳しさは暖簾の一步手前まで
ウソひとつ言ったださい入院日
反論はあるが覚悟が足りません

大阪市 栃尾奏子

私を貪り足らぬ鬼の爪
丸腰で挑んで愛というかたち
いのち対いのちだ蜘蛛の巣が撓む
出ない答えに魂を掻き巻る
私を使い果たして日が暮れる

大阪市 中井萌

尊厳死宣言をしてさあ生きる
素通りが出来ぬ和菓子の手まり
あん蜜で粘るおしゃべり三時間
十代の洗っただけの肌光る
現金派孫の小遣い医者通い

大阪市 原 田 すみ子

サミットは警官ばかり見る庶民
ほどほどの血圧になるまで計る
ドア閉まり軽い拒絶に会ったよう
夫婦ですぶつかる前に躲す術
葉袋 令和の文字を目の当り

大阪市 平 賀 国 和

想定外いつの間にやら古希を越え
クラス会米寿の恩師囲む古希
中学の友は格別若返る
戦争を知らぬ議員が勇ましい
軍の字が日本の上のしかかる

大阪市 藤 田 武 人

トップの座不安不安のひとり部屋
逃げ道を塞ぐと虎に変わる猫
まず蓋の一粒摘まむ老いの箸
ぎこちない笑顔にぎこちない握手
円卓の対角線が決まらない

大阪市 若 本 安 代

聞き上手濾過してくれる悩み事
ラストまで自分の足で歩きたい
精一杯今を生きます楽しんで
隠しても心の迷い映す文字
スイッチを切り替えながら風を読む

堺市 奥 時 雄

古代への鍵穴みたい古墳群
高みから眺めるだけの古墳群
千年の古木を見たい古墳群
ぎりぎりにならないと出さぬ助け舟
盆踊り市電の窓で見て帰り

堺市 柿 花 和 夫

居酒屋で飲めば普通の男です
ご意見はなどと結論出てるのに
独りメシテレビに返事してしま
アートだと言えばアートになる時代
清濁を合わせて飲めぬ私の胃

堺市 加 島 由 一

抹茶です千利休のつもりです
散髪屋どうやと思う顔をする
由緒あるサブリなんです卯酒
五月から万葉集を日に一首
朝飯は旅の漁港の定食屋

堺市 源 田 八 千 代

梅雨晴れ間あじさい寺を満喫す
ゲリラ雨に排水溝が追い付かず
除草剤と造花携え墓参り
見限って転職の孫東京へ
消費税アップに見合う政策を

堺市 齋藤 さくら

空梅雨でなかった今年ほっとする

幸せはこのひと時と肩を揉む

パリパリとおかきの音がなつかしい

消費税我慢の財布泣いている

タイガース勝った負けたと飲んではり

堺市 坂上 淳司

学童の涙か献花台の雨

便利さに負けてペダルを踏み違え

妻や子の意見無視して乗る車

喜寿傘寿祝いに返す免許証

車との決別老いはまた楽し

堺市 澤井 敏治

朝採れを配って歩くうわさ好き

横丁で誰か見ていたのが昭和

見て見ぬふりの暮らしの中にあるいじめ

盧生の夢見てたのだから早八十路

熟年の恋ふつつつと風の盆

堺市 遠山 唯教

聞く耳はまだいらないと足がいう

じいちゃんが好きと耳打ちしてくれた

健康を自分でつくりよく動く

遅しくひとりで生きる草を抜く

屋根葺替えこのしあわせを楽しまむ

堺市 内藤 憲彦

何事もなく一日終えて冷奴

年金の謎解けぬまま酒二合

どっこいしよで今日の悪事を見破られ

寄り道を万歩計には褒められる

有り金全部トラが優勝する方へ

堺市 矢倉 五月

日本人多いワイキキウエディング

旅帰り溜った新聞読破する

今年来ぬ母のくぎ煮にふと不安

返信メール絵文字ひとつでちと淋し

一病を笑いとばして友傘寿

池田市 太田 省三

ゴミ出しの古新聞が重い梅雨

駅弁を停車時間が許さない

害獣も元はベットのアライクマ

聴衆は候補者よりも進次郎

明日の空雨のち晴れと蛙鳴く

池田市 栗田 久子

うぶだった頃のわたしでないわたし

処方薬変わることなく未だ続く

共感を得たその後がむずかしい

巣立ちしたつばめはもはや戻らない

夏の日を待つかのごとく花火買う

貝塚市 石田 ひろ子

度忘れの僕の伴侶となる手帳

初恋を手繰り寄せてるさくらんぼ

耳ピアス茶髪無口のたこ焼き屋

七転びに耐えた涙が宝です

爪を切る生きる喜び噛み締めて

河内長野市 大島 ともこ

手に人と書いて飲み込む舞台袖

メタボですまず野菜からよく噛んで

体に良い物食べ過ぎてメタボです

親の意見身に染みてくる歳となり

借金も生きた証しと胸を張る

河内長野市 梶原 弘光

向こう気の強さ宥める膝と腰

しきたりと言う蹴飛ばすと怖いモノ

ほうふらはひとりぼっちを苦しめない

ニンゲンを立体的に見るゆとり

目が覚めて直ぐにエンジンかからない

河内長野市 木見谷 孝代

我もまた支柱頼りに生きている

キヤベツ半玉ザクザク食べて胃を浄化

雨ニモマケズ打たれ強いはポーチュラカ

軒下に移して花も雨宿り

てんとう虫ゴメン野菜の味方して

河内長野市 黒岩 靖博

我が家にも遂に來ました詐欺電話

息子ならラインをせよと追い払う

途中下車しては鈍行気まま旅

ほのほのと持ちつ持たれつ老夫婦

ほんやりと句作り妻は不安がる

河内長野市 辻村 ヒロ

知らぬまに母が手本の老いの日日

心まで支えられてる介護の手

童謡は認知の母も口遊む

まだ夢を燃やしていると伸ばす背な

夫婦らしい二人黙ってバス旅行

河内長野市 中島 一彌

亡父の分生きると言った母百寿

嘘も混ぜ慈顔の母とする話

目立たない人が持つてる目立つ才

遠い日の記憶で燥ぐクラス会

気が向けば腕立て伏せをやってみる

河内長野市 藤塚 克三

酔うと自慢ますます開く鼻の穴

効率化進め気づいた俺が無駄

お得意の呆けがピンチを免れる

妻は旅行ヘルパーさんに世話をされ

浮ついた心に掛ける鍵がある

河内長野市 森 田 旅 人

もうすこし休めやさしい雨の音

蝸牛うれしい雨後のティータム

雨後夕焼け受けて蜘蛛の巣シャンデリア

雨だれに包まれ繭にはいます

ソーメンに梅干し茗荷ネギ生姜

河内長野市 山 室 光 弘

霧雨が心の壁を責めてくる

細る年金太る控除のやるせなさ

ままならぬやる気について来ぬ体

便利さと怖さの二面持つネット

信じたい努力は俺を裏切らぬ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

飾るたび私が痩せていくようだ

がつがつと生きる迷惑なんですか

損や得少し忘れて生きなさい

遺憾だとそれは反省なんですか

ここ一番汗を流せと母の声

岸和田市 宮 野 みつ江

小田和正の追っかけをして信州へ

四時間を小田マジックの夢に酔う

小布施への旅五時間の濃密度

北斎と千波に触れる幸福度

北斎の赤富士風呂敷で持ち帰る

岸和田市 雪 本 珠 子

いい汗を自家菜園で流してる

無口でも伝わるハートあたたかい

はひふへほで済ます返事に気が抜ける

実のならぬ木でも木陰は作ってる

波の音微かに秋の気配する

四條畷市 吉 岡 修

まだ歩こいいこと待っておりそうだ

特大の笑い袋のある家だ

したたかなウイルスがまたパソコンに

ほちほちと手抜き之余裕出来た馴れ

カタログは取り揃えたが金がない

吹田市 木 下 敏 子

損得を離れのんびり振る手足

愚痴るよりラジオ体操して笑顔

晩学の趣味にやさしい友の顔

朗らかに今日も登れた八十路坂

がんばろう令和にこぼれないように

吹田市 野 下 之 男

困ったね日本人人口どう増やす

やりますね総理輩出口県

選挙かな知らぬ人から封書くる

さっそうとオレンジ電車ラストラン

カレンダーマルをつけたの年金日

高槻市 指宿 千枝子

尖りを止めて暮らしを丸くする
蝶が産む命みかんの若葉です
もりもりと若葉を食べている命

草花に老いた頭を遊ばせて
朝顔に清をもらってシヤンとなる

高槻市 片山 かずお

取り替えてスマホに遊ばれる後期
歳ですぬ四時になったら目が覚める
夏の午後お昼寝タイムとつてある

走るのはカンニンしてと喜寿の脚
この一年着なかつた服みな捨てる

高槻市 島田 千鶴子

鬱や薔薇まだ書けました大丈夫
決心が揺らぎ進まぬ墓じまい
人差指スマホに辞書によく動く
余所行きの顔で来ました京料理

シニアコーラス気分すつきりして帰る

高槻市 初代 正彦

聞き役に徹してお茶を入れ替える
目覚ましの温い麦茶よありがとう
紫陽花の自ら散らぬともよし
お爺ちゃん覚えてますかあの地震
断捨離を口にしたのは三回目

高槻市 杉本 義昭

一〇〇歳まで生きると励むスクワット
被災地の蟬は今年も自粛する
鍵握る男多弁になつていく
幸せの途中に段差あるらしい
退院の目処見えて来た七分粥

高槻市 富田 美義

年金で露命を繋ぐ朝の露
点滴に露命をゆだね残り道
孫が来てやたら財布を解く真似
ローン残スリムな財布そつと撫ぜ
東大出お相手なかなか見つからぬ

高槻市 富田 保子

余生とは只で優雅な雲を見る
目立ちたいシニアが赤い服を着る
暖かき陽のさす中に子等の笑み
おばちゃんの飴ちゃん一つ空気変え
ひよんな縁飾らず歩む句の仲間

高槻市 原 洋志

水割りと今日の暑さを語り合う
花嫁のヴェールに透ける青葉風
ト書き無視ここがチャンスと抱きしめる
生き延びてまた書き変えるエンディング
利用者の好みに合わすデイサービス

高槻市 松岡 篤

息子とは何かが違う詐欺電話
行革で閉めて荒れてる市の施設
塗り出すと後に引けない厚化粧
楽屋では優しいママが悪女役
うんうんと独り善がりの遠い耳

高槻市 安田 忠子

リーマンを越えるかチャイナシヨッキンク
無くした物考えないよ青い空
この今を大事に生きて謳歌する
良い事をすれば心が晴れやかに
無くした物思わぬ時にひよっと出る

豊中市 上出 修

川の字で寝かせた子らもう不惑
注意書き読ませないぞと小さな字
まっすぐな性格時に邪魔をする
肘付きの椅子でなかった再雇用
雀友においしい友が一人いる

豊中市 藤井 則彦

七変化する紫陽花に癒される
いい夢に夫婦が奏で合う寝息
見た目には良いほどきついハイヒール
欠伸してはベットポトルで済む会議
ピンボケの写真はみんな美男美女

豊中市 松尾 美智代

気になる事ひとつ私を眠らせぬ
母に会いたい父に会いたい沙羅双樹
縁に座り庭と対峙の一時間
お互いの我慢で続く平和の絵
初夏の風全身に受けベダル漕ぐ

豊中市 水野 黒兔

揺れ動く心鎮める魁夷の絵
閃いた夢の妙案夢のまま
逆転の夢なお抱く遊行期
さまざまな命の交差する医院
脳髓を錐もみにする蟬時雨

富田林市 片岡 智恵子

生も束の間旅も束の間陽が沈む
七十八歳免許返納した亡夫
がらんとしたガレージに立ちつくしたつけ
一期一会軽い別れの茶会なり
魔女悪女どちらを選ぶ余生かな

富田林市 関 よしみ

罪穢れ茅の輪くぐって青い空
白桔梗母が愛した花が待つ
片言の孫は宇宙語水水母
古墳群空から見たい鍵模様
私を励まし光る夏木立

富田林市 中村 惠

道ばたで拾うほっこりする話
あなたの笑顔でこころ上天気
ひらがなの便りほのほの連れてくる
むらさきの夜を知ってる赤いバラ
詰め込んだ記憶の鍵が見つからぬ

富田林市 山野 寿之

茄子胡瓜浅漬けにした初夏の味
オハヨウで始まる夫婦五十年
殿さまも混じり蛙のコンサート
梅漬ける仕種そっくり亡母を継ぐ
昼食後夕食を問う妻の愛

寝屋川市 富山 ルイ子

肺痛で兄死去今なら生きれる
ミニトマト毎日五十出来困る
あげるの好き でも迷惑かも知れぬ
夜中目覚め半分眠りふらふら
ポランティアにまた行つてます米寿です

寝屋川市 平松 かすみ

台風に生まれたおかげ覚えられ
一度だけ授業参観してくれた(父)
花時計花が枯れてもデート場所
難しい病名などは無い加齢
疑いを知らぬお地藏さんが好き

寝屋川市 森 茜

一つまた一つを許す老い気まま
猿かに合戦経済学にしてしまふ
狭い路地まつ赤なポリシエつき切った
蘭朽ちて手折れば初蟬の鳴くよ
仏壇をゆっくり閉じてから眠る

羽曳野市 安芸田 泰子

炎天下自分の影を踏みつける
新調をためらっているのは余命
趣味の数そろそろ肩に重くなる
許すとは言わず忘れるとだけ言う
解禁の捕鯨水菜の種を蒔く

羽曳野市 宇都宮 ちづる

大泣きの後の寝息もしゃくくる孫
転倒を痣で済ませた骨密度
桃一箱傷むベースに追いつかず
カラス三羽に襲撃されたゴミ袋
顔を見ぬお方が増える定句会

羽曳野市 徳山 みつこ

いちにちを開く深呼吸三回
ひと呼吸おいて沸点下げました
ふと漏らす愚痴が非難的となる
透明な糸に守られてる私
寝ころんで飛行機雲を追う三時

羽曳野市 中川 ひろ介

ぬけうらの陰を選んで行く日傘
爽やかな朝の空気に生き返る
才能がないので惚気が目立たない
最初から無いと覚悟の二十万
大漁の大正海老はいまいずこ

羽曳野市 藤原 大子

アンテナが敏感すぎて疲れ気味
私はわたし何度も胸に失意の日
見落とした後の祭の予定表
AIよ豪雨なんとかならないか
まだ余白持った傘寿に羽がある

羽曳野市 三好 専平

癌治療すすむ日本にオスブレイ
山の上の山に棚田がつづいてる
ほっとして若葉の橋をわたります
殴り合い見れば興奮するヒト科
江戸時代からの長屋の通学路

羽曳野市 吉村 久仁雄

イヌ語ネコ語使い分けして生き上手
逝くときは独りと覚悟して二人
全員賛成だからこの案没にする
僕が逝くまでゆっくり休めという弔辞
計算通りにいかず明日も前を向く

東大阪市 佐々木 満作

快方に向かっていると受話機から
ない袖は振れぬと開き直られる
大仏の威厳と慈悲に手を合わす
選挙後は幻となるマニフェスト
品物も見ずにネットでは買わぬ

枚方市 丹後屋 肇

二十万円不足でやめたフルムーン
令和時代の吉凶を問う参議院
脳トレのヒントに嵌るパズル集
免許返納思案している過疎地帯
判官蟲貞逆転劇に跳び撥ねる

枚方市 二宮 山久

趣味に生きやつと開いた花ひとつ
お互いのトリセツ欲しい老いの仲
朝取りの野菜レシピで老い達者
ほどほどのもの差し欲しい酔っぱらい
アナログが性に合ってる篤い人

枚方市 藤村 亜成

日記付け今日をしつかり認知する
いまだから言うがとシヨッキンガな話
好奇心充たせぬ程度に飢えておく
読みかけたままの頁が追ってくる
悲喜交々の一日だった仕舞風呂

枚方市 山口 弘委智

みな同じ顔して汗を拭く球児
口下手も気配り上手愛を播く
なお生きる意味をさぐって半世紀
妻の愚痴時噴火活火山
譲られて老けた顔して座る席

藤井寺市 太田 扶美代

病状を時々聞きに来る夕陽
神様にお借りしている時間表
ライバルのようにも見えるペアルック
病床の笑顔を今日は一人占め
わたしの合言葉を待つてるドアー

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

節目節目わたしは旗を振っている
弾ぜる日をピンクのメモに書き留める
レントゲンわが古傷を探られる
もう消えた影を待つてる水たまり
ときどきは昔にもどりたい日傘

藤井寺市 鈴木 いさお

休眠の前頭葉を再稼働
窓際の座り心地を君知るや
保育所の跡地に特養が出来た
病気が治ったらまた喧嘩しよう
裕ちゃんの歌なら10曲はいける

藤井寺市 吉田 喜代子

他国の被害すまぬ近隣被害なし
梅雨空に二度寝の悪い癖がつき
何方様挨拶される選挙中
巡礼の仏に会えた歩き旅
まだ少し見栄があるらし背を伸ばす

松原市 森松 まつお

要領の悪い雀も群れにいる
イソイソと出掛けトボトボ帰る道
スランプが続くと増えてくる酒量
ハルカスの展望台で震度四
あと五分のつもり二時間寝てしまふ

箕面市 大浦 初音

窓ガラス拭けば明日が見えますか
助手席でブレーキかける妻の口
働けるただそれだけで出る元氣
この頃は隠す名人また探す
いつも行く散歩道での逮捕劇

箕面市 酒井 紀華

厳格な父が握った塩むすび
花の庭みな懸命に咲いて終え
古里にこぶし咲く頃かえります
マンネリを後悔しない玉子焼き
恋ごころ十七文字で使い分け

退院の次は腰骨折る夫

箕面市 出口 セツ子

お茶葉トイレと呼ばれ疲れきる

我慢せぬわがままこんな時に出る

子も私も骨折騒がず我慢した

騒いでも痛み軽減するでなし

母の忌の紫陽花へくる通り雨

虹の橋がくつきりと立つ拉致の海

てるてる坊主心に雨が降り続く

母の炊く麦茶の匂い梅雨明け

ご近所のうわさものせる夕ごはん

箕面市 広島 巴子

朝顔がぱつと開いて今日は吉

絵手紙の代わり短冊亡き友へ

逢いたいな幼馴染みの彥星に

七夕は夫婦それぞれお約束

久しぶり会おうと友と長電話

八尾市 内海 幸生

胃カメラで僕の胃と逢う今日は

この胃なら怒りっぽい筈直るまい

外来語ここは日本ぞほどほどに

堂々と意味の違った外来語

便利すぎ怖さ忘れていた車

手ごわさを出せぬか紳士トラ打線

八十路会学生時の顔が無い

余生とは言うまい百歳に叱られる

すみませんあなたは何方傘寿会

自国ファースト世の国ぐにが真似をする

ずっと前から令和の中にいるようだ

いつまでも味方と思うなど言われ

おとなしくおとなしくして様子みる

土地なし家なし二千万じゃ足りぬ

ストレスも幸せもあり生きている

八尾市 山根 妙子

百日紅梅雨和ませて咲き誇る

こぼれ種忘れた頃に可愛い芽

七夕にこれっぽっちの悩み吊り

毎日が休日なのに忙しい

定評の憎まれ役は子煩悩

大阪府 米澤 俣子

明日あるを信じ大事に今日を閉じ

三年もの我が家の梅酒琥珀いろ

疲れたと言わぬルンバを褒めてやる

時々目線変えるのも正解

競い合うライバルも無し遠花火

神戸市 上田和宏
眼を合わせちよつと笑顔がおもてなし

眼が美味い舌が美味いと京御膳

布団から伸びて畳の心地よさ

雨の音符で紫陽花の彩よみがえる

小遣いで払える飲み屋だけ通う

神戸市 奥澤洋次郎

看板と見ていた人が歩き出す

時事句みな時の流れの証人に

捻くれているが反逆児になれず

昼飯を旨いと思う日の長閑

締切りに追われ気分が悪うなる

神戸市 敏森廣光

妹よ初盆だから戻るよね

夏近しおしゃれな帽子買いいに行こ

指導力無くて手が出る足も出る

大丈夫まだブレーキがわかります

コンビニに支えてもらうマイライフ

神戸市 富永恭子

雑草の花あちこちに生ける朝

そのままが美味しいのです句のもの

明日よりは一日若い今日を生く

二番煎じでも喜んでくれました

現世を洗う清滝川の音

神戸市 能勢利子

夏休み宿題持つて孫が来る

自由研究蟻を眺めて日が暮れる

線香花火長持ちさせるおばあちゃん

宿題の俳句中二と四苦八苦

教会に流しそうめん食べに行く

神戸市 山口光久

着飾った言葉はいらぬ一本気

赤貧に耐えた心は驕らない

家計簿に不気味な風が吹いてくる

難儀やな想像力が枯れてくる

好きなように泳いで楽し終の章

神戸市 山口美穂

流行は知らないいつも私流

ひとり行く八十路という道地図にない

土用丑鰻高値にひと回り

流れ星願いひとつが言えず消え

怠け心を叱ってほしい時がある

神戸市 山崎武彦

ひとつずつ許して愛はほんまもん

どこまでも付いて行きますいいですか

自分史を飾り過ぎたと知る懺悔

心配は無用その内消えるから

苦も楽も天の試練と思いたい

明石市 糀谷和郎

吠えるのは相手を知ってからにする

便利さに慣れたか五体黴びてくる

ラムネシユボン迷いすつきり夏の空

声援にしかと頑張る歩が熱い

長生きの秘訣分からねままに生き

芦屋市 竹山千賀子

紫陽花の七色に酔うかたつむり

ひとときを夢に包んだバラの風呂

ゆつくりと喋っておくれ日は長い

ウォーキングわくわく感の曲り角

体内の大掃除です笑いヨガ

尼崎市 加川靖鬼

三元号耐えた背骨に感謝する

一病息災仲良く歩く林住期

女子会は多趣味多才で盛り上がる

哲学の道を蝶蝶と二人連れ

うり坊の顔が残っている二十歳

尼崎市 永田紀恵

百年時代家のリフォーム決めました

狍犬にあこがれている招き猫

見る方が恥ずかし夫婦ベアルツク

なんとなく四季の移ろい知る便座

中吊りで読んだ気になる週刊誌

尼崎市 藤井宏造

車売り行動範囲狭くする

生き上手真似てトラブル避けてきた

手術後の医師の笑顔にほっとする

お見舞いの切り上げ時のむずかしさ

表情の無い人ばかり喫煙所

尼崎市 藤田雪菜

週刊誌診察待ちにそっと見る

梅雨晴間網戸を洗う気にさせる

夏が来る湿気に弱い足嘆く

急ぐほど歩幅が狂う雨の午後

平泳ぎ夢があるから息つづく

加西市 山端なつみ

農作業赤いマニキュア縁がなし

眠くって私の祖先猫かしら

ぴつたりと合わぬ仲でも五十年

年下の先輩に聞く社のイロハ

今どきは血よりネットに繋がる子

川西市 山口不動

九九唱う免許更新近づいて

偉人とは年金だけで暮らすひと

尊厳死会員となる雲の峰

リモコンと新聞眼鏡セットです

気に入りの絵葉書全部出している

胸弾む令和に活きて共白髪

三田市 足立 つな子

ひとりより寄り添う二人絵になるね
トンネルを抜けたか今朝は鼻歌が
在るがまま深入りせずに素で居たい
手を繋ぐこの温もりを忘れまい

三田市 上田 ひとみ

男気をしっかり抱いておきましょう
誰にでもタツプリなんてない時間
どことなく似ているところ心地良く
話し声眠くなります優しく
引き出しをたくさん持っている貴方

三田市 大西 重男

大金をもらい悲しい保険金
立ち読みをしたくて出来ぬ腰痛で
外は雨誰もいなくてひとり言
もう寝ようサインが出たぞ大欠伸
搾り切り何も浮かばぬ老いた脳

三田市 尾崎 一子

梅雨最中平成の豪雨をおもう
煩惱を紫陽花寺にとき放す
寺を出ると主婦の私に戻ります
孫と過した四年命の洗濯
菓立つ孫かがやく未来に乾杯

晩節を穢さぬつもり一歩づつ
指切りはもう孫だけがしてくれる
うっとり音楽聞いていた軒

三田市 北野 哲男

近所にも鍵を預けて独り住む
目礼で渡る歩道の押ボタン

三田市 九村 義徳

高齢化夢は優しい介護ロボ
キャラ弁にママの優しさでんこ盛り
ライバルのセンスの良さに拍手する
どん底で鍛えた父の力こぶ
荒波を乗り切る覚悟ありますか

三田市 多田 雅尚

歩くのに程好い距離のGゴルフ
世の中を急かせてるのはスマホです
乗るのは止めます免許返しません
お庭には花より多い夏野菜
無党派層が日本を変える起爆剤

三田市 谷口 修平

古傷の由来語ってくれた父
美人ならずぐにサポートするくせに
聞き流すだけで喋れる訳が無い
死んでから戒名にまである格差
年金が命の綱と言うニート

三田市 野口 真桜子

梅雨晴れに足元の蟻叫び出す
見おろせば働き蟻がせかせかと
蟻地獄どうにか逃げて尚進む
キリギリス死んで蟻等の大漁旗
次の世は人間になる蟻の声

三田市 福田 好文

取りあえず笑みで頷く遠い耳
幸福に気付かぬ内に来る不幸
まだ枯れぬ三食食べて恋もする
女子会に無口な人は見当たらぬ
黄信号五歳の孫が渡らせぬ

三田市 堀 正和

花が咲きルートを交える散歩道
田植機がフル稼働する日曜日
O型が好きらしいなあうちの蚊は
句会後はコーヒー派やらビール党
夏草の元気のよさに嫉妬する

三田市 松本 ゆかり

バラのアーチ新婦よ棘にご用心
口角までくつきりとひく老いの紅
許したり許されたりで幕降りる
銭湯の跡地紫陽花咲きこぼれ
国賓に皇宮警察晴れ姿

三田市 村田 博

賞味期限延ばしこの世に鎮座する
皺増えて悪人面になつてきた
馬鹿丁寧な言葉に足らぬ思いやり
世論調査されてないから信じない
古墳なら散歩コースの中にある

高砂市 松尾 柳右子

サミットの成果見えないおもてなし
闘志湧く流しソーメンタッチの差
猫舌を満足させる夏料理
送迎のデイ楽しみも週四日
ありがたい助言身内は宝もの

宝塚市 丸山 孔一

ポチ袋何を入れるかキャッシュユレス
欠席と迷わず返事夜の宴
やれ打つなDVですと妻が言う
個人情報見えないものが金になり
話します支払いもするスマホです

丹波篠山市 北澤 稠民

こんな事知らずに歳をとりました
せめてもの独り歩きの出来る句を
平凡な日々平凡に老い進む
生かされてやがて悲しい仏間の灯
弾んでも年金ぐらし寂しいね

丹波篠山市 久保木 剛

身構える妻が私をさんで呼ぶ
田へ行くだけの限定免許ほしいもの
解約は恐い掛け捨てガン保険

唱歌だけまだ歌えますケアハウス
年老いて福祉課にまた用が出来

丹波篠山市 酒井健二

過去やめよ未来を語る酒うまい

脈絡は無いが平和も座の話題

三日またアツと言うまに休肝日

強運が有ってどうにか並の人
舌打ちが不運な友の癖になる

丹波篠山市 長谷川 善輔

苦吟する我を急かせる梅雨明け

尾を立ててうちの猫とちゆく男の色気

七十年過ぎてても核は厄子なり

翔平のホームー出た日は気分よし

翔平に勝手に託す青春の夢

西宮市 秋元 てる

「若いねー」そうよ私は百歳に

百歳よ不安と自慢が同居中

祝われてほんとに百寿と確信す

神からの紹介ですと初診室

「先に逝く」脅し合うてる仲の好き

西宮市 緒方 美津子

父は縦糸子等は自由に咲けという
無理するなメールをくれる子はドイツ
万緑や今の幸せ句座にいる

不覚にも涙の出る日あるのです
ありがたやトラブル知らぬ回覧板

西宮市 亀岡 哲子

これもコント自分で笑うこと多し

口喧嘩出来る人あり元気なり

犬らしい犬珍らしくよく吠える

生真面目な夫婦ときどきくすぐりに
補聴器を外して寂の中にいる

西宮市 西口 いわゑ

蓄たちどんな希望を抱くのやら

想像は自由自在よ前頭葉

風鈴は昼だけにする世の移り

ペランダの花にも蝶が来てくれた
舞い終えるまでへなへなになるまいぞ

西宮市 福島 弘子

信号も歩道も安心出来ぬ世に

根気よくくさらず歩む五七五

孫が来るお昼はピザのデリバリー

粥おこげ自由自在の炊飯器

梅雨最中プール開きの閑古鳥

西宮市 福田正彦

平和賞候補が火種ちらつかす
黄泉のこと聞いてはいるが此処がいい
ポスターの作り笑いが気に掛かる
甘言は実現0が見えている
川柳にイノベーションが流れ込む

西脇市 七反田順子

アマリリスこぼれ種から赤い花
初スイカ甘くて当り勘の良さ
ツバメかて少子化なんだ見かけない
戎橋異邦人かと言われそう
しっぽりとレトロな町を歩きたい

南あわじ市 萩原狸月

免許証返納をして引きこもり
無理かなと走ってみたら無茶だった
老いの胃に余る馳走も旅の宿
好き合って厄介かけて夫婦です
人柄に時代がついていぶし銀

奈良市 阿部紀子

各国の目立つ代表目立たぬ人
全員の撮影バックに大阪城
サミットが平穩にすぎほっとする
芙蓉花盛り通る人を見上げてる
丸ビルでミニ盆栽を手に入れて

奈良市 宇賀史郎

断捨離に苦勞一杯詰めた箱
内緒事ない生活にほけ始め
美味を追う孫のメロンの皮薄く
端でみる友の変遷クラス会
頸動脈抜け退院陽の眩し

奈良市 高橋敬子

濡れる日もあるさと笑う今日は晴
経が済み僧との会話はすみ出す
わくわく行つた三つ星疲れだけ貰う
知人の出番済みやれやれと席があく
間違いを自慢しあえる友がいる

奈良市 辻内げんえい

五輪万博ワクワクと待つ喜寿と古稀
この歳で旅にでる夜は眠れない
指きりで何を約束老夫婦
ヨガのお陰でジャンケンでできる足の指
一言を三日連続責められる

奈良市 山本昌代

久方の母と寄り添う影が泣く
お茶にしよ重い話になつてきた
母さんと楽しい汗をかいてます
眠れぬ夜静かに昔なつかしむ
雨音とコーヒー無垢になる私

奈良市 米田恭昌

聖子逝き水府路郎を偲ぶ雨

雨しとどいじめ相談鳴り止まず

止まり木に紫煙が揺れていた昭和

ペアルック夫婦の絆深くする

同姓同名似ても似つかぬ奴がいる

生駒市 飛永ふりこ

泥くぐりちよいと度胸も本物に

ストレッツチ自分励ます一二三

山盛りのフルーツパフェにああしんど

修飾語いらぬ交わりボサノバで

泥まみれ越えて仲間の片えくぼ

香芝市 山下純子

旧友と深夜の電話エンドレス

晩年の筆圧弱き父の文

青春の名残り漂う路線バス

キッチンにも休業札を掲げたい

イタリアン隠し味には和風タシ

奈良県 安福和夫

今年またトラファン情緒不安定

トラキチは何度負けても球場へ

連敗を脱出してもV騒ぎ

ルーキーも重荷を背負うタイガース

負け込むとメジャー観戦息抜きに

奈良県 谷川憲

消えてゆく昭和を探し路地巡る

奈良町が若いセンスで生きかえる

免許証返納迫る事故ニュース

いたことすら忘れられそう元職場

老犬の介護に自分重ね見る

奈良県 中堀優

伸びてまた縮んで人は育つんだ

言い訳に手を握りしめじつと聞く

真ん中で落ち合おうよ虹の橋

古希からの行く道これは悟り道

荒む心温めてくれるのはお前

奈良県 長谷川 崇明

晩学に色を塗り足す我が余生

憤然に愕然唾然子のいじめ

三猿が増えて危険な民主主義

安全をカメラに託す不幸

間引き菜をしつつ思うよ運不運

和歌山市 磯部義雄

令和からまさか大病嘆き節

また来ます二度目は来ない見舞い客

介護してくれる妻深まる絆

闘病は充電中と心得る

飲みたいたいなあビール焼肉目に浮かぶ

和歌山市 上田 紀子

和歌山市 武本 碧

梅雨空に避けて通れぬ義理がある
誕生日リフレッシユの日と決めている

夏本番課題ばかりが重くなり

木の椅子のやさしさを知るカフエテラス

キラキラの夢追いかけてフレッシユマン

和歌山市 土屋 起世子

一杯の水から今日も始動する

梅漬ける気力無くした独り口

自由時間あつて楽しくない独居

スマホより風の便りに安堵する

面倒なことから逃げてゆく加齢

和歌山市 喜田 准一

演技なら見抜いています庶民の目

ウラもありオモテもあつて人と国

分らない事人にも国にも世界にも

男への風はまともに受けて立つ

あなたなら分かる悲劇も喜びも

和歌山市 坂部 紀久子

真剣に聞いても判らない政界

雑談でまぎらわしてる不整脈

面倒な事は呆けたことにする

運でしようか努力でしようか人生

見る人により違つて見える長短所

ホッベタの日の丸はしゃぐサポーター

虫喰いを埋めると過去がよみがえる

人生に忘却という優れ物

何故何故と続く円周率のごと

同じ空気吸つて吐いてもこの格差

和歌山市 堀 富美子

いい方へ転がす運も従いて来た

バス停がにつこり笑う顔馴染み

一抹の不安がよぎる忘れ癖

不完全燃焼炎えたひと日に悔いはない

あじさいの心変りを身に重ね

和歌山市 福井 菜摘

ゆるやかに今を楽しむ縄電車

もつれ糸解けて心が軽くなり

愛着を捨てて平静とり戻す

着地まで自分の色で飛ぶかまえ

だとしても老いには老いの絵が画ける

和歌山市 古久保 和子

バラバラとめくるばかりの午後の本

自販機の灯りひとりを誇張する

風鈴の風に昭和の汗が引く

爪を切る音が大きいのもひとり

甘いものを食べてエンジンがかかる

和歌山市 松原寿子

石投げて波の返事を聞き洩らす
海外旅行二度とは出来ず夢気分
アレンジのカサブランカ満ちてくる
天辺で視野の広さを論される
雑草に絡み昼顔凍と生き

岩出市 藤原ほのか

梅雨空にびたりとはまる色を着る
その色に染まれるように白を着る
それぞれの個性で選ぶワンピース
振り返ることはしないで歩いてる
でこぼこの路でも今を生きている

海門市 小谷小雪

ドクダミを干しこれからの健康茶
桃食べる福の神呼ぶような顔
私には過ぎたお相手かもしれない
海原も煮詰めて海苔のびっかぴか
そろそろ頑固なのかなカタツムリ

海門市 堂上泰女

無花果の恋の残像まだ消えぬ
大丈夫生きてる例はタントある
癌告知それは息子の電話から
弟持参妹作の夏野菜
Gツエンティお蔭で道はすいている

紀の川市 山東日出男

目標は水平線のあの辺り
犬猫も家族写真の輪の中へ
家計簿も愚痴る残業ゼロの日々
長調も短調もある雨の歌
母ちゃんが居ないと家が回らない

鳥取市 池澤大鯨

通ぶつてビール銘柄言ひあてる
あれば飲みなければなくていいビール
ビール瓶家庭で見かけなくなつた
ビールならちよつと一杯妻に注ぐ
お相伴妻の方が多く飲み

鳥取市 奥田由美

土触る農婦の厚いやさしい手
使い込み瘦せた畳に貼るテープ
シール貯め買ったナイフの甘い切れ
胃を半分無くしてもまだ肥満体
あと五キロプール歩きで減る希望

鳥取市 加藤茶人

金がある内は親子と言う絆
梅ラッキョ祖母が張り切る風物詩
しがらみで名前は貸すが票は別
意見書は玉虫色の有識者
対案を出せとは無理な事を言い

鳥取市 岸 本 孝 子

好物はいつもストンと胃に落ちる
どれ着ても変らへんぞと言う鏡

脳回路一本線が切れたよう

そこはかとなく亡母の仕草を懐かしむ

訃報欄我が歳のことふと思う

鳥取市 倉 益 一 瑤

沢山の愚痴耳鳴りがしてならぬ

立ち読みで学んだ知恵に救われる

冒険心まだあるうちは大丈夫

鍵穴を覗いてからの不眠症

神様も胃薬欲しい日もあろう

鳥取市 田 賀 八 千 代

泥んこ遊びしている子等が見あたらぬ

どんくさいが真面目な人という旅路

あの時の鍵を今でも持ってます

励まして叱って誉める子守歌

おかしければ笑い悲しければ泣く

鳥取市 棚 田 大

造花観て水はいいかと孫が問う

郷土愛また人類愛はどこいった

土を掘り大金見つける夢だった

わめく子も美人に出会い落ち着いた

美男子が美人と言われ首かしげ

鳥取市 谷 口 回 春 子

子ツバメの大口親を飲み込んだ
赤止まれ青は進めと孫三つ

脳トレに孫の宿題程がよい

呼ぶ声音心の中が透け透けだ

甘い蜜吸うだけ吸ってグツドバイ

鳥取市 永 原 昌 鼓

効能を信じて漬かる美人の湯

遠目でも美人はやはり美しい

イケメンも歳には勝てぬ背が丸い

運転のテストで計る老人度

さあ寝るか何を言っても独り言

鳥取市 中 村 金 祥

百年を生きたい金に苦勞する

自動化へ人間らしさ消えていく

喜んでいいのか妻がいつも留守

取る臓器は無い筈神に叱られる

古民家の囲炉裏にあつた家族愛

鳥取市 夏 目 一 粹

餓鬼のころ青大将と遊んでた

心配をかけない嘘を考える

天国の父母とは縁が切れませぬ

ど根性あれば平気の平左です

この世から愛が消えると闇になる

鳥取市 平尾菜美

良心に問えぬいじめの鬼悲し
三日癖乗り越え結ぶダイエツト
難しい顔畳んでは夫介護
片手間の趣味に命を削られる
明日担う子等へ未来の鍵渡す

鳥取市 副井 ゆたか

夕闇に追い立てられる遊びっ子
墓問題危機と知っても先延ばし
ネットの世自筆手紙は貴重品
子ら交え囲むしゃぶしゃぶ胃に沁みる
一強は箍を外すと仕放題

鳥取市 福西茶子

十秒を切った私の案山子立ち
仏さま夏は造花でお許しを
虫くいの日の丸だけど子供の日
金欲しい着物が欲しいまだ翔べる
ダイヤ婚までは生きると車椅子

鳥取市 前田 楓花

自覚症状無いのでクスリ忘れがち
四季の風薫るお墓に父母眠る
日曜はのんびり二人でブランチ
ひと差して印象変わる紅の赤
韓国には強気 アメリカには弱気

鳥取市 山下凱柳

汗に涙流したただけは丸くなり
今の気持一気呵成に五七五
二千万貯めよと夢にうなされる
長生きの秘訣は笑いだと言うが
老いという敵が無言で攻めてくる

鳥取市 吉田 孔美子

未だ聞けたフラのテープで夢ハワイ
優勝かバスの中でもレイ素敵
アロハシャツ重ね着をして星の下
樹の下で下手は下手なりフラ踊る
ホラ虻やれみみず耕耘進まず

鳥取市 吉田 弘子

未来の絵明るい彩を少し足す
今日は雨心身共にリラックス
無理のない明日の計画畑仕事
ひとりぼち空耳だったのか風よ
空き店舗整骨院で活気づく

倉吉市 猪川 由美子

理解得たいので先ず言い訳を整理する
怒るのもパワーや時間無駄にする
愛し過ぎて独占嫉妬燃え上がる
イヤな面を見ちゃった後はやり難い
抜け目ない外交忙しトランプ氏

倉吉市 岡崎 美知江

あのそので通じる友と長電話
ロボットに介護をされた夢を見る
今日もまた友を施設へ送り出す
年号は西暦で通す事にする
楽器から生きる力をもらつてる

倉吉市 田中 紀美恵

愛こぼれ拾いて余生バラ色に
つきはなす言葉を拾い奥を知る
思い出をいっばい探し米寿まで
認知症するする出ない人の名が
駅弁を夫婦で食べる日本旅

倉吉市 山中 康子

何もないことが一番の仕合わせ
磨いても元通りにはならぬ老い
人事じゃないよ身の守り真つしぐら
するすると木登りした子今スマホ
頂上で眺めています若い衆

米子市 池田 美穂

とぐる巻き無心に坐禅中の蛇
ホールインワン天も驚き電が降る
仕事量セーブした分酒量増え
夫の顔スルメのように味が出る
神経が擦り減った分背も縮む

米子市 伊塚 美枝子

足元から老いが私に忍び寄る
ヒールなど履いていないがよく転ぶ
ばあちゃんの笑顔見たくて行く喫茶
老夫婦いつもの喫茶定位置で
目を閉じて昔の声を聞く校舎

米子市 後藤 宏之

このごろは恩師すっかり子供です
草ひきを天とう虫もお手つだい
ゴミの日はねばるカラスと大勝負
この選手目が輝いているものになる
ふと見ると角が鏡に映つてる

米子市 後藤 美恵子

掛違い無くす大きなボタン穴
クラス会褪せた想いに色を差す
口惜しさに欠けてしまった歯を治す
政策がハミングのみで歌詞不明
残すまい遺族に水を差す美田

米子市 竹村 紀の治

予報士の笑顔で解るあした晴れ
カラオケのあと一曲で採めている
神さまに反省願う外れクジ
日めくりの格言無理なことばかり
七夕になると我が家に父帰る

米子市 中原 章子

さくらんば農家の愛を口に入れ
外食に払う気のない子の演技
好きだから飽きることない趣味続く
びったりの現金払い列できる
備えれば備えるほどに憂い出る

米子市 成田 雨奇

ざわざわとしたのはほくのせいかしら
爪伸びる速さで頭ボケてくる
オーバーに言わぬとお前驚かぬ
ほくだつてお茶とお盆はおを付ける
梅雨晴れ間傘と布団と心干す

米子市 野川 宣子

どの店も熟女陣取るランチ時
残り物よそつて独り昼ごはん
病衣の乱れ父の病の重さ知る
どの風も私励ます様に吹き
年寄りが大手を振って歩く町

鳥取県 門村 幸子

世話人の汗びっしりと夏祭り
亡父は「桃」亡母には「バナナ」お仏壇
くたびれたら昼寝のできるいい身分
あとはもうわたしの時間アイステイー
ウォーキング雨の紫陽花倦きず見る

鳥取県 斉尾 くにこ

安心を今日もあげてる朝の音
投げつけたジョーク返してもらえない
美しい仕草やさしい嘘を言う
人間に触れるみつともなさ触れる
手紙くる重いパンチを受けている

鳥取県 竹信 照彦

我が孫が最後に目指す甲子園
股関節五分歩くと痛くなる
二時間の老人輪投げ会クリア
競技用ベルトを腰に草刈機
久し振り草刈り出来て眺めよし

鳥取県 細田 裕花

青田風目線は山へウォーキング
お互いを引き立て合つて並ぶパン
びっくりは背丈縮んでいる事実
懐かしさ込み上げてきた電話口
柿畑の雨はみどりの真珠です

鳥取県 山下 節子

川柳に嵌まり今では溺れてる
初めての東京人に溺れそう
団結が大きな山を動かした
一言が過ぎて悔しい墓穴掘る
とろくさい私にですか咳ばらい

松江市 石橋芳山

かたくなに今を守つてパンの耳
雅楽を聴いてベンガラ色の影
三日月になつて結論から逃げる
停止線はみ出てそこら中に悪
お汁粉で煮込めば争いが終わる

松江市 藤井寿代

命日に蛍飛び交う亡父の森
サヨナラが笑つて言えるケンカでした
入道雲に攫つてほしい柔な私
腰痛を電線のカラスが嘔う
グーチョキパー打つ手は全部打つたのに

松江市 松本知恵子

玄関に飾れるようにもう一句
叮紅師語る画面に手を合わす
今頃は早寝早起き合つて来る
朝に聞く雀の声がリズムミカル
コーンコン騙すキツネが鳴く電話

松江市 松本文子

重ね着の下は亡母さんの形見
残り時間数えてばかりいる夜だ
花開く散る繰りかえす闇の中
みどりいろ心忘れたりしない
鶴の一声スマホを捨てなさい

出雲市 伊藤玲峰

夏祭り遠い絆を呼び寄せる
「逢いたい」と朱鷺の切手で文届く
京の竹林懐かしい声寂聴尼
年輪の疵悲しい事があつたのか
悔しさもパワーにこの世楽しもう

出雲市 岸桂子

老いるとは何の罪です仏様
辛い日は母の手紙を読み返す
人間でいるため少しだけ狂う
争わぬ程度に叱るとなりの子
黒の気品カラスに出せる筈がない

雲南市 菅田かつ子

おはよの声さわやかな通学路
侮つた古種ひよっこり芽をあげる
またしても運が素通りしてしまひ
終列車だんだん無口になつてくる
じゃまたね笑い袋を置いて行き

島根県 伊藤寿美

令和デビュー雅子皇后御活躍
歎異抄開けば亡夫の朱傍線
十七回忌もう風の音に驚かぬ
銀河鉄道亡夫の車輪の音を聞く
ときどきは風の囁き聞くいのち

イヤホンをはずした耳に大騒ぎ
岡山市 大石 洋子

雨音に閉じ込められて夢のなか
湿気過多肥満の手紙やってくる

流行が一巡をしてストローハット

ぬるいお茶ぬるいみそ汁ゆるい人生

岡山市 工藤 千代子

怒っています泣いてもいますか

赤い糸甘い記憶にすがりつく

ライバルは生涯作らぬカーネーション

言い訳や遅刻は許す蓮ひらく

包帯を外してくれる赤穂線

岡山市 丹下 凱夫

ぐんぐんと伸びる皇帝ダリアの幹

五臓六腑まで新緑になれる森

緑陰にハトと私とノラ猫と

大変なことなんですとうなぎ焼く

笑っているところに人はよく集う

岡山市 永見 心咲

加茂茄子をもげば紫黒がきゅつと啼く

酸欠の蟹には海水のシヤワー

乗りそびれた列車をずつと待ち令和

キリンとは歩幅が合わぬまま暮らす

ミキシンググラスに注ぐ愛と憎

今日トマト明日はししゃもと詰め放題
岡山市 前田 恵美子

普通より少し頑張る誕生日

束の間に半年過ぎて蝉が鳴く

今日もまたチョコマカ動く影を持つ

輪の中に居た喜びの名前見る

笠岡市 藤井 智史

君とふれあうちゃっかりな空気です

ひたすらに無言続けている凶器

グツグツとボクを私にする弱火

メルアドを変更新しい私

わたくしの夢を煮込んでいるトロ火

岡山市 高岡 茂子

あの世でも「一緒になろう」言った人

やさしさだけが思い出される七回忌

子守歌はテレビ転た寝がやめられない

美人ではない証 長生きをしている

財布とは合わぬ家計簿いつもつけ

岡山市 田中 恵

さわがしい事から逃がっている金魚

肩の凝る話は止そう小銭入れ

お陽さまに背くひまわりだつて居る

泣き顔も笑顔も埋めている鏡

五七五のリズムが好きナスニーカー

岡山県 藤澤照代

ほかほかの湯気ごと握る塩むすび
大銀河賢治の詩が降りそそぐ
お茶席に破れジーパン畏まる
賞味期限早い方から買ってくる
茶柱が二つも立って夫を呼ぶ

岡山県 山縣のぶ子

耳底に未だ生きている父母の声
ストレスが突発難聴ひき起こす
田植すみ村中みどり活気付く
丑の日のウナギが満たす家族会
少々の事では泣かぬ膝小僧

広島市 岸本清

老いてなお子等に教える人の道
目標を持たば弾みのある暮らし
感動を十七文字にして残す
認知症テストで妻に敗れたり
御仕置をしたい政府の体たらく

竹原市 岩本笑子

誕生日夏の帽子を急ぎ編む
幸福にきつとなれるよクロローパー
走り出す新しい靴夢の中
ライバルを誉めて引退するつもり
生きててもいいのだから一人言

三原市 鴨田昭紀

噛み合わぬ人生のジグソーパズル
わたくしが輝く美しい角度
食い違う主張に梅雨がまだ明けぬ
優しさに触れる厳しさにも触れる
頂点に立って孤独の椅子にいる

岩国市 上村夢香

方丈記今夜も聴いて床につく
五十鈴川の雅味わう赤福で
一票に重たいわたし預けます
診察券一気が増えて忙しい
田舎道今日も誰かに追い抜かれ

宇部市 平田実男

川柳をサブプリメントにして米寿
米寿ですピンクのチャンチャンコでパチリ
風よけになつてた父も兄も逝き
二千万ないが百まで生きてやる
仲人の嘘で結ばれ六十年

下松市 有海静枝

罪もない熊に来るなど鳴らす鈴
スマホ越し杣道の花ひとり占め
年齢は不詳カラフルな山服
縛りない毎日縛るマイルール
食べられる野草で減らします食費

防府市 坂本加代

永久に咲く花束となる褒め言葉

ノートルダム行つた記憶が燃えている

五色の輪大空に描く戦闘機

乾杯のジョッキを干せば歌が出る

眩しくて斜めになつて見るあなた

松山市 宮尾みのり

やすらぎは如何なるものぞ日々多忙

現実と夢の境が無い疲れ

令和令和五輪五輪と皆踊り

切実に生きたし孫の二十歳まで

ふと我に返る鳥合の衆だつた

松山市 柳田かおる

真つ直ぐなことは魂まで届く

不満ばかり詰めてココロが重くなる

自由つて孤独に耐えることらしい

曇りのち晴れ今日をリセットする夕陽

ひき算ばかり視力体力思考力

西予市 黒田茂代

さわやかに魁夷の青と向かい合う

弟から枇杷妹からサクランボ

風呂のわたし覗きにガラス戸の蜥蜴

敷居越せぬ小蛇すくつて出してやる

二三分タオル体操して床に

西予市 西田美恵子

あなたの道を照らす小さな灯になろう

よいしょよいしょと母は立ったり坐つたり

ライバルが私だなんてありがとう

ジャブジャブと使つてみたい金と暇

広辞苑も知らない若い子の言葉

東かがわ市 川崎ひかり

ネット依存空の青さを忘れてる

ブラに占領させてはならぬ青い海

ラブミーテンダ青春してたはじめてた

永久に青年に銃持たせない

青畳の匂いがしない孫の家

北九州市 小松紀子

今思う母よあなたは偉かつた

朝起きて同じ風景これは幸

毎朝の笑顔まっ赤なトマト狩り

食べれて歩け人に逢う感謝かんしゃ

お互いに「ありがとう」言えて家族の和

唐津市 坂本蜂朗

野の花を束ねて恋の戸を開ける

背が高くちよつと目立つた損と得

年月を経た恋文の束燃やす

父母介護済んで子供は皆異郷

傘寿越え嵐の日日が多過ぎる

唐津市 山口 高明

控訴してまたも結審長びかせ

剃刀の異名を持った切れるひと

冷房の舞台でモデル毛皮ショー

男子トイレへ熟女駆け込む観光地

紙芝居兄貴は飴をもらえない

熊本県 岩切 康子

新野菜財布が緩む朝の市

豪雨続く高台家で安堵する

晴間惜しく手早くすます畑仕事

パイナップルフラワー仄かに香り手折れない

台所で聞いた頼みは抜けている

札幌市 小沢 淳

多種多様演じ笑いに人の味

中間処理だけが進んだ核のゴミ

天も地も無常さくらのいさぎよさ

日本語も理解しないで英語力

プライドか人にたてがみ海老シッポ

札幌市 三浦 強一

自分史の余白に裏面史を綴る

後輩の一人二人はブルータス

トランプに尾を振り頭撫でられる

ヒト科みな平和を唱え銃を持つ

令和来て決意新たに原爆忌

弘前市 稲見 則彦

カセットもボクもまだまだ使えます

三つ指をついた背中が笑つてる

この夏も朝顔とても元気でず

本堂でジャズを聴いてる昼下り

どっこいしょ今のわたしの全てです

弘前市 今 愁女

梅雨明ける紫外線には黒日傘

紫陽花が映える時期です祭りごと

どうなるやら百歳時代直ぐ其処に

あつさり転び引力に因ると冗談

故郷でテレビ応援甲子園

弘前市 高橋 洋子

自転車で体幹試す膝小僧

多事多難生きる追い風向かい風

時々健脚試す旅切符

あの世行き往復切符があつたなら

ゆつくりと今日も充電一行詩

塩竈市 木田 比呂朗

車内までシツクな秋の路線バス

割り勘がسنナリ出来てほっとする

窓口で今日も聞かれた誕生日

消費税まだトタキャンを期待させ

米中を真似するように日韓も

男鹿市 伊藤 のぶよし

通すのは筋駄々をこねてはなりません
三食摂って順調に老いている
向う三軒道路改修遠くする
いばら道やっぱり君で良かったな
反旗ふる気力ならまだ持っている

千葉市 海老池 洋

植樹祭平和に育て令和の木
鱧を食べ鰻を食べて夏の陣
語り部もどんどん減った終戦忌
昭和一桁生まれで弱音など吐かぬ
向日葵の最後を小鳥見届ける

横浜市 菊地 政勝

私の弱気励ます葉箱
錯覚のまま来てました老い二人
消しゴムで消せない過去も風化する
私のおくびに犬もお付き合
老人の元氣へ趣味という薬

さいたま市 星野 育子

青紅葉涼をもらってホトトギス
選挙戦高が然れど一票入れ
日の丸語り継ぐ戦争と平和
ライバルに支えられてた昨日今日
ハイ御負け商店街の温い風

上尾市 中村 伸子

姫ひまわり今年は虫に好かれてる
ある日突然痛みが消えてくれる夢
配るのは心お金は要りません
恐ろしき柱が立った雨予報
入選句見れば納得する没句

朝霞市 前田 洋子

令和初台風上手く逸れました
G20習近平は今日の友
くれてやる物は一切受けとらず
しかしまあ介護保険が高すぎる
残念会吞んで笑って明日へ向く

東京都 川本 真理子

初めての経験 R1と書く
伏す老母の傍らに亡父の文机
節々が痛みはしても雨が好き
乗り遅れたとだけのメールに空青く
ワンピース白を選んで夏を追う

東京都 まえで とよこ

こどものごと手みやげをまつ老いの日日
冷蔵庫に空席みつけ水ようかん
まずひとくち和菓子のお鮎のふくらみを
駅ピアノ思わぬ拍手にうれしそう
G20「皆ようやった」と太閤さん

八王子市 川名 洋子

普通の人でしたと言う事件あと
故郷へ息子と二人初の旅
白魚のような指には戻れない
終活に本はいつでも後回し
探し物昨日も今日も忙しい

富山市 島 ひかる

自己嫌悪たて横斜めから責める
削除したメールが眠る胸の内
オカリナを山小屋で聴く星の下
初恋を想い出させるオルゴール
亡き父母に祈る八十路にある明日

可児市 板山 まみ子

兄ちゃんが叱られたこと見て育ち
とりあえずレンジが味方晩御飯
グルメなら昆虫食は如何です
梅雨明けが怖い元気な草の青
高齢も元気がとり得草テニス

犬山市 金子 美千代

年金日ATMに頭さげ
予報信じ止めたが雨が降ってこぬ
今なら分かる老いゆく母の寂しさが
詐欺防止の電話に替えて佯しい世
日焼け止めしすぎビタミンD不足

犬山市 関本 かつ子

最速のワイパー回し逃げ帰る
円満な振りもして来た五十年
お先へと和式トイレは御手の物
青信号カラスしっかり渡り切り
目覚しは要らぬ朝日と鳥の声

愛知県 早川 遯行

逃げ得を監視カメラは許さない
斯う見えてボクは対人恐怖症
医者の出すクスリを止めてから元気
動かないと妻の健気な拭き掃除
妻の指示には逆らえぬゴミ仕分け

鈴鹿市 小河 柳女

入院中悲の壺を抱いている
明日生きること夕焼けと話してる
目標がそろり立つまで生きてやる
天気晴朗天まで人が歩いていく
顔の上には人生が広がっている

(前月分) 和歌山市 喜田 准一

みちのくの牧場を駆ける勇み駒
面白い噂話に嘘混せて
朝の体操通りに行かぬ老いの身は
腹の内さらけ出すから採めて来る
一発で決まる話をこね回す

(前月分) 米子市 成田雨奇

父の夢壊してごめんとも言わず
芭蕉より長生きをしてただの人

夢に出たあいつは今日が命日か
ここに椅子あつたはずだと腰下ろす
都合よく戻つた妻にハイタッチ

(前月分) 高知県 小澤幸泉

温かい医者にほだされ薬増え

二人して流れに沿つて生きてみる

燕の巢今年も一つ消えていた

郷愁を誘う笑顔と芋の味

遠い日の蛙捕まえ老い一人

お浄土

(つづき)

東京都 高岡弥生

雨続き散歩に行けず家でヨガ

ダンゴムシつかもうとしてつかめない

糖質を取らぬ食事で腹八分

日曜の都心快適空気澄む

栃木県 廣瀬良磨

悩みごと溜めすぎました爪を噛む

奥歯抜く顎が碎ける音がする

梅雨明けに私も脱皮してみるか

ワイシャツの袖から入る夏の風

静岡県 渡辺芳子

感謝のみいつも仲良し老い二人

おしゃべりがはてなく続く老い二人

一年中花がたえない友の庭

安心で暮らせる日本作つてよ

名古屋市 富田末男

成長の走り目標光り出す

実行をすれば貰えるのは安堵

鳥たちの元氣至福な朝になる

うっかりが正直だから顔に出る

豊橋市 小松くみ子

努力不足登り切れずに井の蛙

撒きちらし後が恐ろし除草剤

働いたつもりでしたとキリギリス

ピンポンへ互いに出ると丸聞こえ

豊橋市 西郷紀美代

雨つづく除湿の中で新茶飲む

苛めてる訳でもないが出てく嫁

引き際を教えてくれた藪椿

ウォーキング百名山の夢を追う

(前月分) 伊丹市 岡村風琴

御朱印帳令和の文字がよく喋る

光背の向こうにきつとある浄土

五百羅漢千の目玉で人を観る

千手観音千のポーズで邪気払う

自選集

小島蘭幸

白雪姫の孫が笑っているスマホ
亡母が笑っている俺の肉じゃが
地産地消がいいね手料理がいいね
疲労困憊の妻に退職また伸びた
皿洗う僕と眠っている妻と

仁部四郎

先生を疑へ君の発見だ
疑ってなどはいません宝くじ
疑って聞けば公約案の定
疑いを晴らした傷が腹にある
くつがえる史実疑問を出した民

前 たもつ

福士慕情

整理した途端不便になる机
今に見ていると風船膨らます
旗色鮮明にして満身創痍なり
以前にもお会いした気の初対面
その結果わからぬままのアンケート

雪形が消えて津軽は夏景色
息継ぎが下手で溺れる人の波
介護5の妻は時間を止めたまま
糟糠の妻だがあなた誰という
燻し銀磨けば消えた渋い味

宮西弥生

雲一枚ががすとゆとりあるところ
雑魚だって緊張ほぐす日の酒場
温度差にふりまわされてる微熱
緋の彩を紡いで女は逢いに行く
後編のドラマを飾る遊び彩

村上玄也

米寿生き平凡な日を噛み締める
鍼灸師に褒めてもらった足の裏
満月に出会い得した朝散歩
神様のなさることには訳がある
父の長所ばかり目につき歳越える

六十年前憧れだった自家用車
脚弱り今じゃ車が足がわり
遠出せぬが車なければとじこもり
殊更に高齢者事故ニュース種
自動運転実現までは頑張ろう

三宅保州

森山盛桜

新語には馴染めず死後を懐かしむ
危険水位が日常になる怖さ
住み心地良くて鑄型の中に居る
粗塩という性格は変えられぬ
略しすぎだろう円周率は3

八木千代

その人は風のかたまり連れて来た
こころ溢れるグラスも熱い語らいも
友の手に甘えロビーに移動する
五人揃えばそこは忽ち風の句座
そして秋 風の記憶はそのまんま

山本希久子

紙ヒコーキと令和の空へ飛び立とう
人それぞれスクランブル交差点
子は二人居るには居るが老夫婦
三叉路の迷い閃き信じよう
認知症疑うほどのもの忘れ

板尾岳人

牛乳を飲んでおります敬具
一昨日も昨日も今日も生きている
歎異抄斜めに読んで生きており
小惑星お邪魔しましたまた来ます
秋雨に五枚小鉤の足袋を脱ぎ

川上大輪

両の手で包むわたしの昨日など
生きている間につけておく手垢
歳ですねと言われる歳になっている
二枚目の舌失言に輪をかける
歯ブラシがあるわたくしの秘密基地

木本朱夏

風はまだ熱い記憶を抱いている
太陽の殺意ものみな打ちのめす
この世煉獄為す術もなくよろめきぬ
自分のいのちは自分で守る保水液
われもまたムンクのように叫びたし

斉藤 焔

盲目の母を離れぬ仔馬の眼
好投手の隙をねらったセーフ劇
信念をつらぬく深い瞳だな
白い薔薇ぼつんと咲いて誕生日
森へ来てかえるの唄に迎えられ

新家完司

キムリアをやっと覚えた脳の隅
メルカリもほんやり分かりかけてきた
GDBランク覚えてポケ防止
GAF Aのたつた四つが出てこない
SNSやりたいけれどヒマがない

いい国ただけど嘘つき多過ぎる
信念もないのに欠けてゆく奥歯
饒舌と無口どちらも捨て難い
仏にも鬼にも会ったことがある
ラストシーン涙と笑顔入り混じる

高瀬霜石

竹治ちかし

申し訳ないで小さな生命消え
匠技見えないとこのリアリティー
育て方次第で角となる西瓜
輝いた時代は過ぎてから気付く
やるが多くて早くなる自転

津守柳伸

閑静なりゾート目指す鶴仙溪
常備薬食後タイムは姦しい
食養生徹して殻に閉じこもる
サスペンス独りの午後が熱くなる
意思疎通晴れのち曇り万華鏡

都倉求芽

昨日今日明日も同じこととして暮れる
われながらやれやれ凡ミスが続く
弱りくる体を受けとめる者が無い
十時間寝ても眠くなる午後三時
夏至の日の長さを実感する日和

存在感アンパンの臍ほどもない
喜ばねばなるまい恙ない老化
子の心配孫の心配二十五時
澄んだ空核などあつてなるものか
路郎師は何とおっしゃる私の句

西出楓楽

土橋螢

夏帽の埃はらつて旅終わる
ソーダ水訛りおかしくおもしろく
悲しみに堪える麦笛とは知らず
湯上りの髪撫であげて星涼し
父の忌に供える瓜にしるしつけ

第71回 西日本川柳大会

とき 10月14日(月・祝)
9時~16時

ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削
久米南町文化センター

第1部 締切

第2部 (当日) 各題2句・特別席題1句
欠席投句拝辞

兼題 (大会当日11時締切)

「ためらう」 高木 勇三 選
「騒ぐ」 牧野 芳光 選
「ふわり」 矢沢 和女 選
「魚」 小島 蘭幸 選

特別席題 (当日発表) 恒弘 衛山 選

参加費 2000円

主催 弓削川柳社

森の集句



『赤えんぴつ』

田中 正坊
たなか しょうぼう

善人と思うが力ない男
続編は誰も読まない私小説
一生に二度は変えない旗の色
脇役でおわった父のベレー帽
みどりの日昭和は遠くなりけり
朝の月 蟬三千が鳴くいのち
出会いからいい友だちになる予感
忙と閑その中ほどがむずかしい
肝心なところから腐る僕の国
句読点きっちりと打つ遺言書
赤紙のように病院から通知
生きているからやってくる誕生日
蝉だけが夏の終わりを知っていた
お月さま綺麗と妻が呼びに来る
何事もない日幸せかも知れぬ

(2005年4月23日発行)

温故知新

小出智子川柳集『落の臺』から

あじさい寺の冬を想像せぬことだ
ふる里の一本の樹を父とする
古いノートの真ん中辺にあった滝
ご先祖の足跡を踏む墓の道
立ち直れそうな五月の風の中
ありふれたドラマはきつと最高だ
三月がゆらゆらゆらと経ちけり
人形も齢をとらねばさびしかる
山の絵に替えて一日家を出ず
春は憂し犬小屋の犬にさえ
夫より包容力のあるポスト
五十半ば異性にものが言いやすし
何ということもないけど夫婦です
座蒲団の温みを他人だと思ふ
三文判夫婦になるはいとやすき
風船の脆さを知らぬ息子たち
酒を呑まぬ人がどこやら父に似る

水滸抄

川上大輪選

阿南市 小畑定弘

まだボクに最後の恋ができそうで

気紛れな君に恋した角砂糖

横顔を見ていただけの恋をする

誤作動の老春なれどいとおしい

もう少し風と遊んで逝くつもり

詩に耽る眉間にしわを寄せながら

寝屋川市 川本信子

ペランダの胡瓜素直に育つて

上出来の梅酒グラスは琥珀色

便利さに溺れて脳が萎縮する

老い同士老いの不始末笑い合う

せかせかを捨てて昭和の下駄を履く

日めくりの向こうで猿が笑ってる

三田市 稲角優子

煌めいていよう小さな花でよい

贅沢でないがまあい子が育つ

人の輪に溶けて小さな詩人かも

永遠に続く夫婦の見えぬ謎

病む友の便りを風よ知らないか

透析の命にしみる音をさく

和歌山県 三枝眞智子

口も手も若さに負けて空まわり

心配をするなど背中押されても

後戻り利かぬ余生に朝がくる

ふり向けば幸せだった夫婦なり

かんぐりはよそう可愛い嘘一つ

勢いをつけてチャンス物を物にする

大洲市 花岡順子

責任を背負うと強い足になる

ブレーキは黄色い旗を振る歩道

生きていく力お日様から貰う

雑草の名で足元に咲いている

悪筆を助けるメールからメール

野の花はみんな素朴な色に咲く

今治市 永井松柏

だとしても北海道が暑すぎる
マニフェストも仕掛け火花もすぐしほむ
進化した猿は哀しい嘘をつく

古伊万里に盛ればおいしいカップ麺
変化球を駆使する妻に敵わない

パスワード忘れて橋を渡れない

黒石市 北山 まみどり

ティーパック噂話が好きらしい

煮出し水出し面倒なのは嫌いなもの
冷静になればおかしなことがかり

笑いすぎ家族会議が終わらない
雨宿り期待をしておいけません

びしょ濡れになって本音を聞いてみる

門真市 坂本星雨

塾カバン夕日も見ずに突っ走る

夜学の灯こころの根っ子太くする
晩学の鉛筆削る幸がある

道草のよろこびはない電子辞書
サインコサイン私に明日の米がない

生き方の方程式を模索する

山口市 中前幸子

一期一会の契りを深くする風よ

雨の日のロマンよ赤いアンブレラ
満月の夜カーテンがよく喋る

風の絵の真ん中にある亡父の椅子
夕日に輝く波を裏切つてはならぬ
わき道に逸れてドラマが面白い

横浜市 川島良子

削ったり足したり人生はバズル
誉めて誉めて誉めて育てたはずなのに

嘔み合わせ会話まさか現実に
アクティブに生きてる今が青春期

血圧が上がりますよと釘をさす
いい笑顔遺影はこれに決めました

三原市 笹重耕三

向い風追い風人生を学ぶ

考え込み始めたオレの生命線
故郷に向いて時どき吠えている

無人駅で降りる独りの旅日記
惜敗に目立つ何でもないエラー

長男が朱肉を独り占めにする

広島市 松尾信彦

箇条書いつも私の前に行く
縮れ毛もお洒落のひとつ春うらら

青春の前から消えた角砂糖
ガード下B級グルメ列ができ

稟議書へ判押すAI近未来
罪なのは賢者か愚者か目で仕分け

京都府 北野 クニオ

梅雨空を萼紫陽花が引締める
蝸牛老いの私の暮らし振り
目の手術終えて視界が様変り
時刻表眺め日本を一巡り
花金に友と繰り出す赤のれん

京都市 櫻崎 篤子

跳ねて跳ねてミニスカートに夏が来た
週末の老いにもあつた赤い服
おしゃれとや所どころで肌が見え
人前で見せられないというおしゃれ
おいしそうな匂いが流れて来る夕日

大阪市 石田 孝純

五六枚見栄の鱗が残つてる
時代遅れなんて心地の好い響き
交換をすれば他愛のない悩み
道草はビタミンBが豊富です
名人は修業の身だと最期まで

大阪府 奥野 健一郎

気配りが完璧すぎて落ち付けぬ
出来不出来みんなチヨボチヨボさやの豆
無理なこと無理と言えずに無理をする
何時までも歩けるように竹を踏む
駄作と言えぬから個性的と言う

大阪市 柴本 ばつは

大嫌いほめられるのもほめるのも
若づくりへ鏡が苦い顔をする
無表情のわたしを叱る鏡です
仕方ない私の首に住む老魔
後期高齢でもお化粧はしています

大阪市 中村 峰子

懸命にやった分だけ傷深い
役立とう偉そうなこと考えぬ
メモ取ってメモを失くして探してる
何もかも記憶薄れていい加減
わが心時空を越えて旅をする

大阪市 降幡 弘美

憧れの浴衣を着たら関取に
色々な想い抱えて見る花火
消費税取らぬ子供のお店やさん
喜怒哀楽持てあましてる反抗期
卒業後解けなくなった方程式

堺市 楠井 輝子

なんやかや言うては男飲みたがり
真夜中の会話オット寝言やわ
虫好かんあちらも同じ思いでしょ
遣り繰りで増えた埋蔵金ウシシ
娘と旅生きたおまけを一つ当て

堺市 羽田野 洋介

見るからに健康そうなあの笑顔
やっぱりな見ると聞くでは段違い

ご意見が昨日と今日で様変わり
年の功隅に置けないお人柄
独り言声聞こえるが意味不明

池田市 上山 堅坊

虐待の子の逃げ場ない核家族
令和です想定内にしてよ雨
相変わらずが幸せという老いの日々
湿っぽい話は避ける老夫婦
忘れたくない不義理べたべた付きまとう

池田市 倉本 一弥

発車ベル急げ急げと背に鳴る
加齢かな目をこすつてもダブるロゴ
決め事に何故か一人はあまのじゃく
低気圧やる気スイッチオフにする
落ち着かぬ整理整頓された部屋

泉大津市 助川 和美

握り返した手の感触で答え知る
美味しかったその一言で妻笑顔
俺よりも先に死ぬなと口癖に
若造り見破られてるドッコイシヨ
優しさが惚れた亭主を駄目にする

貝塚市 吉道 あかね

二人三脚揺れて転んで来たふたり
小走りに夫の後について来た
絹よりも木綿が肌に合っている
次の世も選べたいという縁
七十年部品交換ないままに

河内長野市 原熊 知津子

銀盤へ十指が燃えるコンクール
インスタグラム栄養過多の花が咲く
フットワークの軽さ黙っていられない
ご馳走はおしゃべり友と待ち合わせ
罪犯す普通の人の闇深く

河内長野市 穂口 正子

アンタにも心があつた泣けてきた
なんやうちほんまあんだの毒消しや
予定入れ流れる時に杭を打つ
だましましたあちこち治し生きてます
トラ勝てと風船が舞う平和だな

吹田市 岩口 のぞみ

手をつなぐいつも誰でも温かい
普段より家事に追われる夏休み
日傘さす君もピキニを着てた夏
運動会綱引きだけで筋肉痛
鯉ならび魚屋で知る夏の声

高槻市 三谷 白黒

寝屋川市 岡本 勲

メールでは相手の空気わからない
ポスターで何を判断できませんか

若づもりシルバーシート避けてます

金無いが毎日畑幸せだ

蟬の子が出番待つてる鉄の先

豊中市 貝塚 正子

古寺の見たい所は立ち入れず

家を出る間際の雨にゆらぐ胸

つぐないをするかのように経上げる

日に私の細胞こわれてる

影法師二人で踏んだ姉傭ぶ

豊中市 木藤 こみつ

若草山にするため山に火を放つ

贅沢な私の舌はトロが好き

大阪のグルメたこ焼だけと違います

おいしいなやはり急須で入れたお茶

日本晴れ空が自慢をしています

豊中市 齋藤 奈津子

内緒ごと言い合い絆強くなる

入院に気持ち切り替え旅気分

朝寝して昼寝してまた長い夜

過疎の里老いて泣く泣く暮仕舞い

干し竿のてるてる坊主ずぶ濡れに

自惚れて能もないやつ爪隠す

口車に乗ってピンボークじを引く

わび方が癪にさわって又もめる

あの人がいつももめごとつれてくる

通帳が出て行く妻を止めました

神戸市 齋藤 隆浩

十連休過ぎても毎日日曜日

黄信号見たらダツシユは過去のこと

気休めに飲んだサブリが効いてきた

白髪染め止めて出かける同窓会

お賽銭キャッシュユが良いと仏さま

神戸市 山根 弘華

まだやれる信じていれば花は咲く

ふる里で誓った決意まだつぼみ

テーブルの花一輪の一人言

お誘いの上手な友に迷いだす

生きがいは川柳ですとペンを研ぐ

尼崎市 清水 久美子

談笑の中で掴んだ人間味

古稀の血を吸うてふらふらする蚊

阪神が負けたら家事を放棄する

立て膝で巻き爪を切る25時

朝顔の蔓が物干し跋扈する

一本のペンから描く夢無限

濁音を消して優しい風に合う

わけもなくしじまに溶ける座禅堂

白い画布希望の風が吹いてくる

大空と話している詩人の芽

伊丹市 岡村 風琴

国民はサミットよりも2千万

将来は政治家やるか嘘上手い

G20誰でも握手ポチもする

妻の留守急いで探すヘソクリを

雑草がこんな綺麗な花咲かせ

伊丹市 平井 富夫

足すよりも減らす勇気の程のよさ

それなりになけりやないで回る日々

スタンバイ合鴨チーム出番待ち

ストレスも丸め投げ込む洗濯機

天井のハエ輪ゴム一発狙い打ち

三田市 幸田 厚子

元気です震える文字で来た賀状

残りもの色よく詰めて一人膳

ほろ苦さ旨いと思う歳になる

真つ直ぐな瞳に怯み老いを知る

蜘蛛の糸力作すぎて破けない

三田市 中山 昭美

内視鏡光の先に癌見つけ

血圧計換えてもどれも高い圧

言いたいね小遣いだよと年金は

耳遠く研ぎ澄まされる注意力

バラ一輪食卓に乗せ妻想う

三田市 中山 寅男

いい案も最後お金にたどり着く

マスクミの罪はだあれも咎めない

トランプを悪く言っても自由です

なんでやねんあんた文句が多すぎる

なあなあで生きてゆくのも知恵のうち

宝塚市 太田 としお

犬掻きも蛙泳ぎもあるプール

哀れなり食用蛙野に放つ

盲導犬命預かる大仕事

結末が気になり先に読むページ

ライバルと握手を交わしうちとける

西宮市 高橋 千賀子

迷ったら上見て下見自分見る

とりあえず水のみ今日のスケジュール

日々速く未定のままで今日も暮れ

夢いくつ実現したか数えてる

不満事積もり積もって愚痴になる

奈良市 尾畑 なを江

生駒市 兄玉規雄

梅雨時の一句に黴が生えている
夏ばてで字余りばかりの句が出来る
爽やかな句が出来そうな秋の空
冬ごもりじっくり句想練る時間
スランプと言う程句歴長くない

和歌山市 北原昭枝

万華鏡ゆめみた頃の彩がある
ポケットにそっと入れてた一行詩
シャボン玉風に追われて恋が散る
風鈴が揺れてちちははいてた日々
夏の陽がおつかれさまと暮れて行く

和歌山市 倉橋悦子

嫌なこと洗い流した今朝の虹
梅雨なかば今日は狐のお嫁入り
起き抜けの顔は封印したくなる
デザートを食べて別れはいさぎよく
丹精を込めて咲かない花もある

和歌山市 定松宏枝

重すぎて計れないのが命です
宝クジ小さな笑顔連れて来た
蠍座の女ですけどだから何
朝ドラを邪魔する者は選挙カー
大騒ぎ平熱一度越えた夫

和歌山市 西川千鶴

見なかった事にする事多過ぎる
勝てぬ乱妻を相手に起こす日日
山折りの陰で谷折り拗ねている
夜勤終え白衣の天使羽畳む
はぐれ鳥地道に生きる術を知る

和歌山市 まつもと もとこ

明日からバリアフリーで生きていく
コンフォートゾーンにカビが生えている
死ぬなんて考えてない白いゆり
煩惱を消しカスにして丸めてる
銀杏の実ごと愛してくれますか

鳥取市 大前安子

年金日何を買おうか夢を追う
嬉しくて締まらない顔鏡知る
冒険心は健在だ立ち向かう
四コマ目まだまだ決めぬ夢を追う
生き方のギヤーチェンジは至難技

鳥取市 山野すみれ

車座にハンドルが付き舵取られ
断片の過去縫い合わす写真帖
怪獣と思っていたがただの人
腰を振り媚びを売るから首を振る
掃き溜めの庭にも咲いたバラと百合

元年に晩学ひとつ追加する

倉吉市 大羽雄大

梅雨明けを待ってる暖簾おいでやす

良い事が余り浮かばぬオベ前夜

今更と言いつつ力入れている

微酔いの笑顔なんとも美しい

米子市 生田和之

酒飲んでぐだぐだ言わぬわが美学

酒好きの虫が目覚める午後十時

呆けても自己責任は取るつもり

鄙に住みどうにも免許手放せぬ

団地発バスは駅まで客五人

米子市 川本美津子

古希も過ぎつぶやきながら見る鏡

100歳を過ぎて令和に生きる義母

トゲの無いもっこうバラの弱さ知る

ありのまま悩みを亡母に墓参り

夏なのに自然に冷える夫婦仲

米子市 戸田真理子

アクセルを踏んでばかりで恋が逃げ

心地良い風がストレス持って行き

白紙にも言いたい事がちゃんとある

日記帳涙の跡が一ページ

傘欲しい紫陽花だつてあるでしょう

二千万ないが元気で生きている

鳥取県 橋本 整

ささやかな暮しが絆を強くする

がむしゃらに生きてた妻に先立たれ

相槌の相手が旅にでたまんま

熱中症男も日傘くるくると

松江市 中筋弘充

施設でも人の面倒みたい義母

来賓をその気にさせる胸の花

中締めが済んで本気を出す幹事

先頭は酔ってはならぬ渡り鳥

度胸決めた果実はどんと落ちていく

松江市 山根 邦代

窓開けて今日の空気をたしかめる

暗い声出してはいけん電話です

落ち込んだ所に届くサクランボ

転げ出る自慢の野菜友の顔

布遊び遊びの友は針である

安来市 原 徳利

夏だ夏完熟トマト丸かじり

梅雨の入り遅くなったと篠を突く

謎かける今日は何の日ゴミ出し日

呼ばないと降りては来ない神のエゴ

氷山が崩れるような片想い

笠岡市 小野 美那子

堂々と正論つぶす多数決
千金を掴むと馬券握つてる
めんどろだ前へならへで立つてやれ
照り過ぎてまごころの種育たない
裏方を好んだ姑の丸い背

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

一つずつ納得しながら老いてゆく
趣味の花朝な夕なにいやされる
気まぐれで始めた遊びで生き伸びる
さっぱりと汗を流せと陽は沈む
字忘れでまとも辞書ひく老いるとは

尾道市 日谷 寛

道頓堀の雨なないろに聖子逝く
にんげん陶冶みんな合点句碑祭り
もう少し生きて癌との狂詩曲
笑い袋癌ひとつ入れ癌が飛ぶ
遠火花今ふるさとに帰る夢

竹原市 若年 幸子

渴水も溢水も困ると空仰ぐ
萎れてる私へ友の言葉水
友の橄背押し足押し腰を押し
妖怪と握手おもしろ博物館
NASAからのラインは孫とロケットと

三次市 伊藤 寿子

よく眠れた朝しあわせだと感謝
最期の舞ばかり考えてたわたし
良く喋る妻は仕事の副作用
美容院へ行った日見せたい客が乗る
検査結果分かる日時計進まない

山口市 青木 隆子

後ろ見ずいつも灯りを消し忘れ
富士登山今は誇れる思い出に
寝苦しい両手を胸に乗せていた
親だもの許せば心軽くなる
心底に口に出さない愛がある

高知市 三谷 松太郎

立った腹すかしまして花も見て
庭見ればツタやツワブキ威張ってる
あわれともゆかしても言い八十路行く
とにかくに避難避難で留守がちに
夕蛍光らにゃならん悩みあり

沖縄県 あら さくら

女子会へ娘と競いヒールはく
裏表すべて出しきりプロポーズ
幸せに時間止まれ封をする
はっきりと映す手鏡嘘つかず
訴えた痛み医者に加齢です

ぎりぎりにドタキャンするのそれないよ
沖繩県 宮 すみれ

梅雨明けに太陽様にハグされる
雨風に不機嫌なのは誰のせい
聞き上手そこから知恵が生まれくる
我がハート遊び心と共に生き

佐賀県 真 島 久美子

押し花の色も噂も褪せてゆく
義理で咲く野の花なんてないんだよ
待ち人は来ないコインは裏返る
既読無視そろそろ夏が底をつく
蜘蛛の巣の無言見上げている無口

仙台市 月 波 与 生

野垂れ死のたましいよわれも空腹なり
カプセルホテルの中身として眠る
観覧車わたしを見ない人を見る
黒塗りを余白に変えた詩人の死
寝返りを打つたび滝の乾く音

横浜市 巖 田 かず枝

ふうよ思い出をいっばいありがとう
わかさぎとお手が嫌いな犬だった
十八年病気もせずに頑張った
得意技お尻くねくね笑うこと
狭い家がらんとしてるもう居ない

神奈川県 小 田 幸 子

白髪寄せ幼なじみの悪だくみ
今が旬他選と自選食い違う
なぜだろう一晩寝ても疲労感
猛母だが小さな犬に守られて
月明かりほろ酔いかげん迷い道

富士見市 中 島 通 則

免許返納乗り換えたのは車椅子
人生ゲーム孫に教わる処世術
人生の満ち欠け見てるお月様
妻の愚痴さらりと流す鈍感力
「そだねー」が老いの二人の潤滑油

名古屋市 山 本 三 樹 夫

俺俺が人の涙を吸い尽くす
地球儀の変えてはならぬ軸足を
好きな道真つ直ぐ歩き花が咲く
一票の格差が地図を塗り替える
消費税上げて議員が席守る

江南市 脇 田 雅 美

如才無い知らず知らずにストレスが
振り向いて猫の鳴き声持ち帰る
夢に見たお花畑のちらし寿司
仲間達と飲んで帰れば独り者
特効薬笑顔一番効き目あり

大阪府 中村 民子

何げない言葉一つで不和になる
生き方を変えて人生楽になる
愚痴を聞く老いた体は疲れ切る
五目寿司ふと姉僽び箸とまる

大阪府 横山 里子

いい湯だなドリフの歌が出る露天
陽が匂う洗濯物にいつも猫
去年まで渡れていたが太鼓橋
違反切符おしおきは免許返納

大阪府 前川 善之

梅雨入りでアジサイ元氣取り戻す
僕の思いと違う道行く日本国
人間もペット犬とも熱中症
人生を笑い通せば福が来る

堺市 古川 光雄

上がることない年金にしがみつく
飲んだ分喰った分だけ腹が出る
作業衣と言ったたジーンズよそ行きに
年毎に身の丈縮み老いて行く

大阪府 松田 聰

G20 警察ばかり目立ってる
どの国もトップの本音探れない
堀潜るこの徹底ぶりがあってこそ
警備三万大騒ぎして無事終る

河内長野市 渡邊 修

トランプに誉めてもらったら吉か凶
齒科治療合間の会話コツが要る
飲み会で八時に帰ると妻不安
飲み助を毎夜吸い込む赤提灯

大阪府 宮本 千恵子

京都の町で訪日客に道尋ね
アプリ使えず年相応の顔写り
苦瓜の苦味を好む歳になり
サミット終わりウグイス嬢の出番です

豊中市 荒木 郁子

紫陽花に元氣を貰う雨上がり
足軽く歩数が伸びる五月晴
釈明にのらりくらりと時稼ぐ
胸痛む事件が続く暗い朝

大阪府 森 廣子

蓮の葉の裏情報が洩れている
割れガラス踏んで自虐の血を舐める
何時だって出番を待っているレモン
モヤモヤが紫色でやって来た

寝屋川市 坂本 ミヨノ

あとしばし赤い服着て一人恋
澄み渡る月に悲しみ詰め折る
金粉を浮かせてきらり生きて見る
おばあちゃん静かにしてと口にあめ

羽曳野市 磯本洋一

タイガース梅雨は明けたぞさあ走れ

音信不通スマホ買ったと便りあり

常日頃腰は低いが血圧は

コンビニ出来て店屋物食う朝昼晩

枚方市 谷英也

今日もまたサブプリメントの世話になる

同窓会サブプリメントで元気よく

人生の積み木百年生き生きと

ほろり酒体に一番いいという

八尾市 田邊浩三

年金じゃ足らぬと今更言われても

またケンカ賞味と消費期限の差

梅雨遅しひび割れた田に豪雨来る

子を叩く親が逮捕をされる世に

八尾市 前田紀雄

夕立がそよ風連れて来る夏日

せせらぎに癒され和む小半日

折り入って令和の平和永遠に

私のポケットマネー闇営業

大阪府 神野千恵子

七癖もなく個性が消えてゆく

飛行機雲お蚕糸を吐くように

しっかりと食べて飲んでる高島田

賛成と起立してから訊く議題

大阪府 高木道子

サミット明けが沸点となる交通網

雨好きの紫陽花ばてる深い梅雨

半額と貼られた鰻顔を見る

天狗の鼻のせた眼鏡がずれている

神戸市 大頭としお

紫陽花と挨拶交わす雨上り

遣り残ししこたまあつて生きてます

幸せのお裾分けです召し上げ

自分史の余白に記す綺麗ごと

神戸市 輿水弘

満月も月下美人も詩が好き

途中下車風の吹くまま気まま酔い

暑がりの亡父の墓石に水浴びせ

楚楚とした喪服の妻に目をこする

神戸市 米田利恵子

正確な時計を持ってぐうたらに

居酒屋の空気慰められる音

ピーマンもわたしも夏に生き返る

二度の職準備がそろおう武者震い

神戸市 近藤勝正

信用してるよ君はナスの花

我が家でも妻が提出不信任

子に帰り素直になれる父母の墓

この年で甘えてしまう父母の墓

神戸市 田本古鈴

少しづつ夏が近づくとカレンター
雨上がり人の気配がにおい出す
胸底に鬼を隠して今日も笑み
幸せのバトンをつなぐ若人よ

神戸市 松倉正美

背に腹は代えられなくて闇営業
詰めません当て字だらけのキラキラ名
蛇嫌いでも大好きな鱧鰻
無礼講崇りが遅れてやつてくる

尼崎市 山田厚江

空豆が食べられるよと垂れ下がる
外人さん足を伸ばして経を聞く
パドックで馬のおしりをジーンと見る
なぜだろう太鼓の音に疼き出す

伊丹市 延寿庵野鶴

裏漉しへ拘りがあるシェフの舌
万葉集価値観上がる令和の世
相槌を打つていづれか返事待ち
余命欄余分なことはカットする

小野市 田中辰夫

ばあさんの指示でちよこまか動く爺
美味いメシ鍵は老妻目分量
一帳羅で決めてそわそわ見合席
除染済み戻るか否かふるさとに

三田市 生田えい子

遺産分け釘さす父のふがい顔
満ちる程飲んで寝言はもう一杯
診療所日に三便のバスが来た
あこがれた彼の加齢臭気にかかる

三田市 辻開子

泣き顔がハグで晴れてる絆かな
急ぎ足朝刊今日は休刊日
久しぶり熟睡出来て生き返り
雨上がり深緑はえて虹もでて

三田市 東内美智子

何故かしら私だけかなこう思う
手習いで毛筆令和はめられて
のほほんと老いていくのは惜しくなり
かと言うて八十路過ぎてはもうおそく

三田市 馬場貴美江

プライドが老いの世間を狭くする
湯治場で過去の栄光語る老い
医者通いのまぬ薬が溜りだす
あんた誰心凍てつく母病い

三田市 森玲子

京も雨庭の雑草騒ぎ出す
無職ですしっかり寝ます食べてます
何しよか三度のメニニュー悩む日々
乳児期の成長孫で知る夫

宝塚市 岸田万彩

ボケテストぎりぎりパスの免許証

勝ち組は割り勘の手間嘲笑う

ご近所の雑草源はうちの庭

大阪をまるで蹂躪G20

丹波篠山市 澤良子

大根炊きおふくろの味飽きがござ

年金が悲鳴をあげる連休日

初恋で握った手と手は今介護

我を捨てる笑顔が運を引き寄せる

丹波篠山市 藤井美智子

八十路入り元氣ほどほどマイライフ

ネタ搜し脳の隅から拾い上げ

亡夫亡父母に毎朝もらう今日の無事

少な目の言葉と食で身を守る

丹波篠山市 横溝安子

傘寿でも一番美人と言われたい

やめなさい右手お箸で左スマホ

財布の紐解けないように固くしめ

買おうかな一ど財布に聞いてみる

三木市 山口ヨシエ

水平線父母の面影漂うて

ほんぽんと漁船行き交う夜の底

夕風に恋の囁き甘い風

潮騒を聴いて寄り添う須磨暮色

奈良市 加藤江里子

この年でと妻のトリセツ読む夫

燕の子七羽顔出し母を待つ

片袖を濡らして巡る紫陽花苑

夕暮れて茅の輪をくぐる古都の寺

和歌山市 佐藤まき

二千万今始まった事じゃない

骨折を招いた過信悔やまれる

都会には歩調の合わぬ野の案山子

和歌山に住んでバンドにまだ逢えぬ

和歌山市 鍋嶋澄子

青い空花咲く道を胸はつて

久方に古き大和路訪ねゆく

朱雀門古人の祭あと

ふわりとぶたんぼの子ら何処へゆく

和歌山市 福島一雄

菜園にひとさわ威張るさとうきび

氣持ちだけ玉葱配る余裕出来

殺虫剤取りに行く間に蚊は消える

やっとこさ家族旅行へ夢を追う

岩出市 村中悦男

経験がからんで迷う後期です

生き生きと過去今にして話す妻

躓き石に年相応を注意され

明日があるそのあきらめて明日を待つ

和歌山県 森 下 よりこ

気をつけているのにまたも蹴躓く
梅雨晴間待つてたようにダリア咲く
あじさいが満開ですと梅雨半ば
ゴミ屋敷の予感片付け下手でして

鳥取市 上山 一平

麦わら帽市民農園卒業す

黒茶けた麦わら帽も箔がつく
ホタル来い甘い辛い選挙戦
蒲焼きの匂いつれない暑氣払い

倉吉市 伊藤 嘉昭

潔い意志仁美のハートは海のように

幸あれと美樹に捧げる愛の詩

幸せは郁代の笑顔とこころ意気

あたたかいちかこの心が幸を呼ぶ

倉吉市 堀 かずこ

選んだ道何があろうと耐えていく

小走り歩いてみても遠い道

目だたぬが誠意黙ってみせている

あきらめず地道な努力光ってる

倉吉市 宮田 風露

身のこなし見ればあなたとすぐ判る

赤い服似合うと言われ今日も着る

ワンコイン今日のランチはこれでよし
夕焼けが明日はいい日と告げに来た

境港市 中井 虎尾

八十が子供にもどる夢の中
歩きつつ月をながめず止まり見る
今の俺居留守でなくておつて留守
世に見せたトランプ金の政治ショー

米子市 黒田 紀美江

髪染めてまたひと月を生き延びる

いつ返す夫婦の会話続かない

美人でも美男でもなく丁度良い

脳の中掘り返しても出ぬ言葉

鳥取県 飯野 莒子

玉の汗これが私の生きた道

ボランティア声がかかれは何処までも

好奇心あるから日々が成長期

人生を灯す明りを抱いている

鳥取県 下田 茂登子

今更に亡夫に詫びてももう遅い

家の中小銭も見えぬ低年金

心配も度が過ぎて逆効果

安倍さんの頭の中が見てみたい

鳥取県 西谷 悦子

記憶の戸開く合鍵ないものか

美辞麗句七割引いて聞いている

仕分けして要らぬプライド洗淨す
ときどきは絆を洗い確かめる

鳥取県 橋谷 静江

気が焦り時間早めに準備する
住み馴れた家で暮そう高齢者
バイキング誘われました断った
息子達頼りたいけど無理かなアー

松江市 相見 柳歩

谷もあるそこで大事な拾いもの
恵まれてだから坂もうれしくて
伝統のチカラ球児は入れかわる
さあどうぞ大黒柱ゆずります

出雲市 黒目 ひでお

世直しに仲間ができてほっとする
板門店トランプ尋ね歴史変え
日韓の通商摩擦気がかりだ
中東に戦こりごりイラン危機

雲南市 永見 安子

年上の夫の元気に元気出て
遠慮ない一人のくしゃみ思いつきり
おはようの一声今日の調子知る
両親のなき里足も遠くなり

益田市 篠原 紋次郎

やせたのか暑さ寒さが身にしみる
お迎えはロケットですかお爺ちゃん
カエルの子はカエルでしたよお父さん
前を飛ぶ蛭は父の化身かも

広島市 田桑 恵子

朝一番きゆうりの艶が生きている
漢字帳脳活せよと子が渡す
子の誘い言わずもがなの金庫役
スニーカーズックの方が言いやすい

尾道市 小畑 宣之

わが菜園目立つ緑は雑草さ
虫除けの箱に入らぬ娘達
衣食足りて礼節まるで知らぬ人
良心に恥じているのか居丈高

竹原市 土井 輝恵

金貸せぬ言われた言葉バネにする
疑いは晴れた心に虹が出る
祝退院老老介護始まりぬ
入院がチャンス免許の返納を

府中市 岸田 武

袈裟がけにシート取り込む俄雨
角ばっている優しさも冷奴
歩幅やや大きく跨ぐ蟻の列
何となく不安八十路のあれやこれ

松山市 郷田 みや

化けてみたちよっとだけです赤い爪
きつと晴れカバンに詰めるペアルック
とんがったヒマラヤ杉を丸く切る
誘おうか理由さがしているところ

沖繩県 禱 モモト

砂丘でのらくだ相乗りVサイン
イントロで息子CMすぐわかる
梅雨明けて花を訪れ蛭蝶
締め付けた帯を緩めて気分良く

福岡県 本田 さくら

小道具が美人に変える昼下り
地獄絵に変える戦は死語にする
血圧に一喜一憂朝と夜
ひまわりが二葉をみせた早く咲け

唐津市 岩崎 實

介護され心の通いあるがまま
張つてくれ腰をさし出す娘の前に
この痛み報いと悟り我慢する
景勝と労働棚田の向かい合い

宮崎県 黒木 栄子

物忘れめつきり増えて老いを知る
妻の愚痴お経の如く聞いている
古里の柱の傷にあるドラマ
すんなりと行かぬこの世の夫婦旅

黒石市 千葉 風樹

綱引きの隙間すきまの核ボタン
逃亡の先は故郷の牡丹雪
骨重し父の天寿をしかと抱く
翼まだ着地の風は掴まない

五所川原市 むらの ひとり

世の中はトコロテンです立ち蕎麦屋
香り立つウツボカズラやネオン街
気概だけ只がむしろにホルモン屋
シヤッターに挟まれたまま田舎町

弘前市 高森 一 吞

せせらぎが癒す盛夏の紫陽花園
蹴飛ばした小石おのれに跳ね返る
お前より先に逝くとは限らない
結婚の一言ひたすら信じてる

白河市 鈴木 たけし

下駄箱に眠る熊鈴登山靴
冷蔵庫開けると止まらないくしゃみ
ここ空き家みんな都会で出世した
駅長をネコに委ねる過疎の駅

横浜市 加藤 佳子

切り抜きが好きな女の裁ち鋏
人生相談つらい女が多すぎる
自然体で生きていますと赤い舌
リクルートスーツに贈る応援歌

横浜市 長 島 亜希子

ビルに囲まれてタワーが遠慮気味
性善説死ぬまで信じたいけれど
席譲られた訳考える年齢差
誕生祝回転寿司を所望され

(高岡弥生さん、廣瀬良磨さん、渡辺芳子さん、富田末男さん、小松くみ子さん、西郷紀美代さん、岡村風琴さんは41頁にあります)

軽文学に終る勿れ

麻生路郎

私が川柳に手を染めてから、既に三十八年にもなるが私の川柳は私の思うほど進境を示してくれない。私の愛好する川柳の世界は私の思うほど眼を開いてはくれぬ。私は日夜この事について懊悩を続けている。今日ほど地方文化が叫ばれている時代に、地方文化の根幹をなさねばならぬ川柳に対して、識者がこれを取り上げることの等閑であること、川柳人自体ですら認識不足の甚しきを思う時、これが貫徹を期している私は自己の微力を慨嘆せずにはいられない。

私はかかる時、糞虫（スカラベサクレ）の研究に其の生涯をささげた世界的博物学者アンリー・ファブルを想い、経済学の始祖アダム・スミスが著作に対する努力を想い、国を逐われても、なお資本論の著述を死の直前まで執筆し続けたマルクスの偉大な精力を想わずにはいられない。

世間では川柳を市井の一文芸に過ぎないと見て、これ

が研究を忽諾に付しているが、私自身は川柳を、しかく軽文学視してはいない。

川柳を深く研究するに従って、それは人間陶冶の詩であることに想倒しなればならないのであるが、世人の多くは、これが研究を怠り、単なる読破により皮相の観察をなし、遂に門外漢たるに過ぎざるは甚だ遺憾である。

しかしながら、世人の認識不足を責むるに先だつて先ず川柳人自らの微力を想い、只管研鑽に邁進すべきではなからうか。

川柳が明治に復興して既に四十年に近い。しかもこれが真髓を説く一書すらなく、僅かに数冊の古句研究書貧弱なると句集と隔靴搔痒の入門書があるに過ぎない状態である。斯界の進展の遅々たるも宜べなりと云わざるを得ない。

静に私は思う。今にして川柳人が川柳を再検討し、真にその価値に傾倒し、地方文化の根幹として人間陶冶の大使命を果たさなければ、川柳は永久に市井の軽文学に終るであろうと。

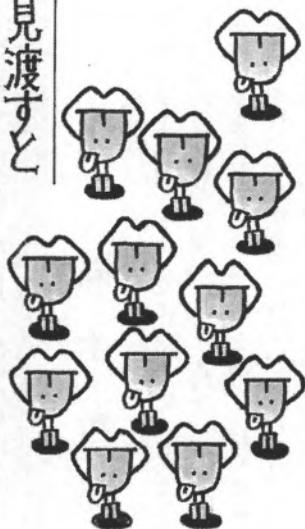
柳誌統合問題が各地に頻発する時に際し、川柳人は政治的紛争を払拭し、これが内容的進展に一層の努力を払うべきではなからうか。切に自省を望む。

（川柳雑誌「昭和十六年六月号より」）

◆麻生路郎 ■明治 21 年 77 歳
~昭和 40 年

コダのまごころをみんな持ちこ

見渡すと



◆主幹六代◆

年	創
を	刊
祝	95
す	周

◆中島生々庵 ■明治 31 年 89 歳
~昭和 61 年

妻は俺にもつけたり

迷子札



◆ 歴代主幹・在任期間

◆麻生路郎 ■大正 13 年
~昭和 40 年

◆中島生々庵 ■昭和 40 年
~昭和 57 年

◆西尾 栞 ■昭和 57 年
~平成 6 年

◆橋高薫風 ■平成 6 年
~平成 12 年

◆河内天笑 ■平成 12 年
~平成 22 年

◆小島蘭幸 ■平成 22 年
~

◆平本霧石人画

◆河内天笑 ■昭和9年 85歳



◆西尾 栞 ■明治42年 87歳
~平成7年



◆小島蘭幸 ■昭和23年 71歳



◆橘高薫風 ■大正15年 79歳
~平成17年



おやじの川柳

出久根達郎

小学三年生頃からの川柳ファンだ、と言うと人は驚くが、正しくはその年くらいから川柳を読んでいたのである。詠んでいたのではない、作品を読んでいた。しかも一人の、特定の作者だけに限って、である。

有名な柳人ではない。全く無名の作者である。もったいぶるのは、よそ。作者とは、私の父親である。

父は出久根修といい、戦前は手動の活版機を使って、名刺や挨拶状など簡単な印刷を請け負っていた。戦争になり仕事が減少し廃業、戦後は何を始めたかというところ、新聞雑誌の懸賞応募である。読者作品応募欄に投稿し、賞品賞金の獲得に血まなこになった。ありとあらゆる募集に応じた。懸賞ジャーナルだか、募集一覧を載せた専門紙誌が発行されていて（当否の結果も出る）、これに頼って片っぱしから投稿していた。

小説、漫画、詩歌、標語、校歌、社章……ジャンルを問わない。下手な鉄砲も数打ちゃ当たる、でまあそこそこ入選していた。したが賞品はボールペンとかタオルとかノートの類で、それらを村人に買ってもらった。たまに送られてくる現金も、目をむ

くほどの額ではない。

投稿で飯を食おうと考える方が、どうかしているのである。バクチを打つより、たちが悪い。昼どき出久根の家の前を通ると、水をすする音が聞こえる、とうわさをされた。

しかし、あるじはどこ吹く風で、「貯蓄奨励標語・川柳」などに頭をひねっている。出きた標語が「やせるは現金・太るは貯金」、川柳は「貯めぬいてからはどうやら若返り」「貯金しに行く靴しかと紐を締め」「竹筒の貯金どうして侮れず」「お若いに似ぬ貯めつぶり見込まれる」

ハガキ一枚に一句か二句を記し、他のジャンルの作品のもの何十枚と一緒に、毎朝登校する私が、学校前のポストに投函する役を仰せつかった。道々、一枚ずつ読む。へえ、川柳ってこう詠むのか、と父の作品が教材である。

目を通しているうちに、面白みが出てきて、意味もわかってくる。ませてくるのである。「倦怠期」という言葉を知ったのも、父の作品からだ。この題で父は何通も応募していた。

「倦怠期かいと叔父さん遠慮なし」「倦怠期にも仲人は

ちよつと触れ」「義理めいたキスで離れる倦怠期」「倦怠期無ければたまつたものでなし」

こんな川柳を読んでいれば、ませてくるのも無理はない。

当時、『夫婦生活』という軟派雑誌があった。これにも投稿していた。「サイクリング尻の動きを見て疲れ」「ミシン踏むリズムへふいと顔赤め」

前者はともかく、後者の意味を何となく察知した。投稿先の雑誌名からの想像に違いない。

こうして父の作品を紹介できるのは、遺品のノートが手元にあるからである。作品の頭に朱点が打つてあるのは入賞の印らしい。

「落第を笑ってくれるいい親父」に二重丸が付いている。

この句には覚えがある。一体、誰のことを詠んだのだろう？と首をひねつた記憶があるからだ。どうせ落選さ、と思つていたら入選の通知があつて、賞品に川柳漫画家の肉筆色紙が送られてきた。句の情景をそのまま描いた色紙である。

例によつて愆意の村人に持ちまわつたが、これだけはついに買ひ手がつかなかつた。縁起悪いと断られた。

ある日、親父のこんな川柳を目にして、ギョツとした。

「まっとうでない親だとは子らも知り」

私は何も言わなかつたが、父は私が一等最初の読者だとは認識していたろう。もしかすると子に読んでほしくて、創作に励んでいたのかも知れない、と今になると思う。

小説や戯曲などハガキ一枚に収まらないものは、封書で送つていた。エロティックな内容が多かつたようである。小学生の息子には害の無い作品を読ませていた、と言える。川柳の裏の意味までは理解できまいと、侮つていたと思う。

あにはからんや息子は、人の思いや考えの複雑なること、世態の尋常ならざるさまを、親父の作品を通して見知り学んでいたわけだ。

父は私が古書店を開業した年に、七十六歳で亡くなつた。こんな歌を詠んでいる。「十余年書舗に勤めし甲斐ありて独り立ちする吾子に幸あれ」

母と共に上京し、小さな私の店を眺めていた父は、雑誌棚に「家の光」という古い雑誌を見つけた。偶然にも父の詩が掲載されていた。あつと声を上げた父は、それきり棒立ちのまま誌面を見つめていた。どのような感慨であつたらう。

父の川柳をいくつか掲げてみる。

「からくりがあつて門戸も張りは張り」

「恩給を全部播^{すり}餌にして足らず」

「機械化へ耳も貸さな手八丁」

「人情味ない男でも汗をかき」

「夫婦相和して大きなクサメをし」

「髪の色母娘で染める時代が来」

いずれも未発表、活字化はこれが初めてである。

人情についてちよつと

坪内稔典

かしこい事をすぐに言いたくなる阿呆

『田辺聖子の人生あまから川柳』（集英社新書）に引かれてい
る亀山恭太の句だ。この人、「番傘」で活躍したとこの本の末
尾の「川柳作家略歴」に出ている。

私なども、かしこそうな物言いをしたくなる事が時にある。
偉そうにふるまいたいのだ。むつかしい言葉、たとえば専門用
語とか英語などを使うのだが、それは阿呆を証明しているみた
い、と恭太の川柳。

この川柳に影響されたというわけではないが、私は今、十歳
ぐらいの子に通じる言葉で話したり書いたりしたいと思ってい
る。七十五歳と十歳が言葉の同じ位置に立つ、これって、とて
もすてきな光景だと思っているのだ。もちろん、実際は、老人
の勝手な夢で、なかなか同じ地平にはたてないが、それでも、
たとえば小学四年生のクラスで

春の風ルンルンけんけんあんぼんたん
たんぼぼのぼぼのあたりが火事ですよ

というような自作を紹介すると、子どもたちの表情は一挙にゆ
るみ、このおじいさん、なんだか変でおもしろいな、という顔
つきになる。私としては同じ地平に立っていると錯覚してしま
うのだ。

今年の六月初め、田辺聖子さんが九十一歳で他界した。この
小説家は、川柳にとても肩入れした。川柳が好きだ、と言いつ
けた。俳句についても小林一茶や杉田久女の評伝を残したが、
俳句は好きではなかったと思う。いや、五七五は好きであった
が、俳句につきまといっている権威主義というか、かしこい事を
誇る雰囲気嫌いだったのではないか。一茶や久女の評伝を書
いたのも、この二人の俳人を、権威主義やかしこぶる俳句界の
世界から救い出した、と言ってもよいのではないか。

聖子さんは「川柳でんでん太鼓」や先の『田辺聖子の人生あま
から川柳』という本で、現代の川柳を広く世間に紹介したが、彼
女はこのようなことを俳句や短歌についてはしなかった。それ
ばかりか、聖子さんは近代の川柳史を『道頓堀の雨に別れて以来
なり―川柳作家・岸本水府とその時代』の上下二巻にまとめた。
この分厚い本については、新聞に書評を書いた記憶がある。

私の手元のその本には、赤や青の付箋がたくさんついているが、それは書評のための付箋だった。書評で何を書いたのか、なに新聞だったのかを今はすっかり忘れていたが、川柳をやや羨ましく思ったことを覚えていて、こんなにも川柳に肩入れする人がいることに感嘆し、羨望の思いを禁じえなかったのだ。次に引くのはこの本のあとがきの一節である。もちろん、ここにも私は付箋をつけており、鉛筆で傍線まで引いている。

私が川柳愛好家であるのは、私の書きたい小説風土が川柳の持ち味に通底しているからであろう。私は市井の人情（親愛もエゴも倨傲も偏見も猥雑もふくめて）とユーモア（辛口にしる甘口にしる）が好きだ。常識的に見えながら、突如取りはずす間のおかしみ、平均的発想とのズレを好む。川柳にはそこを衝いた着想も多いからだろう。

今、書き写しながら、ユーモアは好きだが、市井の人情はどうも苦手だな、と私は気づいた。人を愛したり敬愛したり、ときには嫌ったり憎んだりする。つまり、市井の人情を私も生きているのだが、その人情を重苦しいと思う気分が私にはある。家族や友人なども淡々と交わりたい、と考えている。もしかしたら、この気分が私を俳人にしたのかもしれない。私のあんぼんたんやぼほのあたりの句は、人情から遠いというか、人情などをほとんど感じさせないだろう。私は心身のほぐすユーモアを大事にしているつもりだが、人情とユーモアを絡めて考えることがほとんどない。私は非人情派、もしかしたら反川柳派かもしれない。

さて、冒頭にあげた亀山恭太の句だが、私の読みはちよつとかたよつていたのだろうか。田辺さんは「川柳でんでん太鼓」のあとがきで以下のように述べている。

日本の社会には、往々、面白いものは低俗で、芸術はむづかしいものだという思いこみがあるが、大衆は半分はそう思いこまされつつ、半分は、すこやかな直感で、「それはどツカ、おかしいのん、ちやうか？」と思っっている。大衆は（私もむろん、その一人である）「アホ」なように、「カシコ」である。「カシコ」なように「アホ」な点もあるが……）そして川柳は、その大衆の、すこやかな直感の部分、「カシコ」の部分の精髓が、形をとって成れるものである。川柳は愛すべく、貴むべきかな。

この田辺さんの言い方だと、「かしこい事をすぐに言いたくない阿呆」は、アホなようにカシコな（カシコのようにアホな）川柳ということになるのではないか。私はかしこぶる人を読みとり、その人をアホと難じていると見たのだが、私のその読みは人情を介さない野暮な読みだったかもしれない。かしこい事をすぐ言いたがる自分の内のアホさかげんを見ているカシコさに、この川柳の人情の厚み、微妙なユーモアがあるにちがいない。

とは言っても、私としては、かしこい事を言いたがる人を端的にアホと難じた句、としてやはり読みたい。その端的さに快さを感じるのだ。以上、他界した田辺さんをしのびながら、田辺さんに問いかけてみたかった事の一端を書きとめた。

ある論争

有栖川有栖

どの世界にも「ほお、そんなことで議論になりますか」ということがあるものです。私が専門とする推理小説の世界にも。「一人の芭蕉の問題」と聞いたら、何のことかと思われるでしょう？

命名したのは江戸川乱歩で、昭和二十七年「ロック」という雑誌に掲載されたエッセイに出てくる言葉です。この問題が喧伝されることはとうになくなりましたが、推理小説の熱心なファンの間ではよく知られています。

乱歩がこのエッセイを書いたのには背景となる出来事がありました。探偵作家の木々高太郎（大脳生理学者・林麟）と甲賀三郎による論争です。乱歩は、その間に「まあまあ。私はこう思うよ」と割って入ったのでした。

どういふ論争だったか平たく言うと、探偵小説は文学をめざすべきか否か、ということ、推理小説の世界では文学論争と呼ばれています。

探偵小説は刺激的で煽情的な娯楽読物にとどまるべきではない

いと考え、謎や論理の興味がどれほど優れていても文学性を欠いては駄目だ、とするのが木々説。

甲賀説は、いくら文学性が高かろうと謎や論理の興味が後退したら本末転倒であり、探偵小説としてはつまらない、とする。関心のない人にすれば、「どっちでもええやないか。おのこの作家が好きないようにせえ」でしょうが、推理小説史に残る論争です。

終戦の二年後に、もうそんなことで言い争いをしていたのか、とも思いますが、戦時中に探偵小説（推理小説という呼称に変わったのは戦後）がアングロ・サクソンの敵性文学として弾圧を受け、壊滅状態にあった反動もあるのでしょうか。

終戦後は、封建的な価値観で書かれた時代小説がGHQによって禁止されたことも後押しとなり、探偵小説＝推理小説は戦時中とは打って変わって活況を呈しました。

明治時代半ばに欧米から入ってきた新しい文芸で、大正時代後半になって乱歩を皮切りに日本人作家が生まれて人気を博

し、根づいたかと思つたら戦争で潰え、終戦で復活し——という流れで、当時はまだ〈探偵小説の青春時代〉だったとも言えます。理想を語り、論争したい年頃でもあったのでしよう。

乱歩は大人らしく双方に理解を示しながら（どうしても一方を選ばなくてはならなかった場合、おそらく木々説は採らなかつたでしょう）、両説の止揚を計ります。木々君が言うのはもつとみだけれど、なまなかのことでは達成できない理想だ。しかし、いつか「革命的天才児」が登場して、成し遂げるかもしれない、と説いたので。その才能こそが「一人の芭蕉」です。

乱歩曰く、「和歌の滑稽卑俗なるものから分脈派生した俳諧はもともと市井俗人の弄びにすぎなかつた」が、「芭蕉の個人力は、貴族歌人嘲笑のもとになったこの俗談平語の俳諧を、悲壮なる気魄と全身全霊をかけての苦闘によって、遂に最高至上の芸術とし、哲学としたのである」。

その後、推理小説に社会性や人間洞察を盛り込んで、〈物好きの嗜好品〉めいたところがあつた推理小説の読者層を大いに広げた松本清張を（一人の芭蕉）と見る向きもありました。

が、清張作品に独創的なトリックや圧倒的な推理の妙味があるとは言い難く、その作品を高く評価した晩年の乱歩が「これではない」と眩く姿が想像できません。

文学論争が過去のものになつたのは、〈一人の芭蕉〉が降臨せずとも、個々の作品の中に乱歩の理想に近いものが見出せるようになつたからです。文芸において「ここまでは文学」「こ

こから向こうは娯楽小説」という教条主義的な線引きが失効したことも理由でしょう。

乱歩が夢想したほど劇的ではありませんでしたが、これはこれで望ましい展開だったと考えます。未来に何が待っているかは判りませんから、推理小説を一変させる「一人の芭蕉」という可能性が完全に否定されたわけではないにせよ。

九十五周年を迎えた「川柳塔」に寄稿するにあたり、どうして唐突にこんな話を始めたのかというと、俳諧の連歌から分れて發展した川柳には推理小説に相通じるものがある、と感じたからです。乱歩が探偵小説について語る際に俳諧を持ち出したのはものの喩えで、両者は発生した場所も経緯もまるで違ふのですけれど。

川柳は、人間や人の世の（悲哀を包含した）滑稽味、社会風刺を題材としています。それらは、推理小説に置き換えると巧妙なトリックや名探偵の鮮やかな推理になります。それだけで楽しい。楽しさに存在意義がある。

しかし、面白いだけのものでもなくて、「そういうことって、あるなあ。作者の発想と着眼点が素晴らしい」と感心するレベルを超えて、「そういう形でしか表現できない真実」に突き刺さることがあります。娯楽性が極まって、文学性を獲得するわけです。

勝手に抱いた親近感から綴つたこの小文。雑談の種にでもなれば幸いです。

鶴彬没後八十一年の秋

佐藤 岳俊

秋風が地上を走る。来る九月十四日は鶴彬没後八十一年になる。鶴彬は「木材通信社」で詩人の秋山清、長谷川英夫等と働いていたが、昭和十二年二月二日に特高に突然検査された。

そして野方署に留置された。この時井上信子も検査されたが、信子は高齢（68歳）のため釈放されている。野方署には作家の平林たい子、橋浦時雄が居た。鶴彬は次の三句を留置所で作っている。

血を吐いた同志の跡に坐らされ
泥棒と抱き合つて寝る寒さかな
いずれ死ぬ身を壁に寄せかける

これらの句は彼の最期の句で痛々しく追ってくる。そして翌年の昭和十三年赤痢にかかつて同年九月十四日亡くなった。二十九歳の短く若い命だった。この時、岩手県盛岡市に住んでいた長兄喜多孝雄が鶴彬の遺骨を盛岡市光照寺へと運んだ

のである。喜多孝雄は生前に「鶴彬は赤痢菌を飲まされた」と語っているが、これは真実と思われる。なぜなら、鶴彬を見舞つた井上信子宅に消毒班をさし向け、外部から赤痢が入つたように工作しているからである。それまでの鶴彬の川柳を掲げよう。

マツチの棒の燃焼にも似た生命
皺に宿る淋しい影よ母よ

十五歳

暴風と海との恋を見ましたか
銭呉れと出した掌は黙つて大きい

十六歳

的を射るその矢は的と共に死す

十七歳

蟻ついに象牙の塔をくつがえし

十八歳

ロボットを殖やし全部を誅首する

十九歳

屍みなパンをくれよと手をひろげ

二十歳

つけ込んで小作の娘買ひに来る

生きるため葬儀会社のストライキ

二十一歳

三本きりしかない指先の要求書

二十五歳

種初も

喰べつくした

春の田の雪

工場へ！学校へ！
わかれて行けといふ道！

凶作を救へぬ仏を売り残してゐる

二十六歳

ふるさとは病ひと一しよに帰るとこ

二十七歳

ざん壕で読む妹を売る手紙

村々の月は夜刈りの味方なり

暁をいだいて闇にゐる蕾

吸ひに行く姉を殺した綿くずを

二十八歳

稼ぎ手を殺してならぬ千人針

銀針に刺された蝶よ散る花粉

おんどりみんな骨壺となり無精卵ばかり生むめんどり

高梁の実りへ戦車と靴の鉾

手と足をもいだ丸太にかへし

胎内の動き知るころ骨がつき

これらの川柳は鶴彬の生きた時代の世を鮮烈に刻むむばかりである。若き鶴彬

の死は、当時の権力者特高によつて倒された。だが、現在の世を見ると、昭和十

年代と同じような暗雲が流れている。現

政権が秘密法、共謀法、安保法等を強行

採決して国民の首を締め、今年は平和憲

法第九条を変えて、戦争できる国にする

という策動がある。井上剣花坊亡き後、

がら「非国民」とされた鶴彬の遺骨を抱

いて、故郷石川県河北町の喜多家の墓を

盛岡市光照寺墓地に造つたのである。

実母の瀧井寿ずも、孝雄の妻の多鶴さ

んに「盛岡の墓に入りたい」と懇願した

と言う。

鶴彬の死の前で、母として自責の熱い

心から出た言葉であつたらう。喜多家の

墓には父母、孝雄、多鶴、鶴彬（喜多

一二）龍井寿ずも眠っている。孝雄の努

力で喜多家の人々はやつと一つの墓に入

ることが出来たのだつた。

鶴彬の平和を求めた川柳は砕かれ、太

平洋戦争へと突入した。太平洋戦争は

三百万人以上の国民が戦死、アジア太平

洋諸国で二千万人も犠牲者を出した悲

慘な戦争であつた。

この戦争の反省から現在の平和憲法が生

まれたことを、私達は忘れてはならない。

鶴彬は川柳が真に文学に成るように

闘つてきた。句と多くの評論を残し、川

柳を風刺短詩としてとらえ「生きた現実

を生きた矛盾の姿で表わす」と主張した。

ところで鶴彬十八歳の時、「川柳雑誌」麻

生路郎主宰）に「短詩時代が来る」（昭和

二年、三、四月号）を書き残している。そ

の中で「…科学時代は人類の不幸時代で

ある。…」と看破している。

現代の世が正にこの姿であらう。現在、

鶴彬を研究しようとしている場が石川県

かほく市、岩手県盛岡市、大阪市等に

あるが、特に私の注目するのは木本朱夏（川

柳塔編集長）と高鶴礼子（ノエマ・ノエ

シス主宰 両氏である。二人は「鶴彬と私」

という全く同じ名の評論を書いて貴重な

メッセージを発信している。また盛岡市

の宇部功氏も多くの小学生に「手と足も

もいだ丸太にかへし」「胎内の動き知

るころ骨がつき」等を教えて平和教育を

実践している。「胎内の…」の句を教え

た時、小学生の女の子が声を出して泣い

たと言う。石川啄木を兄として敬い自分

も啄木の跡を継ごうと鶴彬は思つていた。

思えば鶴彬と同年（明治四十二年）生ま

れの作家、松本清張・太宰治も多くの本

を残して私達に貴重な示唆を与えた。私

達川柳人は川柳の歴史とそこに生き闘つ

た鶴彬を学び、現在の暗雲の中で川柳を

考えながら実践し努めていかなければな

らない。（川柳人）主宰（文中敬称略す）

（二〇一九年七月七日）

きらりんこ

野 沢 省 悟

「私に言わせれば、川柳人はその人一人の

人格の発露であり、その人一人の歴史であります。率ては社会の縮図であるとも云えます。川柳一句は個人の作ではあっても、その個人の作品の中に社会を見ることが出来るからです」(大正13・2川柳雑誌)

95年前、麻生路郎は「誤れる川柳観を排す」の中で右の一文を書いている。路郎の川柳における姿勢を如実に語った一文といえよう。この一文の「個人の作品の中に社会を見ることが出来る」という指摘は、川柳の本質に関っていると僕は思っている。

この文の書かれた81年後(平成17年)僕は深く薫陶を受けた俳人故成田千空(俳誌「萬緑」代表、蛇笏賞受賞)に川柳についてインタビューをしている。千空とは地元の文芸誌で知り合い親しく交流があった。千

空は次のように語った。

「まあ、俳句も和歌という雅びの世界の中から出てきた文芸を、完全に俗語の併用に持ってきた。俗語を生かして来た。俗語というのは庶民の世界ですから。革命したんですよ、短歌から俳句に、俳句を川柳はさらに革命したんです。ですから川柳は革命の中にある。川柳というのは庶民にだんだん降りて来る。だから誰にでも出来る文芸になって来た。誰にでも楽しめる文芸、全体の質のトータルから見るとレベルが低い。だからこそ新しく川柳をやっている人を私は尊敬しますね」

この千空の一語「俳句を川柳はさらに革命したのです」は僕に強い衝撃を与えた。川柳は俳句から何を革命したのか、僕はこの一語を深く考えるようになった。そして

それはもしかして「時事川柳」のことではないかと思いついた。エピソードがひとつある。平成18年青森県近代文学館で「青森県近代俳句のあゆみ」展があり、俳文学者・復本一郎氏がその時のシンポジウムで基調講演を行った。

復本氏はその講演の中で「俳人はテポドン(当時北朝鮮がテポドンというミサイルを日本に向けて発射し大騒ぎになっていた)も詠まなければならぬ」ということを話した。この発言に対して会場の俳人達からたくさんの方々の非難の声が上がった。この情景をみて僕は、川柳人なら、誰であれテポドンを詠むことを躊躇しないであろうと思った。多くの俳人にとって時事を詠むことに強い抵抗があることを僕は直接肌で感じた。俳句を革命した川柳は時事を詠むのだと

僕は思った。ただこの「時事」川柳は、概念としてかなり狭く、抵抗を持つ川柳人も居るかも知れない。ところでこの時事川柳について路郎が川柳雑誌No.4「時事吟に就いて」で次のように書いていたのだ。

「時事吟に対して深く研究している作家はいないのである。自分としても前の大正日日で時事吟の選をして初めて興趣を覚へ、種々研究するに到つて普通の川柳よりも或る意味に於ては川柳の真の川柳たる所は時事吟にあるのではないかとさへ思ったのである」(傍点筆者)

前に何度か読んでいた『麻生路郎読本』ではあるが、川柳雑誌創刊草々にこのように時事川柳に言及しているのには驚いた。僕はこの一文を見逃していたのである。

しかしよくよく考えてみると、古川柳の時代より「今」ある「事象」を川柳人は読んで来た。「今」は当然すぐに過去になり、過去の事象は次々に流れ去り、その風俗も出来事も未来の人々にはわからなくなってしまう。だが、時事の概念を抜け「今」の「社会」全体の時象を詠むというように解釈

するならば、路郎の一文「個人の作品の中に社会を見ることが出来る」は、川柳が俳句を革命した中から出て来た一文と言えるのではないか。

問題は、いかにして社会を見ることが出来るか、である。

思い出すことがある。僕は看護師として定年まで働いたが、40歳の頃小児科病棟に勤務したときのこと。当時の病気の子供達はけつこう元気で夕食後から就寝までの時間、宿題をする子もいたがたいがい遊び騒いでいた。そこで川柳をつくらせてみたのである。子供達は何回かすると575ですぐ句をつくれるようになり、佳句を選んで壁に張り出すと、それが励みになったのか半年ほどつづいた。

そんな中、小学一年生の男の子の彼は、難病の先天性免疫不全症候群で車イス生活で字も書けなかった。彼も川柳をつくりたいと言いつ出し、上級生の女の子が書いてくれた。その句は

こおろぎはきらりんこ

であった。当時病院の廻りは草々に満ちて

いた。当然コオロギもいたはずだ。彼はそのコオロギの背の輝きを見たのだろう。この句をつくつてまもなく病状が悪化し大学病院に転院しまもなく亡くなった。

この句が未だに僕は忘れられない、短かつた彼の人生のもしかして最初で最後の一句かも知れない。彼の川柳は、路郎の言葉を借りて言うならば、彼の人格の発露であり、彼の歴史であり、そして社会の縮図である。ただこの句から社会を見ることが出来るかと言えば、それはないだろう。だが、少なくとも彼以外のまだ生きている僕という人間に彼はこの一句を残したのである。

路郎の一文「個人の作品の中に、社会をみる事が出来る」とは、俳句を革命した川柳の最も高みにある川柳であろう。そのような川柳を求めるのも一方向ではあるが、最も大事なことは、「今」ある自分をいかに、一句にするかではないだろうか。彼の「こおろぎはきらりんこ」の「きらりんこ」はコオロギの生命の輝きと同時に彼の生命の輝きでもあったのだ。

わたし海鵜になりました

淡路放生

〔海程香川〕代表の野崎憲子さんのご好意で〔淡路島一泊吟行会〕に同行させてもらった。

当日、高松駅バスターミナルから、マイクロバスで高速に向かった。

〔大鳴門橋〕にさしかかったとき、何人か立ち上がって騒いでいたが、観潮時間を外れていて思うような渦ではなかった。

昔（十六歳のとき）。鳴門から福良港に渡ったことがある。巨大な渦が視界いっぱいに連らなって、潮と潮がぶつかりあうと海に大河のような落差が出来ることを知ったのもその時である。

福良港から電車とバスに乗りついで。狭い家並みをバスは縫うようにして、由良町の漁港に着いた。

役場の中はひっそりしていた。若い女

性が椅子から立ち上がって寄って来た。戸籍謄本を取り出して「この人の住所を知りたい」と言うと、女性は怪訝な顔で私を見た。

「母なんです」と言ったように思う。

——さつき下りたばかりのバス停に戻ってバスを待っていた。人影のまったく見あたらない白昼夢の時であった。

近くに御輿を安置するような石台と、松林の向こうに海が光っているのが見えた。風に乗って潮の香りがした。（浦島太郎が玉手箱をあげたのは、こんな風景かも知れない）とそんなことを思った。

翌日の午後、役場の若い女性がメモしにくれた大阪府豊中市×××の、文子さんが嫁いだ家の前にいた。庭に入った。

プールの横で芝刈機を使っていた女性が黒い帽子の端をあげて、こちらを見た。

「ひろっちゃん？」

夢が碎けた。

ミリガン夫人とは違うと言う事だった。

文子さんが悪い足で近づいて来る。軽小児麻痺。目まぐるしく記憶が甦る。

小学校に上がる前しばらく共に過ごしたことがある。この人は気にいらぬことがあると、足を投げ出して親につらくあたっていたと言う。そんな大人の噂話も訊いていた。

田舎の道を手をつないで歩いていた。文子さんはそのころ流行っていた（リンゴの唄）を歌っていた。小さな橋の前で立ち止まった。

「何て書いている？」さりげなく訊かれた。読めなかった。小学校に上がる前は文字を知らない子供だった。

「読まれへんかったら、連れて帰らんよ。」

ここに置いとく」

私はその場にしゃがみこんだ。見上げると夕日を浴びた文子さんの顔が、赤く大きかった。

「おおさはし」この橋の名を口にするとう胸が疼く。

後年、私の句集の「ぬるい茶は生涯ぬるし実の母」を見て「本望や」と言った。そう言う難なところが腹立たしくもあり、おかしくもあった。

少し前、知人から文子さんが生きていることを知らされて驚いた。九十五歳になる。

昭和十七年は「産めよ増やせよ」と言う時代。そうでなければ私はこの世にいなかった。産まれて一週間もたたぬうちに四十を過ぎた板前と、それより年上の芸者の家に出されることもなかったのだ。まあそれはともかく、このグリコキャラメルとのおまけのような母と子は、ずいぶん長生きの性を持っていたようだ。

マイクロバスは「西淡三原」で高速を出て「陸の港西淡」のバス停で「二三の宮」

方面から来た人たちと合流した。

「おのころ神社」〔淡路人形浄瑠璃資料館〕と廻って「若い人の広場」で弁当。その後「長泉寺」で第一回句会。

「バルシエ香りの館」の夕食後、第二回句会。

翌日の朝食後、第三回句会場の二階出入口付近で、ニューヨーク在住の月野ぼなさんとバツタリ出会った。

「昨日ありがとう」

初対面のことばがこれだった。「長泉寺」の句会するとき、私の句を特選に取ってもらったお礼である。

「ああ、いえ、後でお話しましょう」

花の咲いたような笑顔で、階段を二つ三つ下りてふり返った。

「デ・ニーロですね」

映画「タクシードライバー」の一場面をプリントした、Tシャツを指さして言った。

母上様わたし海鷗になりました

ぼなさんが抜いてくれた句である。

この句、グリコキャラメルに、そのおまけが語りかけているのである。何のわだかまりもなく「私は広いところに出ましたよ」……と。

第三回句会が終わって「バルシエ香りの館」を出発。

「鼓や」で昼食。「伊弉諾神社」〔花やしき〕と巡って「東浦インター高速バス乗り場」で「三の宮」方面に帰る人たちと別れる。運転手の後座席にいた私の前で、ぼなさんが立ち止まり、握手の手をさし出した「またお会いしましょう」そう言っただけで外に出ていった。

その何時間後、高松駅バスターミナルで香川の人たちも解散した。JRを使う野崎憲子さんともそこで別れた。いつものタフな笑顔でキャリーバッグを曳き、駅の構内の方へ行った。

牟礼に帰る電車の中で（やつと淡路島に裏を返せた）と思った。

十六歳の濃密な時間を夜明けの海だとすれば、今回は黄昏の海と言うことになるか。そして私の玉手箱の中味も、やはり煙りだった。

きやらぼくは残った

八木千代

今はもう昔。ずうーっと昔、九十五年前の真冬。不思議といえば不思議なめぐり合わせ。私の誕生日のことです。

川柳塔が創始された大正十三年の二月、その頃は「川柳雑誌」という名で、麻生路郎師の情熱によって一月は編集に鋭意、二月には「川柳雑誌」として創刊されたのです。その前身は「みおつくし」という名であったと、乗原道夫さんの書かれた本で知りました。路郎先生は川柳こそ「人間陶冶の詩である」と社会に川柳の旗を立てられたとも書かれています。

その大正十三年に山陰の米子市の一隅で私は産まれました。一月二十九日です。大阪では路郎師の陣頭指揮のもと、創刊号の編集会議の最中だったであろうと今、思うのです。

何を勘違いしたのか桜爛漫の四月初旬の予定日を無視して二ヶ月も早く、僅か

八〇〇グラムでこの世に現れたと聴かされました。「どうせ死産に違いない」「この寒さに月足らずでは生きられるはずがない」・・・と全員諦めムードの中に、雀の雛ほどの小さな小さな命が、「オギヤーオギヤー」と泣いて家中、近所中を慌てふためかせたという登場だったそうです。一本の髪も生えていなくて、父の片掌に納まってしまふほど小さいのに、見えない瞳をきよるきよるさせていたそうです。「いったい何を探しているのだろう」とご近所のお内儀さんの話題になつてい

たとか。そんな大昔の未熟児が生かされたのでした。親の恩、人の恩、天の恩、数々の大きな恩に包まれてまだ川柳さんに巡り合わないうちに、日本中を苦難の坩堝に突き落とした戦中戦後の時代へと移行して行きます。

通り過ぎて、貧しくとも親しい友人、(情報交換・味噌・醤油・野菜・子供の古着の譲り合いなど) 共同の知恵を持ち寄り生き永らえた四人は、そのころ編み物の内職をしていました。場所はそれぞれの家庭を回り持ちでした。

或るとき私が、「手を動かしながら、戦争のときの話や世間話をするより、何か勉強をしない?」と言いつつ「新聞柳壇知ってる?」「ハガキで済むし、月謝も要らないし、編み物しながらお互いに批評し合えるし」と、「し」「し」「し」の連続が忽ち議決。石垣花子、佐伯越子、林瑞枝、八木千代の小グループです。そしてすぐ実行。

三カ月が経ったころ、うみなり川柳会総会、日本海新聞後援の川柳大会の案内がそれぞれに送られて来ました。(これが私の運命の葉書になります)。「でも家がら許して貰えるかしら」「いっしょに汽

車に乗るなんて初めてよ」

四人連合で各家庭を回り、手を突いてひたすらに出席できるよう懇願。「アルコールは飲むな」「夕方五時までには帰れ」「留守の昼をきっちり支度して、手を抜いてはならぬ」e t c . . . やつとやつとの許可でした。

ところが、あろうことか、その大会で総合優勝をした私。大きなカップが両手に渡され落としかけるほど緊張。硬直した足は動かない。小西雄々さんがカップ、賞状を持ってくださったような。とにかく帰り着きました。

そして三日、四日経った内職タイム。四人とも入賞したのです。「川柳って、真剣になれそう」とまたもや全員一致。

「きゃらばく」はこの時、生まれました。みんな若かったのです。すべて手作り、ガリ版を切ったの会報誌でした。

やがて女性ばかりのグループ「きゃらばく」は会員が四十五名になりました。その後、会則を一部変更。男性の参加を認めます。但し会員の家族、または八十歳以上の男性なら・・・との条件付きで。何十年経っても姑、主人、世間など、封建制に縛られた地方の小都市なんです。

「きゃらばく忘年句会」を毎年十二月に催しました。初めて川村好郎さん、高杉鬼遊さん、宮西弥生さんを米子駅のプラトフォームにお出迎えしてから、毎年だけの川柳作家をお迎えしよう。

本社のある関西はもとより、島根、鳥取、岡山の結社を超えてたくさんの方々にも全面的な応援を頂いて「きゃらばく忘年句会」は、参加者も百二十名を割ったことありませんでした。本社からは西尾葉・橋高薫風・若き日の小島蘭幸・泉比呂史・小松原爽介・奥山晴生・天根夢草・森中恵美子・前田美巳代・前川千津子・相元せつ・寺尾俊平・海地大破・田中好啓・石部明・石森騎久夫・斉藤大雄、数えきれません。鳥取だけでも小林由多香・土橋登・江原とみお・新家完司・門脇かずお。

中原諷人、汲香、みさ子一家は、鹿野の郷土菓子をとくさんお土産にしての参加でした。きゃらばく忘年句会は選者が良くて作品が良くて、雰囲気良くて、生き生きと思いい出の中で輝いてくれます。

懇親宴恒例は恵美子さんの新舞踊「矢切りの渡し」、宮園射月芳さんの「男はつらいよ」、森山盛桜さんの東海林太郎風の「国境の町」。きゃらばく会員の「金色夜

叉」「お富さん」「花笠音頭」「港町十三番地」などの踊りやお芝居。フィナーレの「高校三年生」は葉先生はじめ、皆さん学生帽を被って、ステージからはみ出るほどの熱演です。

そして全員手を繋いで「星影のワルツ」の大合唱でした。

翌日は満員のバス一台で観光。お昼からは二次会です。先生方もリラククスさされて名残の宴会。最後に帰宅時間バラバラの皆さんを駅まで、バス乗り場までお見送りしました。

誰もが仲良しのきゃらばく忘年句会は四十数年、盛大に続けることができました。歳月は容赦なく過ぎます。おばあさんばかりになった「きゃらばく」は政岡日枝子さんの仲立ちで、近くの住吉句会の方々と交流を決めました。お見合いめいた句会、これが大成功。若々しくて有能な男性陣と何とも穏やかな女性数名。現在毎月第三水曜日、会場は五十年間変わらぬ義方公民館で句会。竹村紀の治さんをお会長として根も太り若葉も鮮やかに、和氣諷諷と塔の岩の一つとなっています。「きゃらばく」は残りました。

川柳塔の川柳讚歌 (176)

黄昏篇

木津川計

死亡欄見ると私も適齡期

三浦 強 一

有名人の享年を見る。藤本義一79、蜷川幸雄80、愛川欣也81、大橋巨泉82、永六輔83、小沢昭一84、野坂昭如85。大体こころ辺に集中し、塊まって逝く。すると私は83、將に適齡期の真ん中に佇んでいる。嫁入りならときめきもあろうが、死を控えてはおののきばかりで、どうか苦しみませんように麻酔を大量に使って昏睡させてください、と最期に立ち会う医師宛の依頼状を家人に託してある。こうしないとご同輩、死なせてくれませんよ。

さあ傘寿上半身はまだ老いず

北野 哲 男

ところが達者な人はいるもので死亡適齡期に入って、「さあ」と張り切る老人がいるから「あなたの上半身は若い！」と囁す、油断も隙もない商売人が出てくる。この国アルサロの第一号ユメノクニの名物支配人磯田敏夫の名コピーだった。この広告に煽られる剽軽

者が「酒は一合、女は二号」「菊人形より生人形、菊の花よりアルサロの花」に浮かれ、紅灯の巷に遊んだ挙句の果ての傘寿で「さあ」と腰を上げるものだから長寿社会は騒然です。

八十になったら恋をしてみよう

橘 高 薫 風

「だいたいやねえ」と竹村健一ばりに言う
と薫風さんがいけなかつた。傘寿から恋をす
るというから哲男さんもその気になつた。「当
時の私は、四人の恋人がいて四軒の家を持つ
ていた。順々にまわつて歩く生活を数年つづ
け、働いた収入は四人の恋人につき込んだ」
のは川口松太郎だつた。それくらい財力が
あれば「女は二号」どころか三号も四号も可
能だつた。薫風さんは資産家だつたが、そこ
までとはとも及ばず、夢想するしかなかつた。

縮んでる痩せてる聖者らしくなる

辻 内 次 根

老境の薫風さんは女性にモテて悦んでい

た。老いて縮み、痩せて聖者らしくなると女性
の信奉者はますますふえた。山本周五郎も
同じで夫人によれば、「すっかり痩せてしま
い、ひと頃は二十貫の体が腰のまわりも可哀
そうみたいに肉がおち、帯をしめてもずり落
ちてしまふ」状態で絶筆の連載「おごそかな
渴き」を朝日に書いた。周五郎は「現代の聖
者を書くつもり」だつたという。正味聖者に
なり切つていた。薫風さんも晩年は聖者の趣
だつた。

年とつてきた強情へみな黙り

後 藤 梅 志

認知症への対し方が周知されてきた。逆ら
わないことである。徘徊は、行き先はあるも
のの見失つて行き来しているのだ。叱つても
いけない。彼は正気で振舞つている。だから、
言いなりになつてやるのが本人を落ち着かせ
る。するとこの頃、誰も私に反対する人がい
なくなつたことに気付く。どうやらみなさん
に見捨てられたのではないか。「年寄りと言
うとんのやがな。好きなように言わしたつた
らええやないか」でみんな黙りこんでいた。

何時からのことにしようかさて余生

小 出 智 子

「あすは死ぬだろうなあ、計算ちこつた」
と呟いて。現代のアルキメデス、岡潔は逝つ
た。76歳、心不全だつた。数学のいくつもの

公式を生み出したのは汽車の中や町なかを歩いているときだったという。そんな岡潔をもつてしても余生の計りようはなかった。ということは何時にしてもよく、好き勝手に決めればよいことを知る。すると智子さん、80からもよし、90からでも100からでも、となると先延ばしするほど余生は遠く今生は長いのです。

みんな死ぬそのことだけをなぐさめに

新家 完 司

「死ハ一向恐クナイ、ダガ、予ハ今コノ瞬間ニ死ニ直面シテイルノダト思ウト、——死ガコノ利那ニ予ノ眼前ニ迫ッテイルノダト思ウト、——ソウ思ウソノコトガ怖イ」と谷崎潤一郎は『瘋癲老人日記』に記し、腎不全から心不全を併発して逝った。79歳だった。迫り来る死の影に大谷崎は怯えた。わずかな慰めは、遅かれ早かれ「みんな死ぬ」と思えたことだったろう。瘋癲老人に近い私もそう思えば、では一足お先に灰さようなら、の心境になった。

私抜けます一億総活躍

竹村 紀の治

谷崎潤一郎は終生ペンを握り続けた。自らの願いや欲望のままを作品にしたから題材に困ることはなかった、とは言え、苦しみも多かったろう。高村光太郎も同じで「老人になっ

て死でやっど解放され、これで楽になつていくという感じがする。まったく人間の生涯といふものは苦しみの連続だ」のことは吐いて73歳で没した。人間誰しも苦しみの連続なのに「一億総活躍」をなお促されたら、紀の治さん、私も「抜けます」と宣言します。

終電車働き過ぎと遊び過ぎ

升成 好

「夜の電車にのりこんできた工場労働者／けさ 働く意志のつまつてゐた／その心の弁当節はいまカラカラはずみ／帰りゆく夜の家庭を思ふ／幼な児らすでに寝入りたるや／鼻に汗にじませ／つぶらな瞳はいま席を求める／観劇帰りの人よ／立つて／席をゆづれ／明日 きみらがまだ床にあるとき／早くも冷たい朝風をきって仕事へいそぐ人に／立つて／席をゆづれ」。杉山平一の詩「帰途」です。観劇は遊びではないが、働いている人もいる。味噌汁とご飯わたしも寅さんも

高瀬 霜石

寅さんは都会に落ち着けなかつた。田舎に性が合い、祭をよく訪ねた。地方都市を歩いても旅籠とおぼしき木賃宿にいつも泊まり、ホテルと無縁だった。だからナイフもフォークも持ったことがなく、箸を使い、味噌汁とご飯が決まりの原日本人だった。が、霜石さんは寅さんと違って、いかす男前でスーツ姿。

その上、自動車部品会社の社長にして寅さん党。霜石さんがスリーブとパンになつたら寅さん党から除名される運命なのです。

雑兵のひとり一人に母がいる

高杉 鬼遊

「おかあさんの匂いはどんな匂い／朝はかまどのけむりの匂い／昼はおべんのおかずの匂い／晩にはかすかなおふろの匂い」とベストセラーになった詩集「おかあさん」でサトウハチローはおかあさんの匂いを嗅ぎわけた。雑兵だった兵隊もその匂いを偲びつづけ、艶れながら多くは「天皇陛下万歳」より「お母さん」と呼んで息絶えた。母に抱きしめられ、懐かしい匂いに包まれた雑兵の今際の救済だった。繰り返してはならぬ歴史だ。しがみつくほどのこの世でなかりけり

麻生 路郎

一将功成り、万骨は枯れる雑兵の哀れだった。そんな境遇に誰がしがみつこうか。が、路郎は多くの俊秀を育て今に川柳塔を輝やかす大いなる一将だった。川柳は「人格陶冶の詩」と定め、同人には「一句を残せ」と叱咤し、行く末を構わず自らは火の玉になって川柳に燃えた。水府と共に火をつけた二点の炎が、いま燎原に広がっている。もはやしがみつかなくとも後進に託せる。すると路郎の思い切りのよさであった。一切の未練を捨てて、「雲の峯という手もありさらばさらばです」

前田 尋(まえだひろし)

兵庫県生まれ。きり絵画家・加藤義明氏に師事。日本きり絵協会創設に参画。国際交流基金アメリカ・カナダきり絵展参加。『きり絵散歩』『きり絵散歩Ⅱ』日本きり絵協会常任委員。具現会会員。

平本 霧石人(ひらもとむせきにん)

広島県生まれ。パッケージデザイナー・画家・イラストレーター・カリグラフィアー。(有)平本勝彦デザイナー主宰・元日本生協連デザイナーコンサルタント・絵本『けなげ組』(サンマーク出版)。

出久根 達郎(でくねたつろう)

茨城県生まれ。作家。1992年『本のお口よごしです』で講談社エッセイ賞。1993年『佃島ふたり書房』で直木賞。2015年『短篇集半分コ』で芸術選奨文部科学大臣賞。日本文藝家協会理事長。

坪内 稔典(つぼうちねんでん)

愛媛県生まれ。俳句グループ「船団の会」代表。2010年『モーロク俳句ますます盛ん』で桑原武夫学芸賞受賞。『俳人漱石』『季語集』他。京都教育大学・佛教大学名誉教授。伊丹柿衛文庫理事長。

有栖川 有栖(ありすがわありす)

大阪府生まれ。推理作家。『マレー鉄道の謎』で第56

執筆者プロフィール

回日本推理作家協会賞。『女王国の城』で第8回本格ミステリ大賞。『双頭の悪魔』『乱鴉の島』『鍵の掛かった男』『幻坂』など本格ミステリの旗手。

佐藤 岳俊(さとうがくしゅん)

岩手県生まれ。川柳「川柳人」主宰。

評論集『現代川柳の原風景』『現代川柳の荒野』

『句集 佐藤岳俊』。

野 沢 省悟(のざわしょうご)

青森県生まれ。川柳「触光」主宰。

評論集『極北の天』『富二という壁』

句集『嘘は雪』句文集『川柳誘遊』他。

淡路 放生(あわじほうせい)

香川県生まれ。

『淡路放生川柳集』『真魚』俳句集

八木 千代(やぎちよ)

鳥取県生まれ。川柳塔参与。

句集『椿守』『椿守抄』

木津 川 計(きづがわけい)

高知県生まれ。元『上方芸能』編集・発行人。NHK

「ラジオエッセイ」レギュラー。1998年、第46回「菊

池寛賞」受賞。「人生としての川柳」他著書多数。

立命館大学名誉教授。上方芸能評論家。

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年發刊

城北菖蒲園

なかんずく紫式部むらさきに

眼鏡拭きほとぼりはもうさめたるか

父の日か秋にはおじいちゃんになる

亡母三周忌

亡母の闇黒い塚から酒を酌ぐ

郡上八幡

宗祇の水柳一葉と掬うなり

初孫誕生

初孫と握手する一本の指で

生き方を青から赤に替えるなり

僕の富レモン一個を棺に入れよ

一番に孫の箸紙書いた新春

若者の髭にうたれたためしなし

面の裏菩薩も夜叉もなかりけり

世の移り変りさびしい雀ずし

吊皮に横溝正史片手読み

花よりも紅葉に似合う紺のれん

のれん分け電話一番違いな

吉野大夫高尾大夫の菊の首

英雄は花という字にこがれ死ぬ

校長が校長らしい松の内

長年の欲一本の皺となる

三代に仕えた安楽椅子という

日だまりに似て灯だまりが秋にあり

路郎忌のこれも魂金魚の朱

路郎忌の暑さと蔑乃忌の寒さ

函館行 三句

恋人の名より親しい摩周丸

イカソーメン妻子を思うことなけれ

睡蓮の炸裂もよし五稜廓

サーカスに似て来た五輪大一座

夏の風邪瀬古とマラソン走るなり

本棚に隙間のあるは油断かな

大山も影大山も盆に入り

剃髪をして煩惱のひとつかみ

中国吟行 十句

死より先ず生おそろしき玉仏寺

英語 de Senryu ⑨③

麻生路郎句集 『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

食べさしを食うほど 男惚れている

*the man is devoted to her
enough to attempt
eating her leftovers*

人前はあんな女と云つておき

*deeply devoted to her in secret
he calls her "that girl"
among his friends*

be devoted to 熱愛する *enough to* ~するに十分 *attempt* 試みる *leftover(s)* 残り物
deeply 深く *in secret* 密かに *call* 言う 呼ぶ *among* 間では

〜リバーウィローのため息〜世界の川柳・俳句③③

Carmen Sterba句集: *An Amazement of Deer*

Carmen は「あなたとオックスフォード大学の小高い丘に座って、熱気球が通りぎるのを見ていたことを今も思い出します」と、懐かしい記憶をこの本の裏表紙に記しています。Carmen は彼女が東京で教職についていた1990年代後半から俳句を通して交流を深めた友人で、今は米国ワシントン州に家族と暮らしています。1996年に父方の祖父母の出身地であるチェコを旅し、その地で初めて親しく鹿との交流を経験します。そして20年後、彼女は結婚相手のLyle Russellからミュール鹿(驃馬)の家族を受け継ぎます。2017年にCascade Deer Pressより出版されたこの句集には、写真付きの13句の鹿の俳句、レンゲ(アメリカ連句)、そして20人の作者による20の鹿の俳句が収録されていて、まさに「鹿句集」といった趣です。拙訳を付けました。

eye-to eye/ a curious deer overcomes/ shyness

(目を合わせ羞恥心に打ち勝つ好奇心いっぱい(の鹿))

love of jumping--/ barbwire wounds/ on the legs of deer

(ジャンプ好き 鹿の脚に有刺鉄線の傷)

what can I say/ the doe is no longer/ a stranger

(なんと言ったらいのか 雌鹿はもはやお客ではない)

first fawn/ this mama shares/ sweet grass

(初めての小鹿 新米ママが若草を分け合っている)



蟻と蜘蛛

大きな生き物の代表は象と鯨ですが、小さな生き物と言えば蟻でしょう。蟻には産卵を担う女王蟻と食料調達や育児を担う働き蟻がいますが、私たちが目にするのは働き蟻です。

労働歌蟻が歌えば凄かろう

橘高 薫風

働けとハツバをかける蟻の列

夏目 一粋

生き甲斐は何かと蟻に聞いてみる

富田 保子

立ち止まる蟻にも迷いあるらしい

福士 慕情

蟻の列うろろうろしてるのが私

内山サカ枝

蟻のイメージは「働き者」ですが、注意深く観察しますと、行列の中にはうろろうろして怠けているようなのがいます。

働き蟻には「猛烈な蟻」と「普通の蟻」と「怠け蟻」がいて、「働きの法則」では、その比率が2.6.6.2になっています。理由は、全員が猛烈に働くとは疲れてしまうのが同じタ イミングになり仕事が滞ってしまうので、怠け蟻は猛烈蟻が休んだときの予備戦力の役割のようです。

風紋を辿れば蟻の塚ひとつ

あべ 和香

キリギリスの死骸で蟻の晩餐

甲斐 博美

打ち水に溺れる蟻もあるので

古久保和子

蟻を踏む話の続き聞きながら

原井 典子

蟻の目の高さで蟻からも学ぶ

杉山 太郎

蟻の身になつたら蟻が分かりだす

牧野 芳光

体が小さくても私たちと同じ「一つのイノチ」です。この

世に生まれ出たのには何か意味があるはずで、大切な生態系の一端を担っているに違いありません。蟻の目の高さで、蟻の身になって考えると凄いな句が生まれるかもしれませぬ。

設計図なしに蜘蛛の巣出来あがり

高尾くみ子

幾何学の達人らしい蜘蛛の網

津村志華子

虫が飛ぶ高さに蜘蛛は網を張る

上山ヒサヲ

蜘蛛の巣が生きる権利を主張する

明里かつみ

蜘蛛の巣の蝶助けたら蜘蛛こまる

小西 明

うっかりと蜘蛛の糸切つて繕えず

西原珠真瑛

幾何学模様が美しい蜘蛛の巣ですが、基本になる設計図もなく指導してくれる親方もおらず独力で作り上げています。

蜘蛛の巣の放射線状に延びている縦糸には粘着性がなく、円状に張り巡らせた横糸にだけ強い粘着力があるとのこと。完成までには何日もかかるように見えますが、小さいのでは

数十分。大きいのも二時間ほどとはビックリ！

蜘蛛の糸怨みのように絡みつく

福西 茶子

情けない表札蜘蛛に巣を張られ

永田ふき子

出来たての蜘蛛の巣だけど取り拂う

内田 喜重

夜の蜘蛛に重なる顔が一つある

玉利三重子

嫌われる理由蜘蛛には判らない

小川しんじ

真実をじつと見ていた女郎蜘蛛

森 廣子

巧妙に作られた蜘蛛の巣も私たちに迷惑至極。また、姿が気味悪いので蜘蛛を嫌う人も多いようですが、蜘蛛にしたから「なぜ嫌われているのか分からない」でしょう。しかし、「蓼食う虫も好き好き」で、「静かなのが好き」と、クランチュラという大きな蜘蛛をベットにしている人もいます。

誹風柳多留一一二篇研究 75

小栗清吾・細井龍夫

伊吹和男・山田昭夫

石川道子

清博美

639 生きていやすりや廿五と七くわい忌

小栗「もし生きていさえすれば、今年は二十五歳になつてゐる」と、七回忌に言つてゐるといふ意。七回忌は、亡くなつた年も含めて七年目（亡くなつた年に六を足した年）に行つたものであるから、この仏様は十九歳の厄年に亡くなつた娘さんというお馴染みのパターン句ということにならう。

二十一と三年の法事する

一七三

細井 贊。「死んだ子の年を数える」と言うけれど。

清 贊。

640 坂東の十三ばんを四ツ手ぬげ

細井 吉原へ急ぐ四ツ手駕籠が坂東順礼第十三番札所の金竜山伝法心院、平たく言うところだが、手許にある昭和五十三年初版発行の『金竜産浅草寺』なる同寺の冊子には概要の末尾に小さく「坂東札所第十三番」とあるが、何の説明も無く、「昭和撰撰江戸札所一番」と併記して自らを勝手に一番札所に格上げ(?)している。世の流れか。

十三の中を四ツ手ハぬけるなり 安七智七
四ツ手かご札所をさげくかけ 一四三
十三の真中頃で四ツ手きれ 一七二

清 贊。

641 かたきをばかりころりつつけぬらい

細井 仇討の敵探しのために、深編笠をかぶり、絹布の小袖に丸ぐけの帯をしめ、首に袈裟をかけ、刀を帯し、尺八を吹いて、という虚無僧姿になつて——江戸では黒漆の下駄を履いていたから、カランコロンと音がして、関りのある者にとつては不気味に聞こえただらう。

『おもしろ大江戸生活百科』の北村鮭彦氏によると、仇討は親族のうち、目上の者（父、兄など）を無法に殺された場合に限つて、子供なり、弟なりに許可されたとか。

こも僧の親しゆら道へ落て居る 五二八
かたきもちこもそうに世をせばめられ

天五智九

居る所を見たのが竹のふき訥

四二八

清 贊。

642 いゝまけた方からぶつてかゝるなり

細井 遊所からの朝帰りの情景だらう。女房に言いまくられて返す言葉も無いので、つい手が出て暴力沙汰になつてしまふ。

朝かへり廻らぬ舌でいひまける 八四〇
一言も無イからていしゆくらわせる

りに勝て女房あへなくくらハされ 一四一七

安六智一

伊吹 賛。男同士の喧嘩でも成り立つ。

山田 賛。でも男同士では、句の面白味が無くなる。

清 賛。

643 はんだいに舂とおやとがニツ三ツ

細井 「盤台」は浅くて大きい楕円形のたらい。盤台に量り売り用の梶と親(芋)が二つ三つ売れ残っている、というのだが、辞書にも「江戸事情」第一巻生活編にも魚介類を商う場面にしか盤台は見られない。さりとて、八百屋は盤台を絶対に使わない、という保証も無い。店頭ではなく、台所での情景としてとらえようとすると、梶の存在が不自然になる。困りました。

盤台にいきてひれふる石かれぬ 九一二
盤台にそりを打ツてるなまりぶし

一 一一三九
いも見ざる内にかしらははかりこみ

伊吹 賛。八百屋でも使ったのでしうね。

山田 「芋売り」との雨譚註あり。「雨譚註万句合研究」で山路閑古先生は、「浅草の西の市の風景です。芋売りといつても、一日だけ出る店故、近寄つて見ると盤台に梶に入れた

芋と、親芋が二つ三つ転がっているだけだ、というのです」と解されています。

清 取り敢えずは、雨譚註に従つておくことにする。

644 かゞみとぎにかさぬやうにおさへつて

細井 現代のガラス製とは異なり、当時の鏡は白銅か青銅製であり、古くなると曇つてくるので、時折磨いて貰う必要があった。それを職業としている「鏡研ぎ」の多くは加賀の国から江戸に出て来る老人で、朴の木炭で磨き、仕上げに水銀に酢を混ぜたものを塗った。その磨く時の様子を詠んだもの。

りん国のふんどしをする鏡とぎ 八13
鏡とぎ米さし三本持て居る 三五二二
かた炭を大せつにするかゞみとぎ 七37
か、ミときいつちしまひにどくをもり

小栗 賛。「逃がさぬやうに」がいい。
安五義3

清 同。礎稿、「にかさぬやうに」を説明してもらいたかった。川柳の面白味がここにあらう。

645 気のどくさかいつ湯づけくふとむせ

細井 安永元年のころ、浅草並木町の左側に「海道茶漬」と書いた行灯を出している店があったとか。お茶漬はかつこんで食べるので時には気管支を刺戟して咽せることがある。それを見て「なにもそんなに急いで食べなくても」と笑っている。

大笑ひ海道茶づけくふとむせ 百一12
茶漬屋の姫かつこんで来た女 一一二40

小栗 賛。「海道茶漬」については、「川柳雑俳用語考」(頼原退蔵)に詳しい解説があり、また「筥一」の句につき、「輪講」で「何故むせるか」と先人の議論がされている。諸先人も格別の決め手がなく、岡田先生も「熱い茶漬をあわてて食べたから……:というより解されません」としておられる。この辺きちんとわからないと句の面白さがわからない筈だが、岡田先生が「海道茶漬は、江戸の飯屋のハシリで……:」としておられるので、熱い茶漬を喰つてむせているのを「新しい風俗発見」と句にしたところが手柄ということではなからうか。

清 小栗説、なるほど。これは資料のないままの発言だが、茶漬の具として何かむせるようなものが添えられていたのではなからうか。例えば、山葵の粉・唐辛子の粉など、茶漬の味を引き立たせるようなものが……。

愛染帖

新家 完司選

(投句283名)

大阪市 岩崎 玲子
私より年上からがおばあさん

(評) そうすると、90歳になってもまだお婆さんではなく91歳以上がお婆さんということ。まことに明解且つ元氣の出る考え方である。

池田市 奥園 敏昭
僕の良妻より子より友が知る

(評) ずっと一緒だと「だらしなない」「汚い」等、アラばかりが目立つ。友人から好評なのは「ええ恰好」している所でもあるが…。

芦屋市 竹山千賀子
不便やな付箋貼れない電子辞書

(評) 紙の辞書は目的の項目を開いたとき、他の記事から思わぬ知識を得ることがある。将来は紙の辞書がステータスになるかも。

米子 吉田 陽子
踏破した山をこれから見て暮らす

(評) 踏破してきた山が多いほど思い出も豊かであり振り返っても楽しい。そのように思えば、まだまだ一つぐらいいは越せそうだな。

川西市 山口 不動
老夫婦同性婚のようなもの

(評) 同性婚ほどの生々しさはなく、性の意識も薄れて「男でも女でもなくなつた仙人のような二人」。これからが人生の醍醐味だ。

和歌山市 まつもととこ
ドモホルンリンクル呪文だったのね

(評) ドモはラテン語で「抑制」。ホルンはドイツ語で「角質」。リンクルは英語で「シワ」。しつこい宣伝に負けて買ってしまったが…。

尼崎市 山田 耕治
手の甲を抓めば皺がもどらない

(評) 皺が戻らないのは皮膚の弾力が失せてきた所為。老化現象の一つだが、それを悲観せず「面白がる」と心の老化防止になる。

鳥取市 福西 茶子
息止める時間十秒切りました

(評) これも老化現象の一つ。少しずつ息を止めておれる時間が短くなつてくるが、心配しなくても、最終的にはずっと止められる。

神戸市 細川 花門
地獄までつけて行きます万歩計

(評) 地獄の門までテクテク歩いて、閻魔さまに「ここまで歩いてきました!」と胸を張れば「情状酌量にて無罪」となるかも。

宝塚市 丸山 孔一
死んでからようやく惜しい人となり

(評) 弔辞で必ず述べられる「惜しい人を…」

と云う言葉。死んでからの「お世辞」など要らない。元氣なうちにもっと褒めて欲しい。

河内長野市 木見谷孝代
句集「もくせい」元氣をもらおうおめでとぅ
枚方市 谷 英也

川柳で脳みそ磨き白寿まで
沖繩県 あらさくら
夜も更けて目薬さして課題読む
今治市 永井 松柏

締切が迫ればハードルを下げる
加西市 山端なつみ
すぐメモをとれば名句の可能性
西宮市 高橋千賀子

七夕に五七五で書く願ひ
堺市 遠山 唯教

スタンスが五七五になつていた
鳥取市 倉益 一瑤

川柳家にノーベル賞はないものか
河内長野市 原熊知津子

熟慮の句どこかで聴いた類似品
岡山県 田中 恵

柳友に逢う日がとても待ち遠い
倉吉市 岡崎美知江

文明の機器はないけど筆がある
弘前市 稲見 則彦

見栄を張り万葉集を棚に置く
高槻市 島田千鶴子

この字なに確か私が書いた文字

横浜市 加藤 佳子
すんなりと令和の風に入れ替わる

紀の川市 山東日出男
門灯に間借り決め込む雨蛙

小野市 田中 辰夫
空梅雨に西空見てる雨蛙

貝塚市 石田ひろ子
こぬか雨袈裟切りにして飛ぶ燕

下松市 有海 静枝
刺す虫の生き抜く必死との戦

熊本市 杉野 羅天
賽銭がホントになったスマホベイ

貝塚市 吉道あかね
人の香り如何に残すかA I化

弘前市 高瀬 霜石
ガリガリと昔は噛めた枇杷の種

米子市 池田 美穂
返り血を浴びなきや男にはなれぬ

トム・ソーヤよりもハックルベリー・フィン
二千万あっても働くのが好き

広島市 岸本 清
まだいけるウナギ一匹丸ことも

友の名を想い出せないまま眠る
僕の歌皆が笑いを噛み殺す

鳥取県 斉尾くにこ
空豆にテントウムシのおまけ付き

バラソルで遮る視線紫外線

唐津市 仁部 四郎
經典を開けばそこにある鏡

大阪府 柄尾 奏子
楽しんでる勝ち孤独とは自由

倉吉市 牧野 芳光
庭の松伐ります先が見えたから

佐賀県 真島久美子
綿棒を突っ込んで消すいらんこと

大阪府 江島谷勝弘
車にも人にも注意おこたらず

寝屋川市 川本 信子
フェイクして密かに被るデスマスク

三田市 堀 正和
三回忌終えてそろそろ薄化粧

三田市 堀 正和
マルクスはまだ本箱に眠ってた

重量は僕と同じだ七億円
失恋の予防に恋は避けている

榎原市 居谷真理子
ゴミ箱に徹して愚痴を聞いている

松江市 石橋 芳山
ピブラート強めに変化待っている

河内長野市 森田 旅人
楽しんでますかとお隣にエール

ヴェネツィアの露地にイワシを焼く香り
惚けたのか喜寿 後悔が見あたらぬ

豊中市 木藤こみつ
ハマムに行こう巴里でたまった垢落とし

奈良市 大久保眞澄
自己診断では程よいポケ加減

もうちょっと待ったら乗れた玉の輿
外国人に席譲られたことがない

堺市 村上 玄也
じいちゃんの六甲おろし小節入り

大阪府 平井美智子
地下街でうっかり見失う此の世

安来市 原 徳利
ファスナーを締めたかどうか確かめる

黒石市 北山まみどり
ただいまを聞くまで眠らないハンガー

長野県 丸山 健三
遠火花またもアクセル踏み込んだ

箕岡市 藤井 智史
婚活は続き十周年記念

箕面市 出口セツ子
稼ぐのは下手だが使うのは上手

豊中市 藤井 則彦
今はまだ日傘男子も照れたまま

郷田 みや
ゴキブリはためらっていると居なくなる

仙台市 月波 与生
制裁もいじめもしない人といふ

門真市 坂本 星雨
雨の日はルンバと会話して過ごす

堺市 坂上 淳司
お試しの生前葬で棺の中

大阪府 平賀 国和
ばあちゃんの赤ひげさんは若い医者

堺市 矢倉 五月
死ぬ事以外カスリ傷やと檄がとぶ

大阪府 高杉 力
そこそこの腕で麻雀呼び出され

八尾市 宮崎シマ子
策略はないが骨身は惜しまない

松江市 中筋 弘充
アナログの体温計はフィットする

三田市 上田ひとみ
今日もまたこんなもんやと言いきかす

大阪府 坂 裕之
明日から遣るぞと何度言つたかな

米子市 後藤美恵子
日めくりに格言貰いトイレ出る

益田市 篠原紋次郎
食べるほど薬を飲んで生きてます

奈良県 渡辺 富子
赤い舌出して若さが逃げていく

高槻市 片山かずお
二日続けばよく降る雨と嫌われる

河内長野市 山岡富美子
口だけはいままも健康優良児

岡山市 丹下 凱夫
ひまつぶしと間違えられるひつまふし

香芝市 大内 朝子
生き甲斐の自慢話を毎度聞く

藤井寺市 鈴木いさお
どこが違うのか高倉健と俺

大洲市 花岡 順子
背伸びした足がふらふらして困る

三田市 福田 好文
長寿国親より先に要介護

海南市 小谷 小雪
卵焼くふんわりまでの待ち時間

大阪府 藤田 武人
鍋奉行まず練習の一人鍋

大阪府 津守 柳伸
神助と同じ轍踏む芸能人

米子市 竹村紀の治
老人と弱者に媚びる選挙カー

橿原市 安土 理恵
産休育休なかったころの子だくさん

寝屋川市 岡本 勲
もめるほどないが遺言だけは書く

西宮市 緒方美津子
もう一度夫をうつとりさせたいな

堺市 内藤 憲彦
ブレーキが分かるあいだはベントス乗る

藤井寺市 太田扶美代
母の日や何点だろう母として

豊中市 水野 黒兎
粹な雨そんな降り方減るばかり

鳥取市 岸本 孝子
ライバルを天狗にさせて風を読む

大阪府 宇都満知子
ライオンの甘噛みはもう命とり

米子市 生田 和之
死ぬまでにスマホ駆使する夢がある

奈良市 山本 昌代
段取りの悪さウロチョロしてばかり

倉吉市 大羽 雄大
大欠伸余韻に遊ぶビブラート

大阪府 高木 道子
五位鷲はみじろぎもせず古武士めく

鳥取市 岸本 宏章
こっそりと尿もれパンツ穿いてみる

江南市 脇田 雅美
訳ありの野菜のほうが味がある

大阪府 大治 重信
大阪の鱧食べている雨静か

寝屋川市 平松かずみ
粉もんで二十の国をおもてなし

唐津市 坂本 蜂朗
賽銭箱お札入れても頼りない

岡山県 山縣のぶ子
泣き顔に友が一発喝入れる

三田市 谷口 修平
口角の泡が妥協を許さない

大阪府 谷口 義
私のこと見てはったような広告

伊丹市 延寿庵野鶴
ブラゴミが地球儀喰べて笑ってる

その嘶聞くにはちよつと酒が要る
尼崎市 永田 紀恵

ストレスを分け合う友と飲むお酒
大阪市 若本 安代

百葉の長が吹かせているラッパ
三田市 北野 哲男

会社勤めしなければ下戸だったはず
大阪市 小野 雅美

亡兄を肴に呑み過ぎた忌明け
宇都市 平田 実男

今宵下弦の月が誘うひとり酒
富士見市 中島 通則

いくらでも飲めと生保の額増やす
尼崎市 清水久美子

死なぬようお酒の量は減しました
大阪市 榎本日の出

赤鬼青鬼口をぼかんと終電車
堺市 澤井 敏治

へべれけに酔っても不思議家の床
弘前市 福士 慕情

自家製の旨い梅酒で二日酔い
豊橋市 小松くみ子

二日酔い自分ファースト休みます
大阪市 田中ゆみ子

前もつて避難袋に入れる酒
三原市 笹重 耕三

缶ビール届く中元もうすぐだ
米子市 成田 雨奇

カランコロン焼酎ロック夏よ來い
池田市 倉本 一弥

屋台村やもめ仲間の寄り所
三田市 丹羽 美恵

はふはふとタコヤキを食う半夏生
丹波篠山市 長谷川善輔

大腸に疑いあつて下剤攻め
四条畷市 吉岡 修

手が触れてドキッとわたしまだ青い
香芝市 山下 純子

ハモ梅肉修業時代を思い出す
羽曳野市 中川ひろ介

横丁の銭湯守る地域力
大阪市 古今堂蕉子

ご近所をゴーヤカーテン遮断する
鳥取市 奥田 由美

余力まだ温めている力痛
弘前市 高森 一吞

ぬるま湯を出たのは夫逝ってから
朝霞市 前田 洋子

還暦を過ぎて濃厚わが自伝
広島市 松尾 信彦

どこか痛む立つても寝ても座つても
東京都 川本真理子

足裏の生命線が伸び悩む
鳥取市 夏目 一粋

手術日をすんなり決めて怖くなる
熊本県 岩切 康子

五十階最上級の兎小屋
神戸市 奥澤洋次郎

一軒家そこに訳ありドラマあり
大阪市 内田志津子

知恵袋破れないよう整理する
倉吉市 宮田 風露

冷静に私を直視する鏡
河内長野市 梶原 弘光

ドタキャンに朝の運氣がくるいだす
沖繩県 宮 すみれ

ボケテスト受けて免許にお墨付き
宝塚市 岸田 万彩

電子音一人暮らしを癒す声
河内長野市 辻村 ヒロ

古稀ですが翼は元氣まだ飛べる
鳥取県 細田 裕花

背筋伸ばせと高い机が多すぎる
岡山市 大石 洋子

予言者の滅亡論がまた浮上
唐津市 山口 高明

無駄遣い直ぐに忘れて無駄遣い
松江市 梅瀬みちを

ああ不覚睡魔に負けたシニア塾
箕面市 広島 巴子

露天風呂写楽か羅漢首五つ
奈良県 長谷川崇明

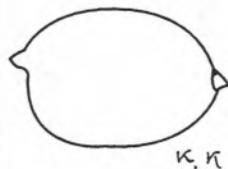
この老いといつまで勝負すればいい
倉吉市 山中 康子

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 356名)



「歩む」 水野 黒 兎 選

花の声聞こえるほどに歩を緩め
 半歩でも前に進めば開く道
 脇見よし毎時刻む一万歩
 二兎追わずそろそろ歩む自分流
 せつかちの世こそゆつくり歩む日日
 忘却の歩みモノクロアルバムに
 我が道を真つ直ぐ歩む寡婦の意地
 遅くとも歩いて行けばきつと着く
 載つてないが社史と歩んだ自負はある
 ゆつくりと歩こ静かに老いたくて
 身のほどに合った歩幅でゆく余生
 歩きましよう君が遠くを見てるから
 母子手帳それが親子の始発点
 三元号よくぞ歩いた土踏まず

羽曳野市 吉村久仁雄
 香芝市 大内 朝子
 堺市 坂上 淳司
 高槻市 富田 保子
 豊中市 藤井 則彦
 岡山市 大石 洋子
 和歌山市 三枝眞智子
 出雲市 岸 桂子
 奈良県 谷川 憲
 藤井寺市 太田扶美代
 和歌山市 土屋起世子
 尼崎市 藤田 雪菜
 豊中市 木藤こみつ
 札幌市 三浦 強一

「歩む」 鴨 谷 瑠美子 選

気がつくとも一人ぼっちで歩んでる
 遅くとも歩いて行けばきつと着く
 哲学の道で探している自分
 何気なく歩みの合った人に会う
 ときめきに足をとられて苦笑する
 歩み出す決意へ紅の一文字
 爪先の向かうところに酒がある
 食い違う意見を酒が歩み寄せ
 最後まで自分の足で粘ります
 躓いて斜めになったまま歩く
 今日と違う明日が見たくてまた歩む
 ふと歩み止めれば周りよく見える
 迷わずに歩みつづけた詩づくり
 忍耐力武器に底辺歩いでる

羽曳野市 三好 専平
 出雲市 岸 桂子
 千粟市 海老池 洋
 八尾市 山根 妙子
 三田市 北野 哲男
 香芝市 大内 朝子
 米子市 竹村紀の治
 河内長野市 藤塚 克三
 堺市 内藤 憲彦
 松山市 柳田かおる
 鳥取市 岸本 宏章
 京都市 清水 英旺
 神戸市 山根 弘華
 堺市 村上 玄也

明るい色を着て黄昏を歩む
 父や兄の足跡もない道を往く
 白い地図少年歩む夢無限
 一歩ずつころの鐘を響かせて
 少し行き待って合わせる散歩道
 人生を共に歩むと言ったのに
 リハビリの一步一步に孫の檄
 大峰を大師と歩む鈴の音
 道草はしたがその分友が増え
 知らぬ間に父の轍を歩いてた
 昨日より今日の歩幅にある力
 人波に流されぬようただ歩む
 身の丈に合った歩幅に事故はなし
 茨道歩いてやっと思えた海
 振り返り凸凹道の轍あと
 歩み寄るまでの歳月長かった
 まだ余白あるから歩む人生譜
 足元に虹ありタムの上歩む
 膨らんだ蕾を抱いて第一歩
 疑心暗鬼晴れた一步を躍らせる
 歩みよることも覚えて波しずか
 どう生きた歩みで分かる参列者

大阪市	宇都満知子
唐津市	坂本 蜂朗
伊丹市	延寿庵野鶴
三木市	山口ヨシエ
堺市	奥 時雄
岸和田市	雪本 珠子
奈良市	米田 恭昌
高槻市	富田 美義
高槻市	松岡 篤
尼崎市	藤井 宏造
寝屋川市	森 茜
池田市	栗田 久子
神戸市	山口 光久
安来市	原 徳利
河内長野市	黒岩 靖博
長岡京市	山田 葉子
和歌山市	松原 寿子
西宮市	亀岡 哲子
千葉市	海老池 洋
和歌山市	堀 富美子
鳥取市	岸本 孝子
鳥取市	加藤 茶人

ゆっくりと歩む復路のない旅路
 肩借りたあなたへ肩を貸し歩む
 これまでと変らず歩む他はない
 万歩計にしつかり管理されている
 免許返納余命の限り歩きます
 遅くても自分の足で歩きたい
 一歩一歩いつか頂きまで届く
 今さらに進歩するよな年でなし
 歩のように生きて最後は金と成る
 リハビリ室立てた歩けた飛べるかも
 銀色のシユプール描くナメクジラ
 自分史の歩み可もなく不可もなし
 身の丈に合った歩幅に事故はなし
 歩み寄りしかと握手を確かめる
 人生を共にだなんて嘘っぽい
 ひとすじの道のあるいて得る叙勲
 オブジーボ癌撲滅へ歩み出す
 歩むのを休む力も与えられ
 転けるのが怖くてゆっくりと歩く
 つかまって歩く幼児も老人も
 子と歩み夫と歩み今がある
 なららかな坂がわたしを強くする

和歌山市	福井 菜摘
河内長野市	木見谷孝代
可見市	板山まみ子
松江市	石橋 芳山
三田市	福田 好文
上尾市	中村 伸子
下松市	有海 静枝
丹波篠山市	長谷川善輔
羽曳野市	中川ひろ介
河内長野市	森田 旅人
尼崎市	清水久美子
東大阪市	佐々木満作
神戸市	山口 光久
和歌山市	松原 寿子
佐賀県	真鳥久美子
堺市	遠山 唯教
河内長野市	中島 一彌
松江市	相見 柳歩
高槻市	片山かずお
倉吉市	牧野 芳光
広島市	田桑 恵子
弘前市	高瀬 霜石

焼香へ同じ病の歩が重い

五分五分の疵を分け合う歩み寄り

アルバムの色に歩んだ軌跡あり

少し知り少し歩んで少し飲む

茜さす八十路を歩むスニーカー

九合目過ぎるとみんなひとり旅

信じて歩む夢に過ぎぬと言われても

一歩出る足の高さに青田風

立てば歩め歩めば塾へ親の欲

人は人歩幅はみんなそれぞれに

子の歩む道は子のもの母子草

歩くこと即ち命つなぐ事

惜しむよに母は花野を歩み行く

迷いから抜けて歩幅の軽い朝

晩学の一步踏み出す好奇心

濡れた道ばかりを選び歩む子よ

新元号歩む昭和の力痛

心強い一緒に歩む人がいる

一歩前行くライバルが道標

ゆつくりと歩けば見える風の色

ふと歩み止めれば周りよく見える

初期化して令和へ歩む老いふたり

唐津市 仁部 四郎

大阪市 平井美智子

大阪市 降幡 弘美

熊本市 杉野 羅天

三田市 北野 哲男

仙台市 月波 与生

河内長野市 原熊知津子

岡山県 田中 恵

堺市 柿花 和夫

和歌山市 古久保和子

犬山市 金子美千代

三田市 松本ゆかり

大阪市 原田すみ子

三田市 稲角 優子

堺市 内藤 憲彦

鳥取県 斉尾くにこ

弘前市 福士 慕情

大阪市 平賀 国和

さいたま市 星野 育子

神戸市 近藤 勝正

京都市 清水 英旺

奈良市 渡辺 富子

来し方をじっと見つめる八十路越え

無言では歩けないのかチャイニーズ

去つて行く人のおおきな足の音

ウォーキングシューズが照れている歩数

のろいけど確かにつけた足の跡

老いたなと思う歩んだふくらはず

酒とともに歩んでみたい黄泉の旅

我が歩み酒の二合で聞かせましょう

ゆらゆらと二人で歩く迷い道

彼女とゆるり妻とは早く歩む足

いつからか三歩前行く妻の靴

暑に耐える歩みをすこしゆるくする

平成の歩み令和で違えるな

アルプスを歩いた杖とポストまで

言うことをきかない足でもう一步

この杖が散歩の気分邪魔をする

スマホ手に歩く視野には空は無い

今日もまた歩きスマホにぶつかられ

転ばぬよう老いの歩幅が身についた

真つ直ぐに歩け脇見をするでない

動物だもの死ぬまで歩む人の性

漫る歩きの私に夜風語りかけ

羽曳野市 徳山みつこ

宝塚市 岸田 万彩

鳥取県 斉尾くにこ

香南市 桑名 孝雄

河内長野市 大島ともこ

長野県 丸山 健三

豊中市 藤井 則彦

羽曳野市 吉村久仁雄

橿原市 居谷真理子

京都市 榎本 宏子

尼崎市 藤井 宏造

鳥取市 土橋 螢

堺市 奥 時雄

箕面市 中山 春代

桜井市 安土 理恵

四條畷市 吉岡 修

大阪市 原田すみ子

高槻市 原 洋志

鳥取市 岸本 孝子

土佐清水市 辻内 次根

男鹿市 伊藤のぶよし

唐津市 山口 高明

明日へと母の歩幅で考える
和歌山市 まつもとともこ

迷ったら一歩下がって思案する
明石市 糀谷 和郎

食い違う意見を酒が歩み寄せ
河内長野市 藤塚 克三

歩み寄り話し合うにもまず勇氣
香芝市 山下 純子

ジグザグと歩む足だが夢がある
鳥取市 大前 安子

苦勞をしても父の歩んだ道を選ぶ
堺市 澤井 敏治

老牛と歩む私の周波數
喜屋川市 伊達 郁夫

後戻りできぬと少しずつ歩む
大阪市 小野 雅美

落し所探り合いつつ歩み寄り
神戸市 松倉 正美

火を知ったサルの歩みは止まらない
大阪市 栃尾 奏子

氣付かないうちに軍靴の歩む音
出雲市 竹治ちかし

リハーサルなしで人生闊歩する
伊丹市 岡村 風琴

人の字を歩んで蕎麦の花は実に
岡山市 永見 心咲

リハビリ室立てた歩けた飛べるかも
河内長野市 森田 旅人

迷路だと気づいていないから迷路
弘前市 高瀬 霜石

まだ歩く靴を明日に向けて寝る
和歌山市 北原 昭枝

臨月がしつかり歩むやがて母
富田林市 山野 寿之

故郷を観光客の目で歩く
箕面市 中山 春代

向い風に試されている予後の杖
神戸市 山崎 武彦

秀句
ダークイン人の歩みの儚さよ
松江市 藤井 寿代

働いた靴は歩んだ顔がある
長野県 丸山 健三

ファーストシューズ未来を背負う第一歩
河内長野市 大島ともこ

白地図にもう七割は赤い線
堺市 矢倉 五月

赤い実と一歩踏み出したのはイブ
大阪市 栃尾 奏子

焦つたらあかん転けない様歩む
高砂市 松尾柳右子

自分だけの歩幅大事に歩んでる
奈良市 加藤江里子

昨日より今日の歩幅にある力
喜屋川市 森 茜

道草はしたがその分友が増え
高槻市 松岡 篤

デコボコの歩んだ道に人の情
羽曳野市 藤原 大子

歩いても走っていてもくるラスト
奈良県 長谷川崇明

歩いても歩いても虹くぐれない
富田林市 関 よしみ

後戻りできぬと少しずつ歩む
大阪市 小野 雅美

冥土へは牛歩戦術使います
広島市 岸本 清

浄土にはしかと歩いて逝くつもり
芦屋市 竹山千賀子

歩くのに程好い距離に父母の墓
神戸市 近藤 勝正

氣付かないうちに軍靴の歩む音
出雲市 竹治ちかし

定年の辞令へ歩む自然体
唐津市 仁部 四郎

はて何か歩んだ先の物忘れ
鳥取市 加藤 茶人

どん亀の意地抜かれても遅れても
河内長野市 村上 直樹

亀で良い後悔のない道を行く
和歌山市 武本 碧

平和の願い歩み継がれた両陛下
大阪市 榎本 舞夢

秀句
九合目過ぎるとみんなひとり旅
仙台市 月波 与生

新元号歩む昭和の力瘤
弘前市 福士 慕情

新時代老いの歩みでついて行く
三原市 鴨田 昭紀

「便利」

(投句 218名)

西 口 いわゑ 選



便利さを求めて病んで来た地球
問いかけへ律義に返すのはスマホ
ネットから診察予約取りました
アクセスの良い町ですが医者通い
便利屋になると決して同居する
スーパード直ぐそここの上ない便利
派遣非正規何れ便利な労働者
後が怖い妻を便利と思う勿れ
一枚のカードで用足りる此の世
百均の便利グッズで手抜きする
便利屋にされて無給に無休です
メールより恋は封書がよく似合う
ハンカチは二枚泣きたいだけ泣ける
補聴器のスイッチ切れば世は静か
便利さが手の温もりを消してゆく
便利さに慣れて不便が趣味となる
寝てる間に洗濯済んで飯が炊け
鉤裂きを便利に覆うアツプリケ
記憶より確かな記憶持つスマホ
背中合わせ便利とリスクまといつく

出雲市 竹治ちかし
明石市 糍谷 和郎
三田市 九村 義徳
神戸市 山口 光久
西宮市 緒方美津子
倉吉市 山中 康子
三田市 福田 好文
神戸市 上田 和宏
大阪市 平井美智子
箕面市 出口セツ子
鳥取市 福西 茶子
堺市 坂上 淳司
藤井寺市 太田扶美代
宝塚市 岸田 万彩
松山市 宮尾みのり
羽曳野市 吉村久仁雄
三田市 北野 哲男
海南市 堂上 泰女
下松市 有海 静枝
枚方市 山口弘委智

ご先祖と便利のわるい過疎に生き
沖繩に意地あり便利にはさせぬ
記憶にない便利な嘘がテレビから
翻訳機語学の勉強止めさせる
便利の嫉寄せプラスチックの山
何よりも便利なものは自分の手
便利な世裏では地球温暖化
近道は便利地獄も近かった
化粧して便利な仮面二つ三つ
レンジでチンもう一人でも生きられる
スマホより下手でも手紙喜ばれ
便利屋の主婦に芽生えた自立心

佳句

右腕と言われ便利に使われる
都合いい便利な言葉プラス思考
いろいろなポケット持っている暮し
究極の便利略語のカタカナ語
情報は指一本で得る時代

人

人生のイロハを学ぶ縄のれん
一本の輪ゴムがあつて助かった

地

天

誰にでも合わせる無着色の笑み
軸

恙なく歳を重ねる便利な世

堺市 遠山 唯教
大阪市 古今堂蕉子
河内長野市 藤塚 克三
豊中市 水野 黒兔
大阪市 宇都満知子
池田市 奥園 敏昭
大阪市 平賀 国和
高槻市 富田 美義
堺市 澤井 敏治
札幌市 三浦 強一
西宮市 福島 弘子
香芝市 大内 朝子
大阪市 高杉 力
高槻市 富田 保子
三田市 上田ひとみ
唐津市 仁部 四郎
鳥取市 山下 凱柳
弘前市 高瀬 霜石
榎原市 居谷真理子
佐賀県 真島久美子

「ガラガラ」

(投句 227名)

山 東 日出男 選



ガラガラの始発電車でオンにする
 ガラガラを振るとつぶらな瞳が笑う
 孫二歳うがい出来たと得意顔
 ガラガラの部屋は巣立った子のおい
 天敵はガラガラ蛇にだっている
 大丈夫かなあガラガラの病院
 ガラガラの店で二の足踏んでいる
 ガラガラだ飛び乗る車両女子車両
 ガラガラの電車生き返らせたタマ
 核心に触れると崩れゆく積木
 ガラガラボン泣いて笑って再起動
 ガラガラのバス定刻に来る日本
 ガラガラピシヤン何か不満がありそうだ
 格子戸が開いて元気に子が帰る
 都市砂漠ガラガラ蛇にありました
 ガラガラボンへ特賞入れる最終日
 がらがらボンなかったことにするデータ
 極楽ツアーガラガラですがどうします
 ガラガラボン神さんの色でてきたぞ
 ガラガラボン無欲の孫の当りくじ

八王子市 川名 洋子
 東大阪市 佐々木満作
 奈良市 米田 恭昌
 倉吉市 岡崎美知江
 奈良県 中堀 優
 大山市 金子美千代
 和歌山市 磯部 義雄
 豊中市 上出 修
 和歌山市 武本 碧
 和歌山市 太田扶美代
 藤井寺市 山口 光久
 神戸市 大石 洋子
 岡山市 福西 茶子
 鳥取市 松尾美智代
 豊中市 七反田順子
 西脇市 池田市 上山 堅坊
 三原市 笹重 耕三
 八幡市 今井万紗子
 大阪市 柴本ばっは
 貝塚市 石田ひろ子

喝采のあとのガラガラ夢の跡
 団欒の絵をガラガラと爍く津波
 朝一のウガイで母の調子みる
 イケメンのガラガラ声がいただけぬ
 老人に過疎地のバスは命綱
 ガラガラボンと政治家のいい加減
 格子戸をそろっと開ける午前さま
 不条理を叫ぶガラガラ声になる
 株主じゃないが気遣う空のバス
 お誘いを待つガラガラスケジュール
 ガラガラの傍聴席に居たスパイ
 ガラボンで決めて諍うこともなし

佳 句

空席が埋まる夢見て前相撲
 倦怠期うがいの音に湧く殺意
 幸せを積んで崩して生きて行く
 いいやつだガラガラ声の女だが
 覗いたら仁王の腹はがらんどろ

人

威勢よくはずれ吐き出す抽選機
 地獄より天国行きが空いている
 ふる里へ私ひとりのバスが行く

軸

路線バス乗るのは僕と運転手

鳥取市 夏目 一粋
 岡山県 藤澤 照代
 神戸市 能勢 利子
 西宮市 緒方美津子
 堺市 奥 時雄
 熊本市 杉野 羅天
 堺市 澤井 敏治
 土佐清水市 辻内 次根
 神戸市 近藤 勝正
 大阪市 小野 雅美
 唐津市 仁部 四郎
 奈良県 安福 和夫

河内長野市 中島 一彌
 南あわじ市 萩原 狸月
 札幌市 三浦 強一
 米子市 成田 雨奇
 大阪市 石田 孝純
 大阪府 米澤 俣子
 門真市 坂本 星雨
 奈良県 渡辺 富子

初しぎ教室

題 一つなく

高瀬霜石

入門したての頃、先輩にこう言われた、

「人は誰でも同じことを考えるから、第1想、第2想は捨てて、第3想から書きなさい」と。

臆曲がりの僕は、すぐに逆らった。だって、人それぞれ、考えることはみんな違うじゃんかと。僕の第3想が、他人様の第1想かもしれない。それよりも、「自分の想い」(オリジナルテイ)を大切にしたいものだ——たとえ、他人様とかちあったとしても——と思った。

さて「一つなく」である。当然、赤い糸の句は多い。多かれども、その中で、ピカリと光る赤い糸を書けば、それでいいのである。

①まずは定番、上と下を入れ替えてみる。

(▼が原句。▽が参考句)

▼妻と俺つないでいるのは年金だけ 光 雄
リズムが悪すぎまっせ。上7になるけど、

▽年金だけでつながつている妻と俺

▼手つないだり離したりするフルムーン 一 弥

これもリズムがイマイチ。せいぜい…

▽フルムーン手をつないだり離したり

▼古い二人切れてませんよ赤い糸 久直

これは好みの問題。僕は、とくかく「古い二人」は使いたくないのです。ごめん。

▽赤い糸切れてませんよわたしたち

▽近未来A子供生む予感 利尚

「近未来」の設定ならば「予感」は無用。

▽A1が子供を生むか近未来

▼あと三日給料日まで食いつなく 奈津子

これでも悪くはないけれど、スリルな句に

仕立てるためには「あと三日」を最後に。

▽食いつなく給料日まであと三日

▼つないだ手愛のぬくもりまだ覚めず 弘華

これも好みの問題。「愛」とかはあまり使

いたくない言葉。なぜなら、愛という単語

を使わずに、愛を詠むのが川柳であると思

うから。「人生」も、またしかりだ。

▽ぬくもりがまだに覚めぬつないだ手

▼家族の輪子から孫へと順送りする (兼)玲子

これも、とつてもリズムが悪いわなあ。さっ

さも書いたが、頭が重いのはやむなし。

▽子から孫へと順送りする家族の輪

②重複する言葉をカットして、句姿をすつきり爽やかにする。

▽孫がいて繋がっている老夫婦 通則

「古い二人」とか「老夫婦」とかは嫌いだ

と書いたが、これは別問題。孫がいるなら、

老夫婦に決まっているから、言わずもがな。

▽孫がいて繋がっているわたしたち

▽七色の虹が天と地を繋ぐ日 (澤)良子

「七色の虹」は歌謡曲。虹は七色って決つてまっせ。書いちゃダメ。虹は虹でよし。

▽天と地を繋ぐわたしの虹が出る

▽検診日葉は同じ処方箋 厚子

「処方箋」が出ていれば「葉」はいらない。もつとシンプルに。シンプルこそが大切。

▽検診日いつも同じ処方箋

▼二人三脚心もつなく一等賞 (東)美智子

二人三脚。それで繋がっていることは明白。

▽二人三脚心ひとつに一等賞

▼スポーツで繋がる五輪待つ命 紀美代

「命」とまで気張らなくても、と僕は思う。

▽スポーツで繋がる五輪待っている

▼つないだ手離さないでね旅途中 風露

「離さないで」だから「一つなく」は無用。

▽わたしの手離さないでね旅途中

③表現を、時には、もつと大胆に、大袈裟に。

▼蠟燭を足して足しての寿命待ち ひとり

「足して足して」のリフレインは効果的だが、下五は美しくない。なので、リフレインをもつと大袈裟にし、キリりと締めたたい。

▼蠟燭を足し足し足して生き延びる

▼長寿の母命をつなぐ般若湯 三樹夫

面白い句だが、インパクトがイマイチ。

▼百歳の母が愛する般若湯

▼つなぐものなくして老後ひきこもり 秀 爷

「老後ひきこもり」が、あまりに暗いので。

▼つなぐものなくしていつかひとりきり

▼会社勤め我慢々々で首つなぐ ゆ き

気持ちちはよく分かる。リフレインも悪くはないが、ここは、あえて首に集中して。

▼会社勤め我慢々々で首ひとつ

▼同窓会飲む食う喋るでつないでる 道 子

題が「つなぐ」だからって、下五、つい無理したのだろう。無理しなさんな。素直に。

▼同窓会飲む食う喋る肩を組む

▼良き事をつなぐ母からDNA (川) 信 子

▼母からのDNAを誇りとす

▼恨むのはよそう命もらったから 里 子

▽恨むのはよそう命はひとりつきり

④焦点を絞る。自分の立ち位置を確認する。

▼年二回姉妹つないでくれる墓 開 子

状況は分かるが、自分の目線(つまり、自分か、姉か妹か)をはっきりさせると、句もスッキリとするのではないか。

▼姉さんと年に二回の墓参り

▼妹と年に二回の墓参り

▼八分二分妻のブランでつないでる 和 之

下五が弱い。状況がよく分からぬ。で、きつと、こういうことなのではなからうか。

▼八分二分妻のブランが支配する

▼フォークダンス手を繋ぐのも恥ずかしい 重 男

だからさあ。フォークダンスって、手を繋ぐものだからさ。「繋ぐ」はいらぬいって。

▼フォークダンス今でもほくは恥ずかしい

▼懸命に走りタスキに夢つなぐ 由紀子

これでも悪くはないが、でも、パワー不足。

▼懸命に走るタスキに夢つなぐ

○は佳句。◎は優秀句。

○うちの猫トラの名前で六代目

○赤い糸接着剤で補強する

○赤い糸結び直しに行く旅行

○天才と思つた息子蛙の子 勝 正

ママと手をつなぎたいのに届かない くみ子

最近いたましい虐待事件を、つい思う。

◎つなぎとめたくて手管を使うのよ 不二夫
とほけていて面白い。作者は女性と思いきや、なんと男性。すつかりとほけられた。

◎国境が優しい人になれと言う もとこ

この1句で卒業! と言いたくなるほどの佳句だが――あとの2句がチト弱かつたので――もう少し様子を見てみたい。

さて、今回も、卒業生が2人。まずは、坂野澄子さん(河内長野市)。

◎幸せをあなたへつなぐブーケトス 澄 子

◎さりげなくスマホがつなぐ嫁姑 澄 子

△手をつなぐあんたおまえと長寿坂 澄 子

◎↓↑△と、戻つばみの感があるが、たま

たま並び方が悪かっただけ。3句目を△としたのは、あまりに演歌くさかつたから。

もうひとつかた。高橋千賀子さん(西宮市)。

◎人の世の心をつなぐボランテア 千賀子

◎繋がれても役目を果たす犬のシロ 千賀子

△孫と手をつないで帰る散歩道 千賀子

偶然、こちらも似たようなパターンになつ

た。3句目の△は、あまりに平凡。

川柳塔鑑賞

同人吟 村上玄也

—8月号から

幸せの欠片で今は暖を取る

吉村 久仁雄

定年後のことなのでしようか、今は孫にも恵まれて大満足という程ではなくても、ささやかな幸せを感じながらゆったりとした余生を楽しんでおられという光景が浮かびます。

家中の空気が踊る子等が来る

山縣 のぶ子

いつもは老夫婦二人っきりで静かな生活ですが、連休などで孫たちがやって来ると家中が急に騒がしくなつて、まるで空気が踊りだすようだと言ふ老夫婦の喜びようが窺えます。

また謝罪マニュアル通り見せられる

内藤 憲彦

官公庁や大会社での不祥事の多い事。そのたびにお偉方が雁首を揃えて、それこそマニュアル通りのあまり誠意の感じられない謝罪会見を見せられます。

若いなど言つて欲しさに歳を言い

寺川 はじむ

よくお歳はと尋ねると「いくつに見えますか」と答えるお年寄りを見かける。本当の年より若く見えると嬉しいもので、ましてや「お若いですね」と言われると満足そうにする。歳を聞いてくれなかつたら自分から〇〇歳ですと「お若く見えますね」の言葉を引き出したいでしょう。

大阪弁闊歩できない街となり

森松 まつお

インバンドで潤う大阪、今やデパートも電車内も聞き慣れない言葉が飛び交つていて大阪人が片隅に追いやられて、どこか違う国へ来たような錯覚さえ感じます。

歯医者から助けてくれと児が叫ぶ

前田 楓花

今回の同人吟の中で最も笑わせてくれた句がこの句で、気持ちと和ませてくれました。大体子供らは医者に行くと言つと嫌

がつてぐずるものですが病気を治してくれる医者の前で「助けてくれ」と叫んでいる児はどんなお子様なのでしょう。思わず頬がほころびました。

長寿化と言いかえましよう高齢化

岸本 清

全く同感です。年金問題、自動車事故など最近のマスコミが取り上げるニュースは年寄りには耳に心地よいものが殆どありません。高齢者は邪魔者かのように感じてしまうのは偏見でしょうか。せめて名前だけでも長寿と言つて貰いたいものです。

二次会で四角を丸にしましょうか

山田 耕治

最初の宴席はお偉方が上座に座つて、どうしても堅苦しさが抜けません。早くお開きにして気の合う同士気楽に盛り上がりたいと思うものです。四角を丸にするとは言いえて妙です。

疲れるとわかる微かな上り坂

辻内 次根

若い頃にはわずかな上り坂くらいなことも気にせずすいすい駆け上がったものですが、年を取ると微かな上り坂でも足腰にこたえて負担を感じるようになります。

サバ缶は手抜き味の味方だった筈

木田 比呂朗

サバ缶に限らず缶詰料理は忙しくて料理などしていないときの救世主で、缶を開けて食卓に並べれば済むと言う超簡単料理だったのが、最近の料理番組ではサバ缶を材料に手の込んだ料理を紹介しています。缶詰が手抜き料理の代表だった筈がサバ缶の栄養が見直されて色んな料理のメニューが作り出されています。

人生百年耐震工事とかねば

金子 美千代

人生百年時代蓄えは2000万円必要との金融庁の発表があつて、ひとしきり世間を騒がせましたが、人生百年を恙なく過ごそうと思えば建物だけではなく人生設計自体を百年に耐えうるものにしなければならぬと作者は訴えています。

小銭ばかりたまる老化の第一歩

大島 ともこ

スーパーやコンビニなどで小さな買い物をして、支払いを計算が面倒だからといつでも千円札を出すようになるのは認知能力の低下の第一歩だとテレビでやっています。

居心地の良いよう少し散らかして

古今堂 蕉子

きちんと整理整頓のされている部屋はかえって落ち着かぬもので、少し散らかっている方が居心地よく何をするにもはかどるような気がします。

五線譜を外れやんやのアンコール

村田 博

仲間内で歌が得意ではないと知れ渡っている御仁に無理やりマイクを持たせて、調子はずれの歌に拍手を送り、アンコールを求めて場が一気に盛り上がるという光景です。

人間が墮落しそうなクールビズ

福田 好文

2005年環境省が中心になって「夏場の軽装による冷房節約」を目的にクールビズをキヤッチフレーズにして普及し、今や役所は勿論あらゆるところで普及しています。しかしながら時には仕事をするのにラフすぎてだらしないと感じることもあります。それがあらぬか最近役所や企業でのミスや不祥事が多発していますが、このことと無関係では無いというのは言い過ぎでしょうか。

親が引くレールにポイントを作る

藤田 武人

親の引いてくれたレールをただ歩むだけでなく、レールのどこかでポイントを作って自らの進む道を切り開いて行こうという心意気です。

背伸びしたことでつまずき自己嫌悪

藤井 文代

何とか自分を大きく見せようと、身丈に余ることをやろうとして躓いてしまう。見栄を張ったり、自分を過大評価してはならないという教訓です。

楽しい話だけが聞きたい耳そうじ

古久保 和子

世の中に嫌なニュースが多すぎます。出てくることなら、いい話だけが耳に入るように、そんな耳そうじは出来ないものだろうか。

AIに命預けるのも怖い

中村 金祥

AIがますます進化して人間のする仕事がどんどん取って代わられてゆく。車もコンビニも、医療の分野もAIが、やがて人間社会をAIが支配することになるのではと心配である。恐ろしい事である。

水煙抄鑑賞

— 8月号から

永見心咲

キッチン朝は七つの電子音

鈴木 たくし

電子音の響く台所。その音に急かされ今日が始まります。パンが焼けました。冷蔵庫のドアが開いたままですよ。いろいろ無機質な言葉が溢れています。一言でも生の会話が交わせれば嬉しいですね。

ホーランエンヤテレビの前が指定席

山根 邦代

三七〇年の歴史を継ぐ船神事。今年は一〇年ぶりに松江の初夏を彩りました。テレビ鑑賞が一番の指定席。怪我もしないしベストです。

自惚れてしまつ貴方が笑つから

真島 久美子

私を見て微笑んでくれたの。そう思えた時から貴方を軸に私は暮らしています。幸せな思い込み。

自家発電するよに三度飯を食う

山野 すみれ

朝ご飯抜きの私には教訓のような句です。三度三度きちんと頂き自身のエネルギーを生みださねば。

増税分庭でピーマン育てます

齋藤 奈津子

庶民直結の消費税が竹下内閣時代の3%から10%に。増税のたびにささやかなやり繰りを。庭直送の野菜は最高です。ヘルシーと聞いてついつい食べ過ぎる

羽田野 洋介

そうですね。ヘルシーと言われ安心してしまふのはどなたも一緒「ついつい」で、心境を上手く表現しています。レジ嬢が微笑みかける店に行く

中筋 弘充

某衣料店では、バーコードをスキヤンするまでも無く、買い物籠を台に載せるだけで会計が済みませす。便利だが味気ない。

カンバイは三百五十半分

郷田 みや

五百ミリじゃないところが良い。幸せ少々、二人で乾杯。

独りとは急所に湿布届かない

宮宅 比佐恵

独りの寂しさ心細さを、こう表現されましたか。頑張っているも急所を攻められれば、痛いのです。それを癒すアナタが居てくれればと、視野は仏壇へ。

包丁を研いで涙もみじん切り

定松 宏枝

包丁の切っ先が怪しく光ります。悔しさも「エエイツままよ」と、みじん切り女の底力が湧いて来ます。

料理より顔の手入れに忙しい

太田 としお

料理だって、決して手抜きなどしていませんよ。お顔の手入れも貴方の為。女心を斜に捉えて微笑ましい。

極楽へゆくカーナビを付けている

小畑 定弘

母さんは主語がないよと子に言われ

禱 モモト

京町家チャイナマネーが保存する

山田 厚江

あなただけ特別うまく転がされ

相見 柳歩



S i n 選

人生と呼吸が合わぬ気がします
くり返し妻を吸い込む試着室
君の夢ちよっぴり吸った乱れ髪
暗闇で吸ってきた声捨てた声
辻褃があうように吸う春のかぜ
君の手に刺さった棘を吸う深夜
愚痴不満吸って膨らむ赤ちょうちん
ストローで赤面性を吸い上げる
夕焼けを吸った背中にあるあした
こめかみにとまった蚊だけ許す説
愛せるか愛されてるか深呼吸
タバコ吸う女になっていた四十
嘘をつきながらあなたの空気吸う
宗教を問わず吸い込む便器孔
真っ白になるまで毒を吸うのです
一呼吸喉越しのいい四角形
看護師のニベアが香る吸入器
吸い方は花柳流でいいですか
ポケットにいつも持つてる換気口
瞳から塩素を吸った順に夏
吸い飲み形の形は令和でも同じ
八月の微頭徹尾チューベツト
定年後ずれる呼吸とずれる位置
深呼吸だあれもなくなっちゃった
昨日とは違う呼吸法で男
一途とは毒かもしれぬ蜜を吸う
わたくしを見失わないほどに吸う
恋人と同じ匂いの夜を吸う
レファラシの仲間に入りたいのです
東京の空気はジグザグに吸える
肺を膨らませ小人は飛ぼうとした
吐くことを忘れた三日月の微熱
佳5 吸い物にうっかり連れ去られた海
佳4 血を吸った過去は隠して彼岸花
佳3 吸う あの日から薄暗いものばかり
佳2 水色に変わると息が吸いやすい
佳1 思春期を吸い込めばまだ濡れている
人 吸うときの舌の位置など考える
地 人類を吸う草間彌生のカボチャ
天 交互に吸うやわらかい波のオノマトベ

雨 径
汐海 岬
水谷 裕子
米山明日歌
米山明日歌
甘酢あんかけ
森下 博史
丘 きらら
田村ひろ子
西 鎮
永見 心咲
居谷真理子
居谷真理子
平尾 定昭
尾崎 良仁
伊藤 正美
伊藤 正美
板垣 孝志
森野 ハナ
芍 薬
村上佳津代
久藤 さえ
さくら草
まみどり
青砥 和子
柳田かおる
水木 星羅
月波 与生
怜
い ゆ 蘭
森山 文切
真島久美子
芍 薬
昌 紀
守田 啓子
乙川 初音
い ゆ 蘭
真島久美子
坪井 新
守田 啓子

平井美智子 選

煙草吸う秘密結社の部屋があり
暗闇で吸ってきた声捨てた声
同じ空気吸って泣く人笑う人
吸い出すと止まぬこの世の甘い汁
息吸って吸って大空に浮かぶ
多情多恨吸盤ごとの蛸の恋
禁煙の成功祝いタバコ吸う
故郷へ昭和の風を吸いに行く
がむしゃらに吸ってこの世にしがみつく
哺乳瓶からニンゲンが発芽する
ストローで赤面性を吸い上げる
血を吸った過去は隠して彼岸花
吸い過ぎだよまだりハーサルなんだから
愛せるか愛されてるか深呼吸
ため息の度に希望も少し吸う
失言に吸取紙を当ててみる
忘れないように吸わねばならぬ息
排気ガスいっぱい吸って元気です
あの頃はよかったレモンチューベツト
ぞんぶんに夏を吸ったか蝉しぐれ
吸いさしのストローの先サガンの死
寄っといで君の溜息吸ったげる
看護師のニベアが香る吸入器
読まないで吸った空気の旨いこと
個人差もごさいますがと美容液
ストローで吸うよう年金の余生
わたくしの吸った分だけ減る酸素
吸い飲みみからかすかに減った桃ジュース
アドリブは苦手大きく息を吸う
八月の赤い空気を吸っている
吸う あの日から薄暗いものばかり
深呼吸すればかすかに髪気襟
佳5 哺乳瓶型I Q O Sの試吸会
佳4 レファラシはさびし気ですなハーモニカ
佳3 ばあちゃんの吸引力が変わらない
佳2 八月の微頭徹尾チューベツト
佳1 人類を吸う草間彌生のカボチャ
人 吐くことを忘れた三日月の微熱
地 吸い方は花柳流でいいですか
天 真っ白になるまで毒を吸うのです

横山岡治郎
米山明日歌
山本 進
武本 碧
みぎわはな
みぎわはな
涅槃 girl
中筋 弘充
三浦 蒼鬼
三浦 蒼鬼
丘 きらら
昌 紀
雨森 茂喜
永見 心咲
川本真理子
森山 盛桜
西山 竹里
新家 完司
乙川 初音
海賊 芳山
福村まこと
上山 堅坊
伊藤 正美
えんどうけいこ
美馬りゅうこ
木田比呂朗
辻内 次根
徳重美恵子
青砥 和子
田畑 宏
守田 啓子
水 鳥
河野 潤々
四ツ屋 いずみ
久藤 さえ
久藤 さえ
坪井 新
真島久美子
板垣 孝志
尾崎 良仁

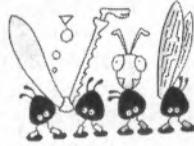
投句方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net

(サイト管理 森山文切)



(投句211名)
 このところの夏の暑さに
 は 本当に参ってしまいま
 す。



テレビでは連日、熱中症
 に注意と言ひ、水分を取れ
 だの冷房を使えだのと世話
 を焼いて(?)いて、ほんの数年前に節
 電を叫んでいたことなど嘘のよう。
 クーラーのために使った電気代を見て
 寒けがする、なんて笑えない冗談も聞こ
 えて来ます。

では、部屋を涼しくして、ナビを。
 大阪市 高杉 力

セルフレジだけになつたらどうしよう

(評) なんでもかんでもセルフになれば、
 慣れるまで大変。それよりもお店の人と
 の短い会話まで無くなつてしまいます。

和歌山市 古久保和子
 時は分解掃除する五体

(評) 自分の身体を分解して溜まったホ

コリを払い、少うシアブラを注したりし
 てリフレッシュ出来たらねえ。

羽根持たぬことがどんなに口惜しいか
 (評) 鳥はもちろん、小さなトンボや蝶
 でさえ、羽根があるだけで自由に飛べま
 す。あの羽根が欲しいものです。

羽曳野市 徳山みつこ
 ガチャガチャと世間はもめているんだよ
 (評) ひとつ収まればまたひとつ、不
 思議なくらい揉め事というものは無くなり
 ません。ま、それが世間なのかも。

大阪市 内田志津子
 運動会みんな一等みんなビリ
 (評) 勉強は苦手だけど、駆けっこは誰
 にも負けないぞ、なんて子が主役になれ
 た運動会、もう今は無いのかしら。

八王子市 川名 洋子
 うつかりと笑つてしまい叱られる
 (評) 笑つてはいけな場面でついつい
 笑つてしまうこと、あります、あります。
 あれつて何なのでしょう。

三田市 北野 哲男
 初心者の万葉集の図解です
 (評) 注目の万葉集、その図解とか。
 拝見したいものです。それも初心者向け
 とあらば、ぜひ。

大阪市 榊尾 奏子
 フライドを捨て私の量り売り
 (評) 世の中と繋がるということは大か

れ少なかれ、自分を抑えることでもあり
 ます。量り売りとは巧い表現。

炎天下蟻も謀叛を企てる
 (評) 近年の夏の暑さときたら、尋常で
 はありません。生真面目な蟻の思考だつ
 て、揺らいでしまいそう。

河内長野市 木見谷孝代
 だれかなあひとり音程はずすのは
 (評) これ、意外に目立つんですよ。ね。
 でも、音程の乱れは自分ではなかなか直
 らないもの、つらいわあ。

西宮市 緒方美津子
 うれしいねわが故郷に蛍舞う
 大山市 金子美千代
 シェアハウス一応ルールあるけれど
 大阪市 宇都満知子

羽曳野市 吉村久仁雄
 饒舌と寡黙が集う四重奏
 明石市 糀谷 和郎
 伝達ゲーム赤と言ったが白になる
 堺市 坂上 淳司

河内長野市 山岡富美子
 チンドン屋消えた令和の街角に
 三田市 尾崎 一子
 少しずつピントがずれてきた五感
 札幌市 小沢 淳

羽根つけてくれたジャニーはもういない

尾道市 大木 和子
マンモスを倒した事もあるヒト科
防府市 坂本 加代
元の位置間違えぬよう縫い合わす
松江市 石橋 芳山
わっしょいと一夜を担ぐ夏祭り
池田市 太田 省三
除草剤に耐えて今年もキリギリス
藤井寺市 鴨谷瑠美子
反対のホームに妻が立っている
堺市 矢倉 五月
個性派を揃え舞台は今佳境
笠岡市 藤井 智史
井戸端はおいしいネタの試食会
米子市 吉田 陽子
指揮者つてどなた中中揃わない
黒岩市 北山まみどり
個人的なひとステキなほめ言葉
佐賀県 真島久美子
私です生産性と言ったのは
榎原市 居谷真理子
後生大事に飛べない羽根を持っている
高槻市 松岡 篤
一〇秒の壁破る者ぞくぞくと
大阪市 小野 雅美
レントゲン君の心が読めません
唐津市 仁部 四郎
クジびきて意見があればいいなさい
鳥取市 夏目 一粹
鈍感な人がいるから世は回る

大阪市 柴本はつは
靴音も入れて見事なカルテット
堺市 内藤 憲彦
悩みごとルンバで吸ってゴミに出す
鳥取市 上山 一平
四コマに老後の世相か見える
弘前市 福士 慕情
大物を運ぶ役割決めてある
長野県 丸山 健三
あしたから鳥になります誕生日
松山市 柳田かおる
終章へわたしきれいに畳めない
弘前市 稲見 則彦
組み立てに接着剤がありません
西宮市 亀岡 哲子
関西の軽井沢やと里の山
土佐清水市 辻内 次根
転生はあるか見詰めている時間
大阪市 笠嶋 恵美
主義主張どれも自分が大事です
豊中市 上出 修
米中の不協和音が止まらない
奈良県 中堀 優
持ち寄って組み立てたなら鬼やんま
鳥取市 池澤 大鯨
一人ぐらい逆を向いてもご愛嬌
笠岡市 小野美那子
とりあえず歩いてみよう森もある
黒石市 千葉 風樹
パラパラ漫画診察室の我がカルテ

11月号発表
(9月15日締切)



(平本 霧石人 画)
柳箒に2句

西宮市 福田 正彦
受けた恩返せなかつた夏が行く
大阪市 田中 廣子
羽根のぼし次の出番を待っている
和歌山市 土屋起世子
休耕地ここから僕等パラダイス
大阪市 石田 孝純
騎馬戦は今年も中止なんだつて
鳥取市 福西 茶子
タコ焼きにケチャップ異議がありませんか
男鹿市 伊藤のおよし
これが現実生きたイソツブ見せてやる
千葉市 海老池 洋
2000万貯めねばならぬ蟻の汗
西宮市 高橋千賀子
幸せにスパイスかけて明日がくる
岡山市 永見 心咲
羽衣の素材は僕の羽根だつて
河内長野市 大島ともこ
コスプレにしちゃやり過ぎねあの子達
和歌山市 竹本 碧
肩の荷の重い方から崩れ出す

本社 八月句会

◇八月九日(金)午後一時
アウイーナ大 阪

台風十号の影響を受け酷暑が続く九日、八月句会は百十七名(内投句者十二名)の参加で開催された。

今月のお話は番傘同人の川端六点氏。題は「私と川柳」。昭和四十五年ころ網膜色素変性症発病により視力低下が続き平成元年に失明。「心を詠む川柳」ならと考えスタート。

独学の点字修得など多くの課題を克服され、全国盲人川柳家対象のテープ川柳月刊誌「水仙」を発行。昨年十二月400号達成を機に「記念合同句集」を刊行。このような盲人川柳界への貢献を高く評価され、今年一月番傘本社から「第五回磯野いさむ賞」を受賞。最近は聴力低下もみられるが、朗読や点訳ボランティアの方々の変らぬご支援も頂きながら「水仙」500号発行を目標に何とか頑張りたいと熱く語られると、会場全体が深い感動に包まれた。(正彦)

月間賞は居谷真理子さん(樫原市)
(司会)真理子・志津子(協取)智史・勝弘
(受付)純子・昌代(懸垂幕墨書)耕治
(清記)憲彦・勝弘

席題「住む」

大久保眞澄 選

地球という星に住んでる仲間たち
喧嘩好きの70億が住む地球
君が住むこの国だから我慢する
甲子園魔物が住んで悪さする
八月忌戦地に住んでる遺骨
活断層の上にしつかり乗る我が家
住みやすい町だが飲み屋街がない
奈良に住み仏と語るおばあさん
銭湯もめし屋もあつて住み慣れる
文句言うまいともかく風雨のいでの
四の五の言うな四季ある国に住める幸
Uターン知らない街になつて
天井に貼る君の住む街の地図
大雨が恐い海抜ゼロに住む
住み慣れた大阪おばちゃん最高
バス停がいつもきれいな町に住む
風鈴と猫一匹と路地に住む
豪邸に住んで淋しい独り者
子供部屋物置にして老い二人
あきらめを調整しつつ住むひとり
夏休み動物園のように住む
住みついた貧乏神と深い仲
我が家にも夢食う瘻がひとり居る
芋の煮転がしがとても上手な魔女と住む

三宅 保州
中島 一彌
安福 和夫
敏森 廣光
柿花 和夫
木藤こみつ
新家 完司
木嶋 盛隆
油谷 克己
安土 理恵
澤井 敏治
田中ゆみ子
川端 六点
江島谷勝弘
斎藤 隆浩
居谷真理子
片岡 加代
鈴木いさお
堀 正和
小野 雅美
池田 純子
大内 朝子
山崎 武彦
小島 蘭幸

天使だと思つた妻に鬼が住む
五十年七変化する鬼と住む
男女越え人対人で今は住み
友だちが誘う地獄に住むつもり
ボツンと一軒家で月に住むつもり
月面に永住権はとつてある
地球にも飽きて火星にお引越し
満月の裏にはカメが住んでいる
夢工場アンパンマンが住んでます
築二百年座敷わらしも住んでます
ご注意下さい家守も住んでます
あの人が住んでこの胸空きがない
胸に住む鬼も気弱になりました

木嶋 盛隆
中堀 優
長谷川崇明
澤井 敏治
吉村久仁雄
上野多恵子
村田 博
上出 修
鈴木 かく
西出 楓楽
初代 正彦
萩原 狸月
川端 六点
阿部 俊八
宇都満知子
佐々木満作
木藤こみつ
萩原 狸月
山本希久子
木本 朱夏
松岡 篤

兼題「割る」

村田 博選

ニゲンが割ってしまつと泣く地球
 渾身の作割る匠妥協せず
 怪我よりも皿の心配してる妻
 握力が弱りコップをよく落とす
 空手チョップいじめ黙然してしまふ
 黙痔はつづく八月まつぶたつ
 被害者の立場で割り切れぬ苦惱
 万一に備え遺している割符
 割り切って生きる付度はもうしない
 鬱憤は皿一枚を割って晴れ
 爆せてこそインスタ映えのする石榴
 猛暑酷暑河童の皿がひび割れる
 いにしえを土器の破片が物語る
 お盆には里に帰って薪を割る
 人の輪に割り込みしたいクセがある
 割り切れず余つた白い金平糖
 腹割つた話心の素つ裸
 聞き上手割り込み上手いる酒場
 雑草が地球を割って生えてくる
 友情をバリツと割つたのは嫉妬
 割り込みに一喝吠えた日もあつた
 割るのならまだしばらくは任せてね
 割り切ると介護楽しくなりました
 夫婦喧嘩割つて入るはいつもボチ

上山 堅坊
 米田 恭昌
 齋藤さくら
 片山かずお
 丹後屋 肇
 上野多恵子
 荻野 浩子
 初代 正彦
 吉村久仁雄
 村上 玄也
 緒方美津子
 片岡 加代
 大内 朝子
 新家 完司
 山下 純子
 富永 恭子
 山野 寿之
 中島 一彌
 木藤こみつ
 藤井 宏造
 福田 正彦
 山田 葉子
 能勢 利子
 永田 紀恵

兼題「国」

松尾美智代 選

腹割つて話してからの無二の友
 口を割るほど柔で無い汚職
 プラごみが割り込み泣いている地球
 苦は割り算幸は掛け算する余生
 絡まった風に胡座の洪田扇
 尺玉が割れて夜空に咲く火花
 貯金箱割つてせめても義援金
 割り勘が大好き存分飲めるから
 玉子割り今日の幸せ黄味ふたつ
 薪割り一閃おじいさんには敵わない
 ライバルや上司と思う西瓜割り
 床を吸う落として割れたナポレオン
 失恋に効くテキーラのウォッカ割り

お静かに蟬の命が土を割る
 愛を割るいま納得の真つ二つ
 出土した土器の欠片に馳せる夢
 鍍着た君のハートに打つ楔
 ペアカップ割つて出直す第二章

風船ガム時々割つて待つチャンス
 割れ物に注意反抗期の背中
 星いくつ割ればあなたに会えますか
 パーゲンの酒薄味で酔いもせぬ

大内 朝子
 川端 六人
 渡辺 富子
 鈴木 かこ
 関 よしみ
 中島 一彌
 三宅 保州
 江島谷勝弘
 水野 黒兎
 小島 蘭幸
 川端 六人
 井丸 昌紀
 藤井 宏造
 伊達 郁夫
 中村 恵
 佐々木満作
 森田 旅人
 木本 朱夏
 初代 正彦
 田中ゆみ子
 小野 雅美

地球儀に飽食の国飢える国
 少子高齢国を背負う呱呱の声
 白地図に自国の色を塗りたがる
 天の国まだ呼び出しがかららない
 この国に産まれて生きている至福
 四季のある国の猛暑だガマンする
 国と国近くて絶え間ない摩擦
 平和な国となった日本に寄せる波
 あまりにも巨額で恐怖国のツケ
 選挙終えベル鳴り国が動きました
 長寿国どこか迷惑そうなお官

この国の芯は九条八月忌
 こだわりは捨てようみんな地球人
 国産に拘る人のやせがまん
 表情をコロコロ変える四季の国
 君が代を歌う東の間の愛国者
 仲よく手をつないでいます万国旗
 世界中はびこりだした自国主義
 核兵器持つて持たせぬ国のエゴ
 優勝の国旗国歌が押し上げる
 命かけ反核叫ぶ被爆国
 国と国もめても地球儀は一つ
 暑い国脱出オーロラ観に行こう
 国なまり七つ覚えた甲子園

北野 哲男
 米田 恭昌
 伏見 雅明
 能勢 良子
 中村 恵
 新家 完司
 水野 黒兎
 藤田 雪菜
 水野 黒兎
 中川ひろ介
 吉村久仁雄
 楠井 輝子
 上田ひとみ
 内田志津子
 藤井 智史
 木本 朱夏
 三宅 保州
 村上 玄也
 川端 六人
 萩原 狸月
 渡辺 富子
 山岡富美子
 油谷 克己
 清水久美子

インバンドとまどつている京の街
四島のそろばん弾くプーチン氏
電車内お国訛りが気にかかる
英会話つい顔を出す国訛り
ありがとう平和の国に生きて喜寿
この国の八月はまだ終わらない
お隣の国の理屈を持って余す
夜ごと夜ごとアリスの国へく老母
借金が多い順ならトップ国
神様が仲良くせよと国つくり
蛇口から飲み水が出る良い日本
わが国の戦争知らぬ人がふえ
国籍にこだわっている野菜室

藤原 大子
内藤 憲彦
山下 純子
敏森 廣光
初代 正彦
鈴木 かこ
片山かずお
田中ゆみ子
内藤 憲彦
前 たもつ
矢倉 五月
前 たもつ
関 よしみ

住

遮断機の向うが見えぬ拉致の国
戦争も平和も語る日章旗
山紫水明日本に誇れるものがまだ
飢餓のない国で食料腐らせる
国境を越えてひとつになる五輪

山崎 武彦
山根 妙子
安土 理恵
小野 雅美
荻野 浩子
宇都満知子
鈴木いさお
中島 一彌

地

この国が好きこの国で骨埋める
天
国境を自由に行き来してる風
軸
国境を越えて頑張る女子ゴルフ

兼題「表情」

宇都満知子 選

再検査しますと医者は無表情
勝ち負けの表情豊か力士の背
目が座る何か言いたい顔をして
夏が好きですと輝く茄子キュウリ
シルバー席ですよ無表情のスマホ
メシフロンル顔で言うのはやめてんか
よく笑う仮面をつけて朝を出る
嘘ついたね鼻がピクピクしているね
こめかみを押して表情整える
令和のはずが国の表情とがり行く
理屈抜き顔はホの字の進次郎
指名手配見れば見るほどワルの顔
虫好かんあちらも同じ思いの日
しおらしい振りした日替りの仮面
表情だけで人物語る名人芸
老いてなお表情に夢溢れ出す
後進へ譲り表情丸くなる
ママの笑顔見たくてちゃんとお片付け
トランプの顔を世界が覗き込む
無表情内に大志を秘めている
待つ人に表情がある雨の駅
嬉しくしゃくしゃになる亡父でした
表情筋緩むひまわりの笑顔

森松まつお
上山 堅坊
福田 好文
新家 完司
荻野 浩子
大久保真澄
片岡 加代
澤井 敏治
上野多恵子
平賀 国和
初代 正彦
中島 一彌
楠井 輝子
中村 恵
藤村 亜成
山口弘委智
内藤 憲彦
能勢 利子
酒井 健二
齋藤さくら
米澤 俣子
森口 美羽
小島 蘭幸
藤井 智史

住

38℃地球があえぐ声がする
この町の表情があるごみ置き場
空の顔海の機嫌を見て船出
表情が見えぬメールの落とし穴
女ですもの扇子でかくす大欠伸
苦しみはみな消え去ったデスマスク

木藤こみつ
山岡富美子
田中ゆみ子
川端 六次
木本 朱夏
西出 楓楽
山下 純子
片山かずお
藤井 智史
阿部 俊八
藤井 宏造
水野 黒兎
中堀 優
中川ひろ介
前 たもつ
山田 葉子
長川 哲夫
平井美智子
中島 一彌

地

泣いた笑ったスマホに溜まる孫の顔
天
言葉の眉で笑ろうて眉で哭く
軸
掛かり付け顔を見ながら聴診器

兼題「もつと」

三宅

保州 選

遣りたい事もつとあるからまだ死ぬ
俺の子だもつと勉強出来るはず
生きたけりやもつと溜めよと国が言う
止められるもつと飲みたくなるお酒
ハードルを上げ世界新近づけよ
したいこと行きたいとこがたんとある
二千万足った足らぬと内輪もめ
金持ちになるほど金はもつと欲し
ざくざくと貯まればもつと欲しくなる
もつともつと食べたかつたと戦中派
顔もつと上げて青空手に入れる
酒蔵を巡り蔵ごとほしくなる
もつと綺麗になつて逢いたい人が居る
もつともつと大きかつたと魚拓見せ
もつと降れ彼女と同じ傘の中
知らぬ間にもつと進んでいた二人
あの時にもつと事情を聞いてたら
いくらあつても邪魔にならないのがお金
昨日よりもつと好きだとラブコール
もつと診てパソコンよりもぼくのこと
顔中を口にしせがむツバメの子
地獄まで落ちたらもつと楽になる
お前ならもつと出来ると愛の鞭
後期ですもうがんばれと言わないで

石田ひろ子
福田 好文
柿花 和夫
永田 紀恵
本田 智彦
江島谷勝弘
酒井 健二
藤井 則彦
川端 六次
緒方美津子
小野 雅美
大久保眞澄
木本 朱夏
鴨谷瑞美子
松岡 篤
柿花 和夫
米澤 俊子
大浦 初音
上田 和宏
斎藤 隆浩
大浦 初音
吉村久仁雄
萩原 狸月
山田 葉子

手も足ももつと伸ばせる風呂がいい
もつと寝めよう喜ぶ顔が見たいから
愛してるもつと言いたい言われたい
もつと飛ぶ勇気があればチャンス来る
もつともつともつと叫ぶ独裁者
老いてなおもつと上げたいテラシー
もつと長生きして欲しかった鶴彬
欲望のサイクル抜けて足るを知る
もつともつと地球大事にしなければ
脱皮してもつと大きくなる挫折
金貯める癖は生涯直らない
じくざく歩いて世間もつと知る
これ以上なかが欲しいと言うのです

佳

もつと生きていて欲しかった人ばかり
騒がれずもつと眠っていた土器
もつとからむくむく欲の塔になる
もつともつともつともつと尽きぬ欲
もつと水もつと水をと原爆忌
人
僕の背にもつと凭れていいんだよ
地
戦争がなければもつと青い星
天
にんげんはもつと賢い筈なのに
もつとお聞きをしたいのですが診断書

川端 六次
上野多恵子
平松かすみ
藤田 雪菜
木本 朱夏
西出 楓楽
鈴木いさお
木嶋 盛隆
能勢 良子
中島 一彌
酒井 健二
山本希久子
上田ひとみ
米澤 俊子
初代 正彦
小山 紀乃
阿部 俊八
藤井 宏造
中村 恵
山野 寿之
新家 完司

兼題「位置」

小島

蘭幸 選

図書館の定位置に居る午後三時
孫の初舞台夫婦もかぶりつき
定位置がやはり落ち着くとこいしょ
記念写真いつも美人の側に居る
位置情報でバレてしまった立ち飲み屋
位置に着いた時はウサギの横だった
マドンナに真ん中の席空けておく
なにか変へソクリの位置ずれてる
たくさんの人と出会えるポジションだ
立ち位置が変わると新しい視界
女ひとりの店に盛り塩定位置に
位置変えて苦手意識が消えてくる
最後までマイクの位置がずれたまま
現在地まだ見えなくて草を刈る
定年後妻のうしろに僕が居る
リリー役いつでもこなせたらいいな
挑戦をするには丁度良い位置だ
定位置に僕をサポートするスマホ
立ち位置を少しずらして守る若い
夫婦円満ほどよい距離が命です
君という愛を感じる位置に立つ
臥す妻にテレビの位置を変えてみる
いまボクは北緯三十五度に立つ
愛犬よりもひとつだけ上にいる

石田ひろ子
初代 正彦
飛永ふりこ
村上 玄也
村田 博
大久保眞澄
大久保眞澄
永田 紀恵
新家 完司
荻野 浩子
矢倉 五月
藤村 亜成
上野多恵子
鈴木 かこ
齋藤さくら
山田 葉子
山岡富美子
山本希久子
森田 旅人
敏森 廣光
藤井 智史
柿花 和夫
水野 黒鬼
宇都満知子

目鼻立ちクレオパトラと同じ位置 能勢 利子
 遠花火北斗の位置もあの辺り 鈴木いさお
 そんな所に隠れちゃ君が見えないよ 井丸 昌紀
 向日葵も蝉も定位置夏盛り 山岡富美子
 立ち位置が定まる真つ直ぐに伸びる 居谷真理子
 安心は鼎の位置に父がいる 中村 恵
 あなたからあなたになつてからの位置 川端 一步
 無位無官でも引き立ててくれた妻 清水久美子
 今どこにいるかがわからない梅田 片岡 加代
 泣きほくろ涙の通い道にある 木藤こみつ
 父の位置死守しています風呂掃除 伊達 郁夫
 目と鼻の位置が少し悪いだけ 鈴木いさお
 早い者勝ちだとネコが動かない 島田 握夢

佳
 鉛筆が二本 私の現在地
 空見える位置に介護のベッド置く 西出 楓楽
 手が届く位置に小さな辛を積む 吉村久仁雄
 路郎読本書棚の位置を譲らない 澤井 敏治
 気を付けの形で父の八月忌 平井美智子

人
 花嫁は斜め四十五度の美女 山根 妙子

地
 バス停が見える窓辺でモカにする島田 握夢

天
 眉間には春をとまらせたものだ 居谷真理子

軸
 かすみ草の立ち位置が好き妻が好き

句会 燦 燦

七月句会を読む 板垣孝志

地酒提げておいしい男やってくる 鴨谷留美子
 お聖さんとカモカのおっちゃんを思い出す 奥澤洋次郎
 休む理由見つからぬから靴を履く
 架空の叔父叔母の葬儀もネタ切れ、火事つてのものなア
 いよいよか今聞いたこと忘れてる
 言った相手も忘れてる可能性があるありますよ
 土佐生まれと聞いてぐい飲み用意する 能勢 良子
 茶碗に井、コップ、グラスの類をあわてて隠す
 いい話ロールキャベツにいられてある 澤井 敏治
 酒のツマミには向かないけれど 西澤 知子
 今のとこ妻は一人で足りてます 伊達 郁夫
 持て余すよりはマシ。家内安全・幸甚至極
 毎日が休みで曜日分からない 敏森 廣光
 『笑点』のテーマが聞こえて・・・日曜日か
 喋るのも面倒くさいのです今 森松まつお
 読むのも面倒くさいのは金融庁の報告書だそうで
 仏壇はないが心に仏様 木藤こみつ
 埃だらけのお仏壇より、心の中の仏様はピカピカ
 半端ない覚悟で返す免許証
 足を挽かれる思いだが、他人に迷惑は掛けられぬ
 苦悶していたのか真つ白なページ 永田 紀恵
 長年続けて来た日記にさえ、何も書けぬ日がある
 春落ち葉ひとりを生きるころろがけ 森中恵美子
 春落ち葉に諸行無常の趣が漂う
 たむらあきこ

花の種

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります
楷書で誤字のないようお願いします
編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

夕闇が迫る折りの形して
独り居の闇を勞う月見草
理由なき差別に泣いた闇の日々
闇市を知つて怖いものがない
闇が好きすぐに悪さをしたくなる
許しますあなたを闇の中
拉致の子等帰還は今だ闇の中
研ぎ澄まし暗闇の中見えるもの
目が慣れてうつすらと今の立ち位置
絶対闇にさせるなカケとモリ
年金のお先真っ暗らしい国
安倍さんの種の育てに依怙蟲眞
いただいた拳の中の花の種
花の種蒔いて名札の幼い字
しくじつても笑いの種に出来る今
一言が火種一日会話なし
この花の種が欲しいと予約する

満作 美籠 志津子 克己 としお 雅美 隆昭 大輔 満知子 勝弘 行兵衛 郁子 ゆみ子 ひろ介 俊雄 公平 シマ子

種まく人背の太陽に守られて

自己主張し過ぎじゃないか枇杷の種

遅さこぼれ種から教えられ

笑てるが悩みの種はアンタやで

まだ心揺れておりますコンサート

国民の心が揺れる二千万

月明かり二人の逢瀬包み込み

再婚を問うと仏の火がゆれる

子の書いたドナーカードに揺れる親

雨に揺れてる坊主口惜し泣き

憎いなあ大阪弁のプロポーズ

会うだけで胸キュンとなる憎い人

疎まれて憎まれてまだ生きてます

憎らしい毒舌だけど底に情

好きな人だったと気付く憎い人

針千本飲んででも許さへん小指

玉の輿憎い小姑すく嫌み

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

慈母観音時には夜叉の顔となる

スパイスを律儀な脳に振りかける

ひまわりになつてお日様近い回す

「母」を詠む句は字余りのままでいい

思考力鈍らぬように振る胡椒

スパイスはちよつと辛めな妻の愚痴

令和へのパスに乗り継ぐスニーカー

平成の虹を令和で掴み取る

縄文の土偶に母の香りする

一歩 福貴子 妙子 まつお 直子 美世子 舞夢 久美子 五月 里子 芳香 重信 いさお ふりこ 昌紀 進 (奥五月)

間に合つた握り返す力しつかりと
昼行灯はめめているかと思つたわ

母親似昔ガツカリ今うれし

母なれば嘘も信じたふりをする

令和には心安らか暮らしたい

ほろほろになるまで令和煮詰めます

令和になつても何も変らぬ老の一日

子防注射まだだと知らせる母子手帳

母さんへ送れなかつた感謝状

ぶつぶつと母の意見は唐辛子

心の片づけ食べるしゃべるのランチ会

この母じゃなくちゃ私は駄目だなあ

千年を目指して芽吹くこぼれ種

スパイスを少し効かせて意見する

無職でも家事はそこそこキープする

心地良い輪にとっぷりと果報者

年金と孫の笑顔がたからもの

オシッコが近いおぬしも同志だ

寄せ書きが男一人を奮起させ

麝香焚きワインのホットといきますか

川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ報

袋かけすんだ夜半の大風

風よりも雨が気になるナスキュウリ

増税の風が近付く音がする

ゆつたりと暮らし続けてよく肥り

走り過ぎ余生ゆつたり末期まで

ゆつたりと出来ぬ私の影がある

久美子 吹喜 孝子 柳枝 初枝 ひとし 小とみ 英子 龍馬 きよし 真由美 規子 のぶし 黙人 京子 ふさゑ 花峯 霜石 吞舟 和香子 義人 照彦 龍枝 貴恵 久芽代 久江

新緑に染まりゆつたり山歩き
公 惠

女房に負けた振りすりゃ円満だ
紀美恵

負けた子の事はしつかりコビーする
三津子

負けた子を温め直す母の膝
重利

今の平和犠牲払った負け戦
悦子

雨に負け風にも負ける膝小僧
完司

お日さまに負けてごろんと昼休み
石花菜

手帳にはめほしい女性名を二人
清

古手帳デートの日付セピア色
たけ代

買ったが使ったこと無い手帳
美美子

へそくりは手帳に書かぬようにする
玲坊

見せられぬ手帳は闇の一丁目
滋

亡妻の身障者手帳はお守りに
重忠

離さない薬手帳と保険証
美知江

ひとり旅県民手帳保険証
紀の治

シャボン玉いっぱい湧いてくる手帳
芳光

手帳から食み出るほどのスケジュール
節子

窓の風知らせる今日は豆ごはん
くにこ

はびきの市民川柳会(大阪)中川ひろ介報

呼吸するようにあなたと生きている
かこ

血の雨を降らせてならぬこれ以上
みつこ

詰襟の第二ボタンにあるロマン
壽峰

大軒急に止まった一分間
ちづる

詰問の慈悲逃げ道の思い遣り
欣之

詰め放題へ挑むおんなのど根性
いさお

ひと呼吸置けばもめずに済んだのに
大子

寝て無呼吸起きて過呼吸息が切れ
久仁雄

サミットの豪華顔ぶれ見てみたい
フジ

深呼吸してから入る露天風呂
清

粋がつて土砂降りの中濡れて行く
高鷲

置き傘が番傘だった昭和の日
かつ美

封筒に詰めた逢いたい息づかい
瑠美子

山ひとつ越えて大きな深呼吸
専平

吸う吐くを整えヨガの心地良さ
久仁子

詰められた心危い導火線
惠

詰め込んで身につくかしら教育が
千鶴子

与野党が年金課題一致せず
紀雄

雨垂れを聞いて安らぐ日もありて
洋一

疲れから呼吸乱して座る昼
雄太

行き詰まりあなたの愛が助け船
一文

新緑はますます深くなりたね梅雨
正義

昇り詰めた先に孤独な椅子がある
泰子

十年は呼吸するぞと竹を踏む
さくら

深呼吸借りた命と今気付く
ひろ介

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

無礼者フェイクニュースを楯にする
四郎

庭遊び糸とんぼには川とんぼ
實

四十年前の部下から付け届け
蜂朗

深まった疑惑も野党責め倦ね
高明

和歌山三幸川柳会 西川 千鶴報

子供には近道などは教えない
和子

親の傘飛び出したくて反抗期
敏照

血の雨がどこかで降っている地球
保州

両川 無限選

小數点以下がいきなりものを言う
重利

姿見に問うわたくしの裏表
幹子

生きているいいなトマトの赤光る
みつこ

雨上がり少し素直になつてみる
星雨

ふところの深いところで研ぐ野心
惠美子

逆光を浴びて浮かんでくる微罪
かこ

無洗米そのまま手抜きしなくても
紀惠

のびきったパンツのゴムは僕のように
益子

知らぬ間に一人浮いているのに気付く
節子

いつまでも君は青くてまっすぐで
ひとみ

佳句地十選 (8月号から)

緒方 美津子 選

生きるっていいなトマトの赤光る
みつこ

月までもスキップで行く有頂天
英博

答えのない難問たんと抱えている
まつお

誤字脱字だらけの絵馬が揺れている
武人

記念樹の肥料になつたなみだ雨
ひとみ

折るとは心を洗うことだろう
節子

知らぬ間に一人浮いているのに気付く
節子

さがしものみつけるまほうのステッキで
美智子

板一枚下は多喜一の海である
か

下を向くよりも大空を見る余裕
一男

転けそうで転けぬ子供、弾む足
 透明な何で何でが乱反射
 コンビニの無駄を買つてる俄雨
 子供でも分かる話を通じない
 薫風へ偶のスカートリフレッシュ
 たまさかの旅に恵みの空の青
 なんて何で聞いて成長する子ども
 旅人の顔で岬に立ち尽くす
 リフレッシュさせて下さい初夏の海
 打ち返す波に情性を叩かれる
 空と海がいの青を競い合う
 平成に葉は喜んで閉じておく
 性格が親に似てなくほっとする
 地球病む世界の手待つ飢餓の子等
 呱呱の声待つ平成いや令和
 悩むまい前へ進もう明日がある
 山里の暮らし飛行機雲の下
 村中の風を集めて鯉のぼり
 子も親になって話が合い始め
 明日へとつなぐ絆の経を読む
 括弧からはみ出してている人間味
 子の悩み聞きたい同じ目の高さ
 チャイルドシートに玉のような子を乗せる
 紀淡の海眺め大きくなれそうだ
 子に託す夢は消えても子は宝
 颯爽と親を忘れて独り立ち
 子供から教えられてる流行語
 波布茶のむ昭和平和なつかしむ

まき 知香 ひろ子 准一 宏枝 一世 一雄 当代 富香 幹子 日出男 俣子 康則 弘子 かず子 菜摘 次根 純子 智三 昭枝 八重子 あき子 明子 ダン吉 明宏 よし子 一步 美枝子

椎の木が覚えてるよわらべ唄
 嬉しくも寂しくもあり子の巢立ち
 古代よりずつと変わらぬ子は宝
 潮の香に前頭葉も躍り出す
 川柳塔なら 大久保眞澄報
 人間の真似だけはせぬ豆狸
 ちびっ子の笑顔眩しいランドセル
 ちびっ子が大人も負けそな意見述べ
 孫からのかなの手紙にほっこりと
 夕暮れは少しさみしいやんちゃくれ
 透き通る無垢の瞳は無量大
 ちびっ子の男女混浴五歳まで
 ちびっ子とからかわれたが今ノッポ
 大スターうちの双葉に兆し無し
 ちびっ子が一人もない老いの村
 ちびっ子の瞳が時を忘れさす
 ちびっ子が一番怖い本音言う
 ちびっ子を今日も待ってるスベリ台
 端のない繰り言生きている証し
 ざくしゃくの端をジョークで裏返す
 虹の先端渡れば君に逢えますか
 遠い恋記憶の端で光ってる
 地球儀のその端っこに僕がいる
 端役にも汗を流して今日の酒
 端っこが高い天井支えてる
 消しきれぬ青い炎を抱く嫉妬
 好きですと青いターバン僕を見る

エイ みつ江 俊介 千鶴 恭昌 崇明 展代 理恵 寿之 純子 光堂 優 樞 行久 成子 敬子 万紗子 國治 ダン吉 堅坊 文聡 恵美子 盛隆

水煙に泳ぐ天女の青い空
 子の青い正論目から鱗落ち
 爽やかな青に嫉妬をしてみましょう
 青い目の嫁に日本語注意され
 子や孫に小遣い貰ったことが無い
 年金でなんと暮らして生きられる
 何もかも足して二で割るまあいいか
 商談へ手を打っているこらへん
 正論をゆるめた一日まあいいか
 封印をゆるめた一日まあいいか
 五〇〇円入れてしまったお賽銭
 ええかげんやけどし気がええからな
 憶れていた昔もあるしまあいいか

京都塔の会

山田 葉子報

甚之市 のぶよし すみえ 史郎 萌子 賛郎 和夫 美智子 江里子 弥生 貫一 勝弘 ひろ介 欣之 文代 哲子 ふりこ 朝子 福子 弥生 公延 牛延 紀乃 元一 求芽 弘之

小遣いをちやつかりせしめた里帰り
ぶりつ子でちやつかり歳を忘れてる
拝借した本返せずそのまんま
皆見てるスマホが神に見えてきた
拝聴をしてたら眠くなる訓話
積ん読をしても拝読したと言っておく
拝啓で始まる父の長い文
拝啓の後は空白三日間
歎びと苦しみ共に知るポトル
今日の悔いポトルの底で揺れている
拝まれてない袖を振る母でした
京の四季どこへ行つても人に酔う
あれこれと神頼みする五円玉

竹原川柳会(広島)

吉田

太虚報

英 旺
葉 子
忠 子
弘 子
かずお
則 彦
万 紗子
宏 子
弘委智
洋 志
美 津子
満 子
正 彦
寛

桜散る涙の中に散るといふ
一生分の涙を貯めている壺よ
更生は母の涙の力なり
喪が明ける一氣に涙溢れでる
野菜達きちんと並ぶ父の基地
雨さんご同級生の計報聞く
どろんこもへっちゃら野生児の次男
ピョウピカ川でおまつりほたるくん
きゅうりをたべますかっぱになつたらね
三歳ちか

わかあゆ川柳会(高根) 松本はるみ報

ほとほりは覚めないままに持つて逝く
下校する鍵っ子の足重たそう
数々の不安を除く鍵ひとつ
屋敷跡栄えた頃の物語
義理堅い人で過疎地の人格者
感動をくれる白衣の逞しさ
かつ子
はるみ
恵美子
昌
安 子
ハル子
はるみ
恵美子
昌
安 子
ハル子
はるみ
恵美子
昌

ブラザ川柳(大阪)

穂口 正子報

七十四年骸骨と果て睨む閻
築かれた道歩み出された稚子様
気晴らしの旅が緊張緩和する
火の車背負つてつくる台所
出来映えのいい句聞きはれうっとりす
仲良く永頑固ほどほどのんびりと
四島で戦争知らぬ子がほやく
「お茶しない」と軟派うろつく戎橋
千枝子
求
久美子
園子
清乃
正子
正子
清乃
園子
久美子
求
千枝子
修
淳司

七十年コツコツ溜めて二百万
我家には誰も戻らん夫嘆く
茶柱を妻の茶碗に入れてやる
プラごみを減らし地球のエコ努力
幸福を築くつもりでローン組む
お話があるのと妻が正座する
夏空がガラス窓から覗いてる
黒兎報

ほたる川柳同好会(大阪) 水野 黒兎報

アイステイアメリカ人になつて飲む
レトロな喫茶レモンスカッシュ恋の味
井戸の水しつかり飲んだ少年期
カチ割に注いだビール甲子園
生ビール少し乱れるひとがよい
長い眠りレコード達もCDも
かえりみれば耐えた戦後は長かつた
発車ベル急げと背中長く鳴る
言い勝つて長い沈黙には負ける
夜の川光るホテルのプロポーズ
残り香にむせて寝られぬ夜の床
片想い判つていても後をつけ
さよならはまだ言わないと淡い虹
彦星の櫓をこぐ音を聞く夜明け
梅雨未だ上らぬうちに蝉が鳴く

川柳ささやま(兵庫) 北澤 桐民報

あとわずか自由に好きに生きていくかほる
愛だけはレンタルでない披露宴 (北哲男)

政 夫
和 代
弘 光
克 三
五 月
悦 夫
一 彌
純 子
奈 津子
一
守 啓
堅 坊
桂 子
久 子
一 弥
黒 兎
順 子
則 彦
信 男
美 佐子
春 代
正 子

まだ呑める酒へ心底ありがとう
つまらない日々の生活ただ食べる
紫陽花の花も折れよと梅雨激し
父の日に妻からもらった吟醸酒
半夏生タコの八ちゃん厄日です
老々介護体調崩し増す不安
雑草の根性まねて生きていく
誉め言葉勇気百倍やる気湧く
何時の世も変らぬ事件令和にも
青田には生命をつなぐ白い鳥

南大阪川柳会

松岡

篤報

稠民 さゆ子 善輔 剛 重男 喜弘 良子 照代 美智子 哲夫

恋しいなあ我家の僕の指定席
癌手術まるで刑場行く気持
点滴のしずく命の重さ知る
金欠病面会謝絶入院中
入院の妻から家事の指示が来る
たんぼほの綿毛のような旅したし
二千万ふわりふわりと飛んで来ぬ
ここからはふわりと生きてゆく余生
宇宙遊泳を楽しむたんぼほの綿毛
居眠り上手ふわりふわりと老いていく

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

修 一歩 あや子 亜成 直子 楓 乗 篤 克己 たもつ

事件後の詫びと釈明今日もまた
フランスのメトロに乗ってララララ
80・50扶養している子が介護
今日も無事晩酌の友冷やっこ
大家族から元の二人に出る吐息
サンプルはもつとでっかい海老だった
補聴器が嫌なニュースを良く拾う
恥の無い世界で暮らす物忘れ
退院へ元気元気と試歩の杖
はて何に効くのだったかこの薬
千段を登りご朱印遍路笠
ウォーキング今朝は布団で雨の音
参院選試しに僕も出馬する
わだかまり解けて親父の背流す
エエもんは除けて残りをお裾分け

終活でやつと悟った欲の数
梅雨が来て無理やと悟る傘と杖
しゃあないな免許返納しようかな
悟られぬよう振舞い狙う親の金
父の機嫌悟れと母のテレパシー
人の振り見つめて悟ることばかり
悟らずに生きてるうちが花だった
悟らずに迷い迷って逝きそうだ
百歳になると悟れるのでしょうか
自分は自分この世のことはケセラセラ
屋根瓦落ちて追い討ち俄か雨
トランプの厳しさいずれ日本にも
厳しい顔やつとゆるんだデスマスク
荒れる子の心見えずに持て余す
子が荒れる思いあまって悲劇起き
荒れる日も四季に恵まれ誇る明日

郁夫 和雄 勝弘 弘子 志華子 柳伸 実 峰子 東風 国和 柳右子 博 昌紀 紀 ひさ乃 ルイ子 弘委智

恥ずかしいと思うあなたがかわいくて
試乗車に乗るのも恐い高齢者
タンカーが燃えてる嫌な気兆しだ
試し切り薬人形が可哀相
肩の荷をおろしこれから花咲かせ
育毛剤試しているがまだ生えぬ
詰襟の写真紙面に載せる闇
運試し初めて買った宝クジ
補聴器を何個試せよほほ同じ
おひとりさまの窓に小さな明り点ぐ
勘定の時にトイレに逃げる奴
ややこしい好きも嫌いも女偏
あちこちから頼まれたけど票ひとつ
自動車を自転車に替えて走ってる
二千万友が金カネ言い出した
厳格な父が握った塩むすび

和子 雄次 厚江 柳明 初音 新録 英坊 千賀子 高 千賀子 公子 五月 紀 恵 純 正彦 健二 紀華

通り抜けてきても先は危険かも
負けん気も使いつくした戦中派
終着に向けて歩みを休まない
追い付けぬ背中苦々しく眺め
風の盆恋しい人に逢いに行く
ストレスが消えない内に又一つ

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

富柳会(大阪) 関 よしみ報

覗き見た棚田の水面その宇宙
傘持たず降れば他人を当にする
宇宙船一步近づく未来地図

雅美 まみ子 三樹夫 遡行 美千代 かつ子 良恵

柵を白紙に戻す重い紙

賞味期限は私が決める鼻と舌

神秘ですりユクユク何故乗ったか

白紙にはならぬ言葉とその重さ

本当の自分が見える崖の縁

な忘れそ男一途の火の恋を

宙を舞う夢トランポリン跳ねてみる

あじさいが風情を醸す路地の梅雨

愛一字白紙に凍と筆の跡

言い訳がもう尽きはてて脳白紙

爪痕に恋の未練がこびりつく

ずぶぬれのノラ猫空をあおいでる

惜別の明日から白い一ページ

絆という見えぬ確かな小宇宙

一片のバズル昨日が埋まらない

白紙から作品になる一画目

白紙一枚鶴を折る兜折る

真っ白な日傘広げて初夏を飛ぶ

魚市の喧嘩紛いに飛ぶ符丁

おもちゃ箱夢を育む小宇宙

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤

宏之報

暗闇に迷われまますなお星さま
七夕の短冊に夢今も書く
七夕まで待てぬ織姫嫁に行く
少子化で七夕まつり廃れゆく
短冊に願ひ書くには遅過ぎた
七夕に大きな願ひもみじの手

雄大 風露
由紀子 智恵子
龍枝 日出子

大漁旗金子みすゞの童謡に
ボケ防止童謡クラブつくろかな
納得はしたが同意はしていない
朝はパンしかし日本はコメ余り
日本一駄洒落の知事のある誇り
正直はいいが詐欺師に狙われる

よしあき 好幸
宏章 孝子
弘子 盛桜

追うものがあって明日も起きられる
日本が乗るプレートというまな板よ
元気な振りできるうちはまだ元気
風呂敷が自由奔放早がわり
お互いの長所探して添い遂げる

俊久 令位子
多美子 宏之
美穂

由夏 文重 伸雄 田鶴子 澄子 正治 隆充 壽峰 一文 高鷲 清 常男 かこ 武人 恵 よしみ 欣之 寿之

七夕を飾る家なし過疎の村
釣り上げた俺とよく似たオニオコゼ
釣られたか釣ったか仲の良い二人
日本海烏賊釣る舟は風物詩
コマシヤル釣りれて無駄なお買い物
釣った鮎ピチピチ聞てこゆ八十路身に
消費税上げて何がまた上がる
参院選それでも何が変わるのか
卒寿過ぎそれでも免許更新し
続かなかなそれでも決意ダイエツト
見合してそれで良いかと迷ってる
やさしさの手掛り表裏ない心
手掛りは砂の器の中にある
山ほどの手掛り闇に隠す国
手掛りの詩のかけらのある左脳
岩登りつかみ損ねてぶらさがる
拉致家族手掛りもなく過ぎて行く
なつかしの人の手掛りないかしら
腰痛の手掛り掴むストレスだ
手掛りは内緒板門店のショー

隆昌 完司 萩江 醉芙蓉 美知江 恭子 麦青 鬼一 重忠 祐子 明友 紀美恵 石花菜 次男 宣子 大鯨 茂夫 玲子 けいこ 照彦

まずビール落ち着くまでに二、三杯
昼寝してたたき起こされ晩飯だ
夏バテ知らず支える母の紫蘇ジュース
兎追う人ももう居ぬ過疎の村
農作業昼寝が過ぎてはかどらず
ゴロゴロと昼寝邪魔するどんどろけ
退職後三食昼寝既得権
昭和は童謡アニメ歌う平成
夕飯は夕やけこやけ聞きながら
宴会の前は必ず「ハブ・エクス」
女房の御機嫌次第ワンカップ
童謡は御高齢者のものとなる
空き缶に一円ためて振ってみる
褒め上手しかながらで落ちがある
しかしよりふーんに絡む謀り事
ドリンク剤が頭に欲しい物忘れ
二次会はコーヒーでよい女子五人
童謡を認知予防に歌います
じたばたは出来ぬがしかし口達者
母さんといつも歌ったふるさとだ
ポランティアドリンク一本泥の海

すみれ 文道 茶子 ゆたか 弘六 重忠 照彦 ゆりこ 綾子 完司 恒 小鹿 蟹郎 草文 孔美子 満 英子 京 かおる みさ子 一平

賓客はブータン国の王様だ

梅雨さなか今日も雨かと独り言

風呂の湯がちよっとこぼれるリッチです

枯れるのは止めた景色が美しい

大切な影に守られ今日がある

山ぼうし今年も咲いてのどかです

トランプは手抜きババ抜き孫の勝ち

また地震自然災害いかにせん

折り折りに電話をかけて天気知る

船を漕ぐ会議は踊る場はしらけ

ミスしても謝らないで威張ってる

八十路過ぎ心は若さ保ちつつ

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

若い頃何をあんなに笑えたの

サミットはばんめし食べただけでした

インバウンドに日本の良さを教えられ

思いやる気持が薄くなつていく

仕切りたい人だテールど真ん中

テールの傷五十五年の戦さ跡

無理をして笑ったような故父の遺影

無理ですかあなつたの杖になりたいの

もう無理と言いつつ粘るバイキング

絶対無理と言われてやる気出る

無理をしたあの頃があり今の俺

誤字を承知だけど正字が書けません

これからを洗めのお茶で思案中

雨奇 久直 瑞枝 千代 恵子 菜々 美智子 登美枝 治代 汪 紀の治 美草

キャバクラの帰りは恐い通りゃんせ

大丈夫と言えばトラブル消えていく

洗いとは言われたくなく無理をする

洗好み派手さはないがよく似合う

派手よりも洗みの似合う京の街

あの人に来てるぞみんな気をつける

臭い痛いトラブル絶えぬ足と靴

かすみ草引き立て役を自認する

人間の末路はみんな風になる

笹の葉が重たい願ひ背負っている

喜怒哀楽どつぶりつかり五十年

緑キラキラ脳細胞が増えそうだ

船とむち上手に使う苦勞人

体調をまず考えて出す歩幅

仁王様無理に笑わずその顔好き

赤ワイン洗みを洗いと言う勇氣

食卓に夏があふれるサラダ盛る

川柳大阪 山崎 珠生報

外貨でのカード決済不安です

婆ちゃんにばば抜きしよと五歳児が

参院選年金カード争点に

柳会がカードを無くすお聖さん

愛というカードの磁気が読み取れず

現金派カードは苦手おっかない

音痴からもっと練習しなさいと

七夕に音痴が治る願ひ書く

音程がずれて華燭の座が和む

真桜子 利子 浩司 光子 千賀子 美津子 武彦 野鶴 正彦 弘委智 いわゑ みよし 迪 邦男 伯備 紀乃 かよこ 勝弘 紀雄 克己 雅美 和 芳香 志津子

方向音痴わからんここには行きません

音痴がなんだ五体揃っているやんか

顔立ちは八代亜紀だがめっちゃ音痴

方向音痴だが恋路は迷わない

音痴だと気が付かず堂々と音痴

愛したらとことんのめり込むタイプ

この卵七年越しで蟬となり

生命の起源掘り下げるハヤブサ

音痴でも顔で点数かせぎます

岩美川柳会(鳥取) 山下 節子報

リハビリへ一歩一歩の杖の音

酔っ払い一人叫んで帰る道

手話介護静かな中に叫びあり

雑魚だつて群れて叫べばきつと勝つ

平ら道又けつまずき照れ笑い

鉄を振るこれでしつかりリハビリに

よつばらい声はデカイが意味不明

なにくそと歯を食ひしり歩一歩二歩

リハビリで流す涙が明日染く

出しやばらさず平に行くと杭打たれ

九条が守つてくれと叫び出す

リハビリで直らないのは恋病い

民の声聞いて下さない総理どの

老い重ね平らな道がありがたい

二千万どうする民の叫び声

読み書きそらばなりリハビリありがたい

美世子 一歩 まつお 堅坊 満知子 朝子 珠生 賢子 重忠 弘六 一平 美恵子 たぬ 葛子 幸安 敏子 雅女 真理子 彰夫 千代 一瑤 一粹 凱柳 蟹郎 節子

川柳ふうもん吟社(鳥取)両川 無限報

花愛でる心美人になつてゆく
 美人だと言つているのは夫だけ
 美人には会えずじまいの美人の湯
 美人には飽きるが妻はまだ厭きん
 わめく子も美人を見たら落ち着いた
 美人の湯信じて浸かる昨日今日
 私かしら別嬪さんと呼ばれたの
 別嬪も月日が経てば型くずれ
 美人薄命わたしや案ずる事はない
 口に手をあてて美人はオホホのホ
 美人には美人の悩みあるのです
 思い出をコピーできないもどかしさ
 ママ似だがパパのコピーとママが言う
 つまらないコピー人間ばかりいる
 コピー品鑑定出して赤っ恥
 中国にコピーと分るドラえもん
 記憶力おちて何でもコピーする
 コピーでもいいから愛の証くれ
 コピー機よお前の意見無いかい
 幸せがいつあったのか掘つてみる
 他人の痛根掘り葉掘りと問うてくる
 二千万無理だ黙つて穴を掘る
 タイムカプセル少年の夢掘あげる
 田や畑掘つて未来の種を蒔く
 穴掘つて埋めておきたい今の幸
 掘り起こす過去に言い訳などしない

何年ぶり青田目に染む汽車ポツポ
 古民家に触れて明治の音がする
 雨の道歩いて思い出を拾う
 海もいけど山の緑のいい空気
 古民家を棚田が映す月明かり
 母の血を受け継ぐナスを世へ残す
 古民家がりノベで化けてカフェになる
 長靴の美女に魚市場の活気
 蟹郎 一平 みゆき 美恵子 金祥 とも湖 隆浩 無 限

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

レトルトの旨さ見直すフライパン
 アスリート壁を乗り越えまだ挑戦
 よわ虫と言われて泣いた息子の成長
 願いごと荷重積載笹そつば
 壁のわら籠城に耐え飢えしのぐ
 そのごくりお酒でしたか美女ですか
 少しだけ若くなるまで化粧する
 国境の壁は己も閉じ込める
 転ぶなと祈る結弦の母となり
 握られた弱味ついでに甘えとく
 見直しへ試行錯誤の汗まみれ
 金持ちは黙つて金を貯めている
 七転び八起き化粧が厚くなる
 字の乱れ母の健康バロメーター
 転んだら右手でお金拾つて
 百歳を生き抜く時代急ぐまい
 てんとう虫か弱いよう毒をもつ
 晩学の壁は手強い物忘れ

公子 多美子 時子 英三 健二 多津子 歌留多 求芽 肇 敏昭 洋志 (岩)玲子 篤 久彦 正彦 美智代

恐妻家と言うが恐夫家とは聞かぬ
 右折苦手左折左折で速まわり
 すんなりと加齢ですねと医者笑う
 とときは百から七を引いてみる
 時どきは退いて見直す生き上手
 祝い客帰つて妻と熱いお茶
 秒と狂わず地球が自転する神秘
 正論を述べる気骨を見直され
 先達の壁は知る程高くなる
 弱点を晒せば仲間寄つて来る

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

もめ事もあつてわいわい生きている
 点字撫で普通に見える有難さ
 頼みごとするときはなぜか手を撫でる
 もう立てぬ老夫なででありがとう
 なまぬるい風に撫でられゾクツとす
 温暖化止めて次代へ青い空
 わび方が痛にさわつて又もめる

川柳塔わかやま吟社 小谷 小雪報

候補者をしつと見ている天守閣
 選挙戦だけはロボット役立たず
 十八才選挙に行く子頼もしい
 父曰く細かい事にこだわるな
 こだわりがきみの明日を消して行く
 親子だねこだわるどころまで一緒
 楽天家些細な事はこだわらず

則彦 宏子 千鶴子 耕治 美龍 武彦 黒兎 ヨシエ 見清 野鶴 笑子 正太郎 泰子 みちる 亜成 信子 薫 日出男 徑子 よしこ ちづこ 准一 なる子 タカ子

こだわりをすてると楽に生きられる
大安を選び入院したけれど

ほのか
保州
しず子
あきこ
秀子
小雪

料理にはこだわりあつて家の味
行き場のないこだわりをまだ飼っている

紀子
なおみ
京子
晶子
和弘
まさみ
あかね
富美子
知香
大輪
繁子
明
航太郎

こだわりを環境へとと言う地球
もういいかこだわりの骨抜きました

不意を突く隠しきれない国訛
監視カメラ隠しきれない悪事バレ

思い出のドラマを隠す砂嵐
隠し事してる夫はよく喋る

思ひ出のドラマを隠す砂嵐
隠し事してる夫はよく喋る

夕暮れに母を待つてたハーマモニカ
遠い日を抱く父さんのハーマモニカ

口紅はNGというハーマモニカ
まだ生きていたんだ父のハーマモニカ

泣いている岸の向こうのハーマモニカ
故郷を奏でる令和ハーマモニカ

ハーマモニカ吹いて少年期を手繰る
川柳塔さかい(大阪) 内藤 憲彦報

メデアから免許返納促され
バシバシバシヤ嘘を見逃さないメデア

メデアに取り上げられて傷がつく
芸術かエロかぎりぎりせめぎ合い

限界まで挑むな命あつてこそ

志津子
光雄
五月
みつこ
扶美代
満知子
唯教
倅子
ひろ子
敏治
世紀子
みつ江
廣子
満作
清
としお
さくら
輝子
敬子
恵
瑠美子
和夫
玄也
進
禮子
時雄
ゆみ子

ライバルの背中が遠いコンマー
ぎりぎりの生活妻が仕切つてる

これ以上飲めばボタンがちぎれ飛ぶ
年金が老いをぎりぎり縛り上げ

悔しさの歯ざしりリベンジの闘志
ぎりぎりまで辛抱しろと影がいう

ホスピスのいのち必死に耐えている
口実はいいのあなたに逢えたから

口実はいいのあなたに逢えたから
夏風邪で休んだ肌の小麦色

口実を先によまれて言い出せぬ
旅するに口実いらぬ独り者

口実を先によまれて言い出せぬ
起こるたび想定外と言ひ開き

ひょうきんな言ひ訳につい大笑い(歳)
近くまで用があつたと孫の顔

ぎりぎりの小遣い浮気など出来ぬ
年金暮らしギリギリですよ麻生さん

ぎりぎりまで合格しても有資格
弓なりに反つてうつつちやりに決めて

異国には飢餓ぎりぎりの子があわれ
ぎりぎり悲鳴あげてる背のチャック

ぎりぎりまで粘つて書いた答案紙
コンチキチ祭り燃える京の夏

古墳群満場一致機が熟す
郊外のマイホームにもキノコ生え
紅一点間違いないが喜寿の人

柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

騙された振りして今日を折り畳む
騙した月が今も私を離さない

父騙し欲しかった紅買つてくる
澄んだ目に騙す大人の目が濁る

短冊の胡瓜悪がるミニトマト
悪口が過ぎた舌にはまだぬめり

悪人も産まれた時はまあ可愛い
悪行の果てに朝めし作る今

あきらめの悪い糸ですチョンと切る
上げるのか景気を悪くする麻葉

ボジティブにおだてコロリで寿司たかる
コロリ死ぬ閻魔の裁き生き返る

ケンカしに行こうかマンネリに飽きた
今日も又喧嘩相手は鍵の穴

喧嘩する度に絆も深くなり
喧嘩してやつと本音がすけて見え

喧嘩腰二日三日は胃にもたれ
喧嘩小さな胸をふるわせる

大喧嘩止める男にあるオーラ
お頭が向こうをむいて笑っている

寝つかれぬ頭の中にチチロ虫
頭でつかち陰口聞いて奮起する

ばれてます頭隠してなんとやら
クリクリの頭待ってる夏休み

朋子
知恵子

六甲川柳会(兵庫)

奥澤洋次郎報

吠える犬負けじと吠える酔っ払い
吠えるのか泣くかハッキリしておくれ
ツイッター声なき声が吠えまくる
満月になると吠えなくなる私
議論なし対案なしに吠えるだけ
ほら貝で吠えてるような修行僧
行き先は地図ではなくて風に聞く
ハザードマップ我が家の避難ルート決め
東京五輪みんなおいでと招く地図
軽い話乗って地団駄踏んでいる
誰が決めた巨大古墳の前後ろ
長い列そうだ年金15日
どこまででなく行けるとどこまで行くつもり
はっとしてぞっとするこのもの忘れ
友の名を借りた言い訳二度三度
天空へハヤブサ2に折り込め
子報士も天の気まぐれまで読めず
天界にいかにいますや母や父
願ひ乗せ笹が流れる天の川
あれも逝き彼も逝ったか天仰ぐ
ほろ酔いは天国行きの始発駅
老いらくの恋に燃え立つ白い地図
呱呱の声に賭けております未来地図
汗流し手にした技はほんまもん

敏夫
ひとみ
盛夫
武彦
保雄
芳江
廣光
浩司
美恵子
千賀子
恭三
義明
和郎
克美
和子
道子
狸月
洋次郎
正彦
忠志
博

聞き流すだけでいいの愚痴聞いて
出来ないことは出来なくてよい生きてれば
どの毒にしようか今日の隠し味

弘
和宏
彰

あかつき川柳会(大阪)

磯島福貴子報

直角な意見に議論噛み合わせぬ
選挙前急に優しくなった安倍
何の罰巻き寿司一つ子を捨てる
強敵が相手で腰が引けている
待ち来たるいざや夏越の厄払い
告白は突然月が照れている
直角に生きてあちこち傷だらけ
行く道を照らす光を彬の句
性格は直角心平和です
照らすのは焼夷弾です燃える街
水茄子の艶は和泉の日の光
天の岩戸女神が踊る陽は昇る
強烈な日射しへひまわりの律気
モナリザの手にふれちゃった罰当り
一強と威張るな周り弱いだけ
直角の歩調に戦争の恐怖
憲法は衣更えなどする気なし
真一文字の唇にみる強い意志
直角を二回ひねって赤トンボ
百年安心国家的詐欺です
自分の弱さ知ってる人に適わない
青かった直角グレーの鈍角
照り返し厳しノルマの靴重し

直子
祥昭
直子
緑
秀夫
鈍甲
弘子
ダン吉
みつ江
清
武
義泰
ぼっは
浩子
秀夫
喜代志
ひろ子
喜八郎
いさお
茶助
紀雄
たもつ
満知子
克己

温暖化の罰天災半端ない
直角に生きて恥らうものはない
アスリート強い心が勝を呼ぶ
九十度マニュアル通り頭下げ
照れ臭いけど相棒に惚れてます
八村君バスケをてらす人となる
年金者怒の罰を下す時
ハンセン病家族の差別罰認め
照強小兵が沸かす名古屋場所
稲稔る為の日照りは我慢する
打たれ強さに時と場合あります
ハンセン病控訴しないと人気取り

惠美子
堅坊
和
里子
一步
優子
万作
五二
三郎
シマ子
信子
忍

川柳さんだ(兵庫)

村田 博報

煌めいていよう小さな花でよい
抱きしめて抱きしめられて人の情
嬬やかな女人本気の登山靴
新茶煎る少女が脱皮するように
方言の温さに惹かれ買う西瓜
夏空にどかり青春蘇る
義母よりも先に逝くなど妻が言う
殺し合いばかりしてて滅びない
争わぬ万の神がいる日本
たつぷりの愛で育てた子が叛き
横綱はモンゴル人という国技
妻は留守部屋の空気は俺のもの
結局はかかあ天下が平和です
背伸びしてママにタッチのボクがいる

優子
一子
ゆかり
哲夫
野薫
ヨシエ
利尚
洋一
堅坊
晃

順子
利子
えい子
正和

背伸びしてのぞいてならぬ露天風呂
初アト小洒落た店を予約する
下の子を抱けば僕もと背伸びする
無理しても高嶺の花に手をのばす
羅生門背伸びして観た京マチ子
縮みゆく脳に背伸びをさせてみる
一強によいしょしている永田町
過半数これさえあればどうにでも
夫にもマツチヨにも勝つ腕相撲
高齢者お肉一食当り前
小兵力士大きく見せる心意気
えらいこつちや僕の電池が切れかけや
辛さが続くといいいね空を抱く
欠かさぬ朝の日課のお味噌汁
明日というドラマを信じつつ眠る
詳しくはWEBを見ると言われても
コンピニの弁当続く妻の乱
大好きと言ったばかりにまたきゅうり
お出掛けが三日続いて電池切れ
しっかりと握手も一度会うために
新しい命抱かせてくれました

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

健彦 雅尚 美智子 千賀子 寅男 正彦 武彦 健二 久美子 厚子 ひろ介 廣光 ちあき つな子 弘 花門 修平 恭子 耕治 きりこ ひとみ 隆昭 心 規予子 敏治

未知を知る宇宙の神秘はやぶさに
もういいよ頑張ったねと笑う星
北斗星父の道標だと思ふ
一か八かの手術に星空見て祈る
あの星を亡夫の星と決めている
さそり座か妻のこぼに毒がある
凧いでいる心に遠い波の音
リュウグウの謎に魅せられ胸が沸く
波乗りの下手な夫の丸い背な
道頓堀にインバウンドのツアー客
頼むからほっておいてと言う息子
頼み癖ついて自力の芽が出ない
泣きなさい笑いなさいと鴉鳴く
AIに付度などは頼めない
取り敢えずビールを頼む夜勤明け
万策が尽きて残るのは神頼み
頼まれて嬉しくなつて友になる
ジョークですと前置きしなきゃ通じない
受け狙うはずのジョークで墓穴掘り
堅物もジョーク一つで人を変え
ジョークですか笑つた方がいんですか
尖がった男へ聞かせたいジョーク
ジョークでは済ませぬ刺のある言葉
断われジョークですよと照れ隠し
スタンドパー短い足がぶらさがる
トランプがゆらゆら揺らす世界中
手練手管ノとも言わずイエスとも

静子 桂子 ゆみ子 五月 みつ江 信二 恵子 隆雄 さくら タカ子 珠子 大輔 益子 義泰 ふさゑ 喜代志 勝彦 世紀子 輝子 洋二 英夫 信子 玄也 雲水 和美 康信 山さくら

魂がさ迷うてます墓仕舞
夏の午睡君にゆらゆら会いに行く
足元ゆらゆら力めば力むほど
星空がきれいな貧しかった昭和
老けて行く緊張感に揺れてます
緊張でしどろもどろになる私
手汗かき声震わせるあかんたれ
仲人が緊張ほぐす見合い席
緊張が続く勤務で思う胃
心臓がどきりテレビの警告音
気を付けて玉音聞いた遠い夏
国と国緊張感の増す世界
緊張が世界を走るツイッター
年の功皮肉も交え指導する
雨を待つ稲作のくに神妙に
鍵かけた確かに掛けたチト不安
梅雨晴れ間干し直しする羞恥心
心にも少しワインを堅い意地
認知症心の闇は見当らぬ
裏表心の中に棲む仏
若者ところを結ぶ笛太鼓
取り扱い注意ところは壊れ物
セ・ボンまだ燃えているまだ傘寿
受けとめる母の心は深い森
好きという呪文にこころ溶けていく

長柳会(大阪) 辻村 ヒコ報

明子 多喜子 憲彦 ひろ子 ヒロ 靖博 隆明 たけし 弘美 幸子 淳司 和代 旅人 洋二 千代 孝 郁夫 三和子 光弘 由夏 隆彦 正美 直樹 ふみ 孝代

酒タバコ止めた男が先に逝く
熟年離婚染いたものは砂の城

八尾市民川柳会(大阪) 中園

清報

何もかもブラックホール飲むという

涼子

谷折りのハザードランブ医者通い

耀一

悲しい色で晩夏の蝶は舞い納め

美智子

ひたすらに生きて夜明けの月を抱く

壽峰

鬱蒼の森木漏れ日のフアンタジー

あかり

夏の日ブランコ風が乗っている

みどり

時間軸今日は昭和の一日で

卓郎

釣り糸を垂らしたままの小半時

恵

明日は明日今日一日を遊びきる

ダン吉

地車囃子流れて急ぎ足になる

紀雄

あかつきの夜明日指してベン磨く

かこ

頬杖をついて佇む風の駅

寿之

隙のあるかたちで隙のない器

欣之

駢足の晩夏見送る萩桔梗

恵子報

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

慰められたのは私の方だった

亜成

人として箍がはずれた事件事故

鈍甲

隠しとおし後はあの世へ持ってゆく

修

正博

子は親に親は子供に教えられ
執念を払い身軽な心地良き
紆余曲折隠して廻る母の独楽

薫子

あれこれと隠し続けて出る選挙

信子

2万余の兵士慰霊の沖繩忌

銀杏

しつかりと叱りしつかりとハグをする

高鷲

髪はらり罪を重ねた通り雨

仁

湯で戻し時々こころ丸くする

和織

青いインクが滲んで届く計の知らせ

星雨

しとしとの雨が二人を寄り添わす

美砂子

悲しみに添うわがごとくのように添う

茜

独り暮らし友の寂しさ慰める

ルイ子

別れ際笑顔の下にある涙

賢子

喜怒哀楽に酒はコロボをしてくれる

弘一

嘘ひとつ隠して嫁に行きました

都夫

太陽がとてもし恋しい夏野菜

朝子

慰めに買う百均のバラの花

かすみ

子の隠すものは何でも宝物

博泉

川柳藤井寺(大阪)

太田扶美代報

釈迦の掌の広さこの頃持て余す

久仁雄

手の零八月の雲許さない

しげ子

手作り育ててた子等はネット品

喜代子

手ごたえはあったお酒のあての鮎
逢う時も別れる時も手を握る
温かい手と手で紡ぐ介護の輪

瑠美子

相部屋の温度は友の思いやり

信二

線引きをしないで繋ぐ平和の手

キーキ

半生を自在に生きて懐手

シルク

母の手を引いてお参り父の墓

フジ子

手の平で転がされつつ年をとる

俊雄

手のひらに汗で流れたカンニング

一文

緑風のゴーヤの陽よけ子ども園

育代

平気では見れない京アニの現場

光男

振られるのに慣れて無謀なプロポーズ

一歩

好き嫌いゴーヤのが味きめつける

かずお

好きな道だから挫折も平気です

絹子

溺れても平気すぐまた這い上がる

ひろ子

翠洋会(大阪)

大久保眞澄報

夏だより西瓜食べごろ母が待つ

弘子

終戦日忘れてならぬレイクエム

満作

水茄子のもてなしピールの美味しいこと

舞夢

宴果てもとの老いへと戻される

敬子

空しさと空瓶残し宴果てる

希久子

女子会の酒量声量最大値

眞澄

大自然が四季の宴をする日本

楓葉

宴会部長のあいつが家で無口とは

げんえい

一滴も飲まずに宴会盛り上げる

義

クリームを抑えて睦ぶ嫁姑

志華子

クレームをやんわり躲す年の功
捻子ゆるみ今朝まだ食べてないと言う
卑弥呼説大和派熱い郷土愛
朝顔にエールをもらう散歩道
危険物シールを妻にソツと貼る
朝顔に清をもらってシヤンになる
向日葵を見るたび背筋立て直す
どん底を知る人間の生き残り
メ切りに追われ車椅子九十三
体調の良し悪しはかるのが日課
泥かぶる覚悟で吐いている苦情
望月君50年目のV頼もしい
蝉しぐれ命の限り鳴くがよい
風呂上がりビールに勝る物はない
ひまわりの笑顔でもらうお中元
愚鈍だがまっすぐ生きた自負がある
無死満塁直球勝負男気

城北川柳会(大阪) 近藤

皆の無事その他何も望まない
飲むと湧く名案醒めて泡と消え
余祿読む明日へ生きる糧つかむ
うんざりの湿気に髪をかきあげる
究極の優しさにじみ出る母性
隠し事あってよい味でる夫婦
付度をした役人が出世する
具体案ないまま増える核のゴミ

大子 恭昌 和夫 すみ子 弘美 千枝子 桃花 昭 千歩 富子 廣子 理恵 善之 蕉子 浩二 行久

優しさが伝わってくる糸電話
誘ってきた君ここ割り勘という
優しさが満ちあふれる皇太后
ふるさとの噂やさしい風に乗る
貧しさが生きたやさしさ磨いてる
愚痴聞いてくれる優しい人が好き
手遅れだが奇跡信じて顔パツク
良いことがあると優しい風に逢う
父の背を跳び箱にしてぬげめなく
雨続き薩摩の母が案じられ
無理押しも出来ずたちまち妥協案
60年振りに味わうクジラ肉
案の定あの娘遅れてやってくる
好奇心あるから老けぬ僕の脳
その他でも一部の矜持残してる
お金さえあればその他は気にしない
仲直りするには金が必要のです
三叉路で思案しているフリーター
松葉杖優しい人に今日も会う
ちよっぴりは悔しいですがその他です
G20板門店に負けました

和夫 照代 志華子 たもつ 正彦 峰子 榮子 満作 弘委智 克己 俊雄 久美子 高志 武彦 捷二 満洲夫 郁夫 洋志 寛昭 勝弘 正

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

前へ前へ働き蟻の一直線
夕日蹴り今日を転がす地平線
こちらから蹴ってやったとフラれる
黒潮へ与那国島へ丸木舟

芳光 楓花 紀の治 くにこ

海中のプラゴミ垂れ流すヒト科
ゴミとしてたまにプライト見せ付ける
薄味でぐいぐい飲める平和論
片付ける為にボックスまた増える
勢いはぐいぐい内心ハラハラ
宿敵もゴミと思えば憎めない
憎しみの波形哀しいものを蹴る
バラまいたゴミに命を狙われる
ぐいぐいもいいが俺にもあるリズム
ぐいぐいと飲んだ私が馬鹿だった
ジパンの尻に見惚れて蹴躓く
AIの頭脳がヒトを蹴りはじめ
ぐいぐいと手応えあつて釣った靴
高齢者いずれ私も燃えるゴミ
うちの草抜かれぬいよう花盛り
物忘れ浮世のゴミもいざ蹴れ
モニターに写し出された俺の雨
向こう脛蹴られ弁慶の苦しみ
天気姉さん下駄蹴つ飛ばし見事晴れ
貫一はお官を蹴って憂さ晴らし
蹴ることはできそうにない蟻の足
世の中に役立つ事を少しでも
つらいけど亡妻の古着はゴミに出す
ぐいぐいと行けぬ気質の山陰人
演説にグイグイひかれ投票日
いつまでも働かされる粗大ゴミ
豪雨でも怯みはしない呑み仲間

照彦 寿代 みちを 幸子 芳山 ゆたか 美ツ千 麦青 雄大 隆昌 石花菜 小鹿 風露 由紀子 けいこ 博子 熊四郎 七七 七 七 正男 余光 道唱 重忠 鈴野 久子 規雄 完司

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	15日(日) 13時締切 合格・年頃・叱る・自由吟	寝屋川市立産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	15日(日) 14時締切 気兼ね・とっさ・席題 共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
豊中 くせい 川柳会	16日(月) 13時50分締切 不足・握る・まさか・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	17日(火) 13時30分締切 判定・古い・パソコン・見直す 自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	18日(水) 13時45分締切 印象吟・客・包む・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川柳 とんだばやし 富柳会	21日(土) 13時締切 第69回富田林市民川柳大会	富田林すばるホール 2階小ホール 詳細は本誌9月号127頁参照 〒584-0064 富田林市不動ヶ丘8-31 山野寿之
岸和田 川柳会	21日(土) 14時締切 長寿・届く・短い・マンネリ	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-33-19 中岡香代
川柳 塔 みちのく	21日(土) 17時締切 ピンク・遊園地・チャンネル	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 塔 すみよし	21日(土) 14時15分締切 予感・救う・ちびちび	住吉区民センター2階 集会室4 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
はびきの 市 川柳会	22日(日) 14時締切 無・才能・テンポ	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	22日(日) 13時締切 自由吟・ドア・面倒・読む 席題	県民ふれあい会館 4階(県生涯学習センター) 鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大 川柳会	23日(月) 13時締切 残高・落とす・待ちぼうけ 雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
和歌山 三幸 川柳会	28日(土) 13時15分締切 ネクタイ・親切・老いる	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
京都 塔の会	30日(月) 14時締切 トリック・雑・ずるい	ハートピア京都 京都市中京区烏丸九丸太町 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な ら	5日(木) 14時締切 意地・のんびり・悩む	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄「奈良」駅④番出口 徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 安土理恵
川柳大阪	7日(土) 14時締切 ここだけ・痛い・沼	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪府都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
城北 川柳会	7日(土) 14時締切 スリム・無縁・耳寄り・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪府城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
倉吉 川柳会	7日(土) 14時締切 ごっそり・ハイカラ・励ます 席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 ま つ え 社 吟	7日(土) 13時30分締切 アウト・残り・先生・森	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市長美保岡町笠浦222-1 相見柳歩
八尾市民 川柳会	8日(日)14時締切 約束・すんなり・添える・雑詠	八尾市安中町3-5-1 洪川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	8日(日) 14時10分締切 兼題=自信・傾く・一部 課題吟=野球の守備位置	和歌山商工会議所 4階 和歌山市西汀丁36 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川柳会	9日(月) 14時締切 鉢・漕ぐ・さぞ・自由吟	西宮市立中央公民館 6階 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「ブレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる 川柳 同好会	10日(火) 13時30分締切 京都・甘い・ぴったり	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール蛸池 蛸池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さ か い	10日(火) 14時締切 音・見上げる・折句:こまつ	東洋ビルディング 4F 堺駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 誘う・足・ふわふわ・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
あかつき 川柳会	13日(金) 14時締切 血圧・細い・黒・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
六甲 川柳会	14日(土) 14時締切 祭り・役割・呑気・自由吟	六甲道勤労市民センター 5階 E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳塔 打 吹	14日(土) 13時30分締切 駅・食べる・脆い・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局

柳界展望

★「第17回鈴鹿市民川柳大会」は6月23日東樽鈴鹿店で開催。同人成績。

特選 新家 完司

よっぱらいと草刈機には近寄らぬ

特選 木本 朱夏

峰打ちの情けを知ってから男

光太夫賞 木本 朱夏

★「第8回卑弥呼の里女流川柳大会」は、7月28日、吉野ヶ里公園駅コミ

ユニティホールで開催。同人成績。

秀句 木本 朱夏

移り気なカモメを待つている港

▽勳 向△

○西宮北口川柳会(兵庫) 役員の交代(9月より)。

会長 梅澤 盛夫氏

副会長 緒方美津子氏

▽出版△

○8月1日、20周年記念号「そりりゆう会 句集 その十」を発刊。B6

判P55。発行美研アト。

○8月1日、井丸昌紀句集「飲みなはれあんたの

金で好きなだけ」。新業館「川柳作家ベストコレクション」。

▽電話変更△

○富山ルイ子さん(同人・寝屋川市) 0901566715222。

▽訂正とお詫び△

○8月号P40上段2行目丸山礼一↓丸山孔一。

○8月号P111新同人紹介

の近兼敦子さんの〒6610974。住所尼崎

市若王子↓若王寺。

▽新誌友紹介△

茨木市 細田マキ子

紹介者 木本 朱夏

常任理事会 8月9日

出席18名①次年度役員補充について②「同人総会

議案書」作成について④平成30年度会計報告(速報)

③誌友拡大について⑤高野山合祀日程の確認⑥定例確認事項。

新同人紹介

大杉敏夫

— 蘭幸・完司推薦

第28回 枚方市民川柳大会

日時 10月6日(日)午後12時開場

場所 メセナひらかた 2F

(枚方市新町2丁目1番5号)

TEL072-843-5551

宿題 「はばたく」 池田 武彦 選

「ラッキー」 吉岡 修 選

「頷く」 荻野 浩子 選

「仄か」 吉川 哲矢 選

「便利」 中村 牛延 選

「約束」 西 美和子 選

第8回 さんだ川柳大会

開催日 10月15日(火)

12:00開場 13:00出句締切

場所 キッピーモール6F(JR三田駅前)

場兼題 (席題なし・各題2句・欠席投句拝辞)

★「五輪」 藤井 宏造 選

★「わくわく」 上田ひとみ 選

★「休む」 長川 哲夫 選

★「ピンチ」 山口ヨシエ 選

★「たっぶり」 北野 哲男 選

★「自由吟」 堀 正和 選

会費 1500円(お土産付き)

懇親会 3000円(先着40名)

主催 三田市川柳協会

連絡先 堀 正和 TEL079-559-1255

上田ひとみ TEL079-565-1976

締切 午後1時

参加費 1000円(発表誌呈)

欠席投句拝辞

連絡先 池田武彦 TEL072-859-1917

主催 くらわんか川柳会

第46回 東大阪市民川柳大会

日 時 9月29日(日)
 (出句締切 14時)
 会 場 東大阪市民立社会教育センター3階
 電話06-6789-4100
 近鉄布施駅下車 北口三井住友銀行北へ5分
 宿 題 (各題2句・出席者のみ)
 「下 手」 大久保眞澄 選
 「飛 ぶ」 大西 将文 選
 「き っ と」 片岡 加代 選
 「ル ー ル」 小金澤貫一 選
 「外 す」 中岡千代美 選
 「間 (ま)」 藤井 宏造 選
 ※昼食はお済ませの上お越し下さい。
 会 費 1500円 (各題秀句賞・発表誌呈)
 懇親宴 3000円
 問合せ先 穂山 常男
 電話072-923-7421
 主 催 東大阪市民文化連盟
 東大阪市民川柳同好会

富田林市民文化祭

富柳会 第69回川柳大会

と き 9月21日(土) 正午 開場
 (昼食は済ませてお越し下さい)
 と ころ 富田林すばるホール 2階 小ホール
 (電話0721-25-0222)
 (近鉄長野線 川西駅下車 徒歩8分)
 お 話 平井美智子 氏
 課題と選者 各題2句 席題なし
 「眉 」 鈴木 かこ 選
 「豆 腐」 岩佐ダン吉 選
 「籍 」 居谷真理子 選
 「ラッキー」 水野 黒兎 選
 「粋 」 片岡 加代 選
 「事情」 山野 寿之 選
 出句締切 午後1時
 会 費 1500円 (お茶・発表誌呈)
 問合せ 山野 寿之
 (電話090-4308-8339)
 主 催 富柳会・富田林市民川柳会

竹林の風川柳大賞
 (2019年度全国誌上大会)
 作品募集

作 品 雑詠新作2句 (所定用紙・または任意の用紙)
 住所・氏名・電話番号・所属結社を明記のこと
 出句締切 9月30日(当日消印有効)
 投句料 1000円 (郵便小為替に限る)
 選 者 (得点の部)
 やすみりえ 橋倉久美子 他
 (作品の部)
 本田 智彦 西出 楓楽
 発表 川柳いのちの詩12月号予定
 投句先 〒689-0343
 鳥取市気高町飯里84-4
 鈴木公弘方
 川柳同友会みらい事務局
 主 催 川柳同友会 みらい

第43回 鳥取県川柳大会

と き 10月19日(土) 10時開場
 と ころ さざんか会館 5階 大会議室
 鳥取市富安2丁目104-2
 TEL0857-29-7151
 JR山陰本線「鳥取駅」下車
 駅南口より徒歩3分
 出句締切 11時45分 開会13時 席題なし
 ◆一般部門◆
 宿題と選者 (各題2句・披露13時20分)
 「ジョーク」 竹村紀の治 選
 「元 」 寺津とも子 選
 「潤 う」 門脇かずお 選
 「ル ー ベ」 永見 心咲 選
 「椅 子」 杉山 静 選
 「息 」 石橋 芳山 選
 「脱 ぐ」 新家 完司 選
 会 費 2000円 (大会誌・昼食)
 欠席投句 1000円 (締切9月15日必着、用紙自由、小為替)
 投句先 〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1065
 山野すみれ 宛
 ◆ジュニア部門(小中学生に限る)◆
 宿 題 「ゲーム」 斉尾くにご 選
 (2句まで 投句料 無料・用紙自由・学校名・学年記入)
 締 切 9月15日 必着
 投句先 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿1560 斉尾くにご 宛
 主 催 鳥取県川柳作家協会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

○ ○ 年 年 月 月 から から 一年 半年 9800円 5000円 } 該当の方に○をつけて下さい	紹介者	電話	住所	氏名
	(無記入でも可)	—	〒 —	フリガナ

川柳塔のホームページアドレス
<https://senryutou.net>

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
 川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

作品募集

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
 水煙抄 (8句) 川上大輪選
 愛染帖 (2句) 新家完司選
 檸檬抄 (2句) (降る) 水野黒兎共選
 インスレクションナヒ (2句) 鴨谷瑠美子選
 「ハード」 大西泰世選
 「低い」 中谷和郎選
 「センター」 (3句) 居谷春代選
 初歩教室「センター」は12月号発表

11月号発表 (9月15日締切)

12月号
 檸檬抄「しみじみ」
 一路集「返事」「支える」
 初歩教室「熱心」

本社9月句会

とき 9月6日(金) 13時開場・13時40分締切
 ところ アウイーナ大阪 4階 金剛の間
 天王寺区石ケ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし「大嘗祭と新嘗」
 席題「野」
 兼題「祭」「ぼ」と
 「残」と
 「手」
 宇賀史郎氏
 松岡篤選
 上田宏選
 今井万紗子選
 藤井則彦選
 石田隆彦選
 小島蘭幸選
 会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

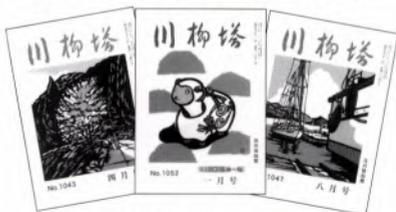
本社10月句会は第25回川柳塔まつりとして、9月28日(土)に開催します。
 (8月号表紙裏を参照して下さい。)

川柳塔WEB句会のご案内

課題「出る」 Sin 共選
 平井美智子
 締切 9月20日 発表 9月25日頃
 投句料 無料
 インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

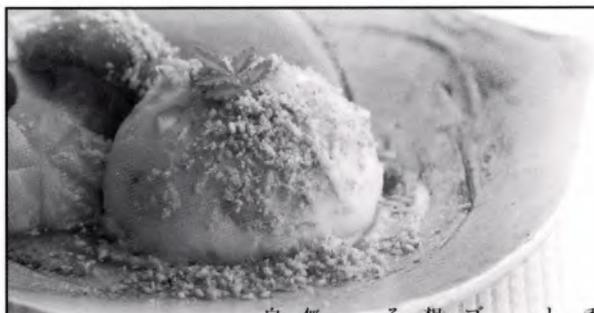
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
 TEL (06) 4800-3018
 FAX (06) 4800-3028
 Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
 ホームページ <https://www.bikenart.com>
 ※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

定価 八百円 (送料97円)
 半年分 五千円 (送料共)
 一年分 九千八百円 (同)
 二〇一九年(令和元年)九月一日発行
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
 花野ビル201号室
 印刷所 美研アート
 編集人 木本朱夏
 発行人 小島和幸
 発行所 川柳塔社
 電話 (06) 6779-1349
 振替 〇〇九八〇四一四九八七九番

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あなたの思いを かたちにします

具体的なアイデアがある方はもちろん、「こんな出版物をつくりたい」という漠然とした思いだけでも結構です。まずはあなたの「思い」をお聞かせください。じっくりと丁寧にお話を伺いながら、それをかたちにするお手伝いをいたします。

美 研 ア ー ト

事務所移転しました

TEL 06-4800-3018 FAX 06-4800-3028

〒531-0061 大阪市北区長柄西 1-1-10

ホームページ <https://www.bikenart.com> Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp

営業時間 平日 10:00~17:00 定休日:土/日/祝